

靈界物語 第四三卷 舍身活躍 午の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四三卷』愛善世界社

2002(平成14)年08月20日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 狂風怪猿 きやうふうかいざん

第一章 烈風 れつふう 一五二

第二章 懷谷 わいこく 一五三

第三章 失明しつめい（一一五四）

第四章 玉眼開ぎよくがんびらき（一一五五）

第五章 感謝歌かんしゃうた（一一五六）

第二篇 月下げつかの古祠ふるほら

第六章 祠前ほらちのまへ（一一五七）

第七章 森議しんぎ（一一五八）

第八章 噴飯ふんぱん（一一五九）

第九章 輸入品ゆにふひん（一一六〇）

第三篇 河鹿かじかの靈嵐れいらん

第一〇章 夜よるの晝ひる（一一六一）

第一章 歸馬きば〔一一六二〕
第二章 雙遇さうぐう〔一一六三〕

第四篇 愛緣義情あいえんぎじやう

第三章 軍談ぐんだん〔一一六四〕
第四章 忍び涙しのなみだ〔一一六五〕
第五章 温愛をんあい〔一一六六〕

第五篇 清松懷春せいしようくわいしゆん

第六章 鱒鍋まつなべ〔一一六七〕
第七章 反歌はんか〔一一六八〕
第八章 石室いはむろ〔一一六九〕

序文
じよぶん

天地てんち惟神かむながらの御庇護ごひごの下もとに口述こうじゆつ開始かいしより今日こんにちに到り殆どほとん十三箇月じふさんかげつと十日とをかの日子にっしを費つひやし、瑞月ずいげつ靈界れいかい物語ものがたり第四十三卷だいしじふさんくわんを龜岡かめをかに於て編纂へんさんし了るをはことを得えました。筆記者ひっきしやも極きはめて熱心ねつしんに寢食しんじよくを忘わすれて就事じうじされたのは、決けつして普通事ふつうじではありませぬ。然しかし本日は大正十一年十一月二十八日陰曆十月十日と云ふ、神かみの道みちに取とつても最もつとも因縁いんねん深ふかき吉祥日きつしやうびであります。冬ふゆの初はじめとはいへ陽氣やうきも極きはめて暖あたかく、梅花ばいくわ匂にほひ花うぐ鳥ひすきた來きたつて君きみが代よの瑞祥ずいしやうの春はるを謳うたふかとはばかり思おもはるるやうな、氣持きもちの良よい日ひであります。十たりの月つき十たりの日は是これ圓満えんまん具足ぐそく完全くわんぜん無缺むけつを意味いするものみです。口述者こうじゆつしやの瑞月ずいげつ、侍者じしやの鮮月せんげつ、松まつの神代かみよ（永遠えいゑん無窮むきうの聖代せいだい）に因ちなみたる姓名せいめいの松村眞澄まつむらまさずみ氏し、北きた光てるの神かみの名なに因ちなみある北村隆光きたむらたかてる氏し、加くはふるに婦人ふじん記録者きろくしやとして加藤明子かとうはるこ氏しの三人さんにんは、相變あひかはらず綾部あやべより出張しゆつちやうして其健腕そのけんわんを振ふるひ、一言一句いちごんいっくを漏もらさず拾ひろひ上げられ

たことを瑞月ずゐげつが衷心ちゅうしんより感謝かんしゃする次第しだいであります。おほもとしうきたいさいしうれうご
参拜さんぱいを濟すませ、其後そのご引續ひきつづき龜岡かめをかにて目出度めでたく本卷ほんくわんを前後ぜんご三日間みっかかんの光陰くわういんに包つつまれて
漸やつやく講了かうれついたしました。惟神靈かむながらたま幸倍ちはへ坐世ませ。

大正十一年十一月廿八日 舊十月十日

本卷は波斯國産土山の齋苑館より神素盞鳴命の命に依り印度の國ハルナの都に
 婆羅門教の本據を構へ、五天竺七千餘ヶ國に有言不實行の教を開き、世界を攪
 亂せむとする大黒主を始め其一派の神等を天地惟神の大道に歸順せしめむと、黄
 金姫母娘の一行と照國別の一行が早くも印度に入りし後、玉國別一行と治國別の
 一行が河鹿峠の南坂に於てバラモン軍の先鋒片彦、久米彦將軍の一隊と出會し言
 靈を打出し敵を坂の下まで追還したる大體の物語であります。途中玉國別の遭難
 より治國別兄弟の對面、五十子姫が夫玉國別の危難を知つて、負傷の夫を介抱せ
 むと萬難を忍びて祠の森まで尋ね來たりたる、悲痛な物語であります。又信仰の
 本義、師弟の情誼、夫婦の親愛、兄弟の友誼、朋友の信義等は、本卷に於て説き
 示されてあります。幸に御一讀あらむことを希望いたします。

大正十一年十一月廿八日 舊十月十日

第一篇 狂風怪猿きやうふうくわいゑん

第一章 烈風れつふう（一一五二）

天地てんちにさやる雲霧くもぎりを 伊吹いぶき拂はらひて世よを救すくふ

三五教あななひけうの神柱かむばしら 神素かむす盞さ鳴の大神おほがみの

神言みこと畏かしこみ音彦おとひこは 玉國たまくに別わけと名なをかへて

道公みちこう伊太いた公純こうすみ公こうの 三人みたりの信徒しんとを引率いんそつし

齋苑いその館やかたを立出たちいでて 冨こがらしすさぶ秋あきの空そら

河鹿かしか峠たうげの急坂きふはんを 登のぼりつ下くだりつ進すすみ行ゆく

目指めざすは印度いんどの月つきの國くに ハルナみやこの都みやこに蟠わたかまる

八岐やまた大蛇たをろちや醜狐しうぎつね 曲鬼まがおに醜しこの曲魂まがたまを

誠の道に言向けて

至仁至愛の神國を

此地の上に建設し

神の御稜威を照さむと

勇み進んで齋苑館

後に眺めて出でて行く

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして

玉國別の宣傳使

三人の従者と諸共に

はるばる進む首途を

完全に委曲に守りまし

千變萬化の活動を

漏れなく落ちなくすくすくと

述べさせ玉へ惟神

神の御前に瑞月が

畏み畏みねぎまつる。

玉國別の宣傳使は三人の供人と共に、黄金姫、照國別一行の後より言依別命の

谷間に轉落して、第一天國を探検したりといふ、河鹿峠を膝栗毛に鞭ち、石車の

危難を避け乍ら、聲も涼しく宣傳歌を歌ひつつ、山の尾の上を渡り行く。

折から吹き来る暴風はライオンの數百頭一時に吼えたけるが如く、唸りを立てて、

遠慮會釋もなく岩石も飛べよ、草木も根底より抜け散れよと言はむ許りに吹きま
くる。玉國別は「何これしきの烈風に辟易してなるものか、暴風何者ぞ、雷霆強
雨何ぞ恐れむや」と勇氣を鼓し、向ふ風に逆らひ乍ら、急坂を登り行く勇ましさ、
壯烈は、鬼神も驚く許りに思はれた。漸くにして山上の稍平坦なる羊腸の小路に
登り着いた。

道公「玉國別様、板を立てたやうな胸突坂を登る眞最中、弱味につけ込む風の神
の奴、滅多矢鱈に暴威を揮ひ、吾々を中天に巻上げむとして、力一杯努力してゐ
やがったぢやありませんか。一つここらで風の歇んだのを幸ひ休養をやつたら如
何でせう」

玉國別「アハ、今からそんな弱音を吹いてたまるものか、モウちつと度胸を
据ゑなくちやなるまい」

道公「決して私が弱音を吹くのぢやありませんか。風の神の奴、滅多矢鱈に吹きや
がるものだから、私も一寸吹いてみたのです。かうして木々の木の葉を無残にも
吹散らし、まるで雑巾以ておさん奴が縁の埃を拭いたやうに綺麗サツパリふきや

がつたぢやありませんか

伊太公「オ伊道公、弱音を吹くより法螺なと吹いたら如何だ」

道公「エ、伊太公、貴様の鼻はまるで鍛冶屋の鞆のやうにペコペコさして、フー

スーフーと泡まで吹いてるぢやないか。氣息奄々、呼吸促迫、體熱四十三度

といふ弱り方ぢやないか。他の事をゴテゴテ言ふ所かい、自分の蜂から拂うてか

かれ」

伊太公「これはこれは「イタ」み入つたる御挨拶、伊太公もサツパリ頓服致しま

した」

道公「頓服とは何だ。インフルエンザの風邪を引いて、キニーネでも飲んだやう

なことを吐くぢやないか」

玉國別「コリヤコリヤ兩人、幸先の悪い、悪魔征討の道行の始めに當つて、爭論

をやるといふことがあるか、チと沈黙致さぬか」

道公「ハイ、レコード破りの烈風でさへ沈黙したのですから、時刻が廻つて來れ

ば、自然に發聲器の停電を來すでせう。出かけた聲だから、出す丈出さねば中途

に止めると、また 又もやりんびやう 痲病をわづらひますからなア、アハ、ハ、ハ、

玉國別たまくにわけ 「あのすみこう 純公を見よ。貴様きさま のやうに鳴子なるこ が鈴すず のやうにガラガラ言はず、沈黙ちんもく を始終しじう 守つてゐるぢやないか。男をとこ といふ者はさうべらべらと下くだ らぬことを喋しゃべ ったり、白しろ い齒は をさうやすやすと人ひと に見み せるものぢやない。人間にんげん は黙だま っている位床くらあゆか しく見み えるものはないぞ……口くち あけて腹綿はらわた 見み せる蛙かはづ 哉……といふことを忘わす れぬやうにしたがよからうぞ」

道公みちこう 「ハイ承知しょうち 致いた しました。純公すみこう は貴方あなた のお目め からそれ程床ほどゆか しく見み えますかな。

さうすると此こいつ 奴も矢張やっばり、スミにもおけない代物しろもの ですなア。アハ、ハ、ハ、

玉國別たまくにわけ 「いらぬことを言い ふものでない。沈黙ちんもく が男をとこ の値打ねうち だ。まるで貴様きさま と旅行りよかう をして居ゐ ると雲雀ひばり や雀すずめ の飼主かひぬし みたやうだ。困こま った奴やつ だなア」

伊太公いたこう 「時に玉國別様たまくにわけさま、随分ずぶん 此河鹿峠このかじかたうげ はキツイですが、どうぞ無難ぶなん に風かぜ の神かみ の鋭えい 鋒ほう を避さ けて通過つうくわ したいものですなア。暫しばら く沈黙ちんもく したと思おも へば、秋あき の風かぜ だから再ふた び低氣壓ていきあつ が襲しふらい 來して、一萬いちまん ミリメートルの速力そくりよく でやつて來こ られちや、何程なにほど 押しお つけの強つよ い貴方あなた でも堪たま りつこはありませぬぜ」

玉國別「オイ、それ程發聲器を虐使用すると、レコードの壽命が短縮するぞ。少しは大切に使用せないか」

伊太公「何分秋漸く深く、木々の木の葉がバラバラバラと遠慮會釋もなく落ち行く時節ですから何とはなしに寂寥の氣分に打たれて沈黙してゐる事が出来ませぬワイ。チツとは喋らして貰はぬと、心細いぢやありませんか」

玉國別「そんな馬鹿口を喋る暇があつたら、宣傳歌を歌つたら如何だ。歌は天地神明の心を感動させ、山河草木を悦服させる神力のあるものだ」

伊太公「宣傳歌を歌つても宜しいか。そんならこれから歌ひませう。オイ道公、純公、チツとは粗製濫造品だが、後學の爲に耳をすまして聞くがよからう。伊太公の當意即妙の大宣傳歌を……エヘン……」

道公「早く歌はぬかい。前置ばかりダラダラとひつぱりよつて、辛氣くさいわい」

伊太公「足曳の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を獨りかもねむ……といふ歌があるだらう。それだから、足曳の山の上で歌ふ歌はチツとは足が長いぞ、エツヘン。それ聞いた」

道公みちこう「何をなに聞くのだ。無言むごんの歌うたが聞きけるかい」
伊太公いたこう「不言實行ふげんじつかう、言外げんぐわいの言げん、歌外かぐわいの歌か、隻手せきしゆの聲こゑ、といふ事ことがあるだらう。風かぜが吹ふく音おとも、鳥とりの囀さへづる聲こゑも、蟲むしの鳴なく音ねも、皆自然みなしぜんの歌うただぞ。俺おれがかう囀さへづつてを
るのもヤツパリ戀欲歌れんよくかの一種いっしゆだ。ウタウタと云いはずに俺おれの奇妙きめう奇天烈きてれつな大宣傳歌だいせんでんか
を聞きいたら貴様きさまのウタがひも晴はれるだらう……

神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと惡あくとを立別たてわける

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 直日なほひの眼まなこで見渡みわたせば

伊太公いたこうさまは善ぜんの神かみ 道公みちこうさまは惡あく神かみだ

玉國たまくに別わけは宣傳使せんでんし 一寸ちよつとお偉えらい方かたぢやぞえ

黒くろい顔かほして墨すみのよに 熏くすぶつて居ゐるは純公すみこうか

あゝ惟かむながらかむながら神々々かむながらかむながら 叶かなはないから止やめておかう

道公みちこう「コリヤ伊太いた、何をなに云いふのだ。何なんと下手へたな歌うただのう」

伊太公「イタれり盡せりといふ迷歌だらう。歌といふものは餘り上手にいふと、風の神奴が感動して、又暴威を揮ふと困るからなア。そんな事に抜目のある伊太公ぢやないぞ。風の神が呆れて蟄伏するやうに、ワザとに拙劣な歌を歌つて風の神奴を遠ざけたのだ。或る人の狂歌にも……

歌よみは下手こそよけれ天地の

動き出してたまるものは。

……といふ事を知つてゐるか、エーン」

と無暗矢鱈に喋りちらし、うつつになつて細路を前後左右に飛びまはり、踏み外して一間ばかり岩道から迂り落ち、向脛をすりむき、

伊太公「イ、イタイ」

と目を顰め、鼻にまで皺をよせ、向脛をさすり「エへ、へ、」と笑ひ泣く其可笑しさ。

道公みちこう「そら見よ、餘りアゴタが過ぎると其通りだ。腰拔歌計り詠むものだから、とうとう足曳あしびきの山やまの上うへで足を引ひかき、すりむいて、イタイタしくも、伊太公いたこうの其そのザマ、それだから伊太公いたこうなんて言いふやうな名なは、つけぬがいゝのだ。のう純公すみこう、さうぢやないか、伊太公いたこうは丸まるで黽いたちのやうな奴やつだ。とうと、最後さいご屁ごをひつて、伊太いた張ばつた、イヤイヤくたばつたぢやないか、ウツフ、

純公すみこう「いたた立てたやうな坂道さかみちふみ外はし

伊太いた々々いたしげに伊太いたさまが泣なく。

【すみ】ずみに心こころを配くばる純公すみこうは

どこもかしこも【すみ】渡わたりける

道公みちこう「神かみの道みち、ふみ外はしたる伊太公いたこうの

泣なき苦くるむは道みちさまの罰ばち。

道々みちみちにさやる曲津まがつを言向ことむけて

進すすみ出いでます道公司みちこうつかさ」

伊太公いたこう「道公みちこうよ、純公すみこう、貴様きさまは何なにをいふ

どの道みち此儘このまま「すみ」はせぬぞよ。

伊太公いたこうが、今いまにイ夕い目見めみせてやる

融いたちの最後さいご屁こべひらぬよにせよ」

玉國たまくに別わけ「道公みちこうの道みちをたがへず伊太公いたこうの

威猛ゐたけり狂くるふ舌したも「すみ」公こう」

純公すみこう 玉國たまくにの別命わけのみことに従したがひて
今日けふは不思議ふしぎな芝居しばゐ見る哉かな」

道公みちこう 又またしても風かぜの神奴かみめがソロソロと

山やまの横面よこづらなぐり相さうなる。

サア行ゆかう、早行はやゆきませう宣傳使せんてんし

風かぜの神奴かみめが追おひつかぬ内うち」

玉國別たまくにわけ 又またソロソロと行ゆかうか、モウ此先このさきは下くだり坂ざかだ。併しかし乍ながら下くだり坂ざかは用心ようじんを
せなくては、石車いしぐるまに乗のつて轉落てんらくする虞おそれがあるから、暫しばらく口くちを噤つまへて、足あしの先さきに力ちから
を入いれ、コチコチとアプト式しきに下くだるのだ。餘あまり喋しゃべつてみると、外ほかへ氣きを取とられて、
足許あしもとがお留守るすになるから、一同いちどうに注意ちゆういを施ほしておく」
道公みちこう 〇ハイ畏かしこまりました。オイ皆みなの奴やつ、大將軍だいしやうぐんの命令めいれいだ。沈黙ちんもくだぞ」

伊太公いたこう「喋れと云つたつて、かう向脛むかひづねをすり剥いては痛くつて、喋る所しゃべるところかい。足あし計ばかりに氣きを取とられて仕方しかたがないワ」

純公すみこう「そんなら伊太公いたこう、お前は道公みちこうさまの後あとから行ゆけ、おれが後あとから氣きをつけてやる。宣傳使せんでんしの命令めいれいには、決けつして今後違背こんごゐはい伊太公いたさんと誓ちかふのだぞ」

道公みちこう「ヤアそろそろと純公すみこうの奴やつさん三千年せんねんの沈黙ちんもくを破やぶつてシヤシヤり出だしたなア。沈黙ちんもく々々もくちんもく」

といひ乍ながら、玉國別たまくにわけを先頭せんとうに一足ひとあし々々ひとあし爪先つまさきに力ちからを入いれて降くだり行ゆく。伊太公いたこうは足あしをチガチガさせ乍ながら、又またもや沈黙ちんもくの封じ目ふうめが切きれて、雲雀ひばりのやうに嘖さへつり出だした。

玉國別たまくにわけの宣傳使せんでんし 此急坂このきふはんを下くだる時ときや

決けつして頭あごを叩たたくなと 誠まことに嚴きびしき御命令ごめいれい

さはさり乍ながら伊太公いたさまは 足あしの痛いたみに堪たへかねて

どうしても沈黙ちんもく守まもれない ウンウンウンウン アイタタツタ

痛いたいわいな痛いたいわいな痛いたいわいな そんなに痛いたくば一寸ちよつとぬかうか

イエイエさうではないわいな
朝あさから晩ばんまで居ゐたいわいな

アイタタツターアイタタツタ
板いたを立てたたよな坂路さかみちに

尖とがつた小石こいしがガラガラと
おれを倒たふさうと待まつてゐる

此こいつ奴やつあヤツパリ月の國くに
大黒主おほくろぬしの眷族けんぞくが

玉國たまくに別の征途せいとをば
邪魔じやましてやらむと待まち構かまへ

小石こいしに化ばけて居ゐるのだろ
コリヤコリヤ道公みちこう氣きをつけよ

これ程ほどキツイ道公みちこうの
どうまん中なかにガラクタの

腐くさつた石いしめが竝ならんでる
これはヤツパリ道公みちこうの

身魂みたまの性來しやうらいが現あらはれて
道みちにさやるに違ちがひない

あゝ惟かむながらかむながら神々々
ガラガラガラ アイタゝツタ

それぞれ俺おれをばこかしよつた
向脛むかひづねすりむ【いた】其上そのうへに

又またもやおけつをすりむ【いた】
前まへと後うしろに傷きずをうけ

どうしてこんな急坂きふはんが
さう易々やすやすとテクられよか

向むかふの空そらを眺ながむければ
又またもや怪あやしい雲くもが出でた

あの一塊の妖雲は 風の鞆に違ない

皆さま氣をつけなされませ 又もや前のよな烈風が

吹いて来たなら何としよう 空中滑走の曲藝を

演じて谷間へ轉落し 頭も手足もメチャメチャに

木端微塵となるだらう 思へば思へば此峠

劍の山か針の山 血を見にやおかぬと見えるわい

旭は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

星は天より落つるとも 海はあせなむ世ありとも

神の恵のある限り 怪我なく此山スクスクと

通らせ玉へ伊太公が ウントコドツコイ、アイタタツタ

又々石に躓いた 神も佛もないのかと

心淋しくなつて来た こんな事だと知つたなら

お供をするのぢやなかつたに コラコラ道公純公よ

貴様は唾になつたのか 俺ばつかりに物言はせ

返答せぬとは餘りぞよ　オツト待て待てコリヤ違うた
玉國別の宣傳使　嵌口令をウントコシヨ
布かれたことをウントコシヨ　サツパリ忘れて居りました
廣き心の神直日　大直日に見直して
どうぞお赦し下さんせ　あゝ惟神々々
叶はぬ時の神頼み　チツとは聞いてくれるだる
コリヤ又きつい坂だなア　アイタタタツタ又こけた

と言ひながら、河鹿峠の大曲りの山の懷に進んだ。天地もわるる許りの強風、又
もや猛然として吹起り、流石の玉國別も最早一步も進む能はず、木の根にしがみ
つき、神言を奏上し乍ら、風の渡り行くを待つ事とした。三人も玉國別に倣つて、
木の根にしがみつき、ふるひふるひ目をつぶつて、風の過ぐるのを待つてゐる。

（大正一一・一一・二六　舊一〇・八　松村眞澄録）

第二章 懷谷（一一五三）

河鹿峠の岩石も 草木も残らず飛び散れと

云はむばかりに吹きまくる 大山嵐に進みかね

玉國別の一行は 道の傍の木々の根を

シツカと搦み打伏して 風の過ぐるを待ち居たり

一時二時はや三時 待ても止まぬ暴風は

虎狼の吼ゆるごと 呻りを立てて吹きつける

日は西山に傾いて 黒白も分ぬ眞の暗

茲に四人の一行は 施す術もなきままに

是非なく一夜を明かしけり 丑満過ぐる時もあれ

さしもに烈しき科戸邊の 神は漸く休戦の

喇叭を吹いて鎮まりぬ 玉國別の一行は

初めて胸を撫で下し 心を定めて夜明けまで
やすやす眠りに就きにける。

玉國別一行は漸く烈風の静まりしに胸撫で下ろし四邊を見れば、眞黒の暗の帳は眼前迄濃に包んでゐる。已むを得ず度胸を定め道側に蓑を布き夜の明くるを待つこととした。不圖目を覺せばホンノリとそこら中が明るくなつて居る。道公は目を擦り乍ら、

「宣傳使様、どうやら夜が明けたやうです。昨日は肝腎の門出の日であるにも拘はず、暴風襲來で大變に吾々を面喰はせたぢやありませんか。あんな悪日は何卒續かない様にして欲しいものですな。今日は新しい日天様がお出ましになつたら一同が充分にお願を致しませうか」

玉國別「どうやら今日も風模様らしい。あんまり、仕様もない事を喋り立てるものだから、大神様のお戒めに會つたのだ。これから各自に口を慎まねばならぬぞ。言靈の幸ふ國だから、天地が曇るのも、風が吹くのも、大洪水が出るのも、

みんな人間共の言靈が悪いからだ。吾々は言靈を以て、あらゆる枉津神を言向和

す大使命を持つて居るのだから、假にも縁起の悪い事は云はないが宜いぞ

道公「さうですな、伊太公の奴、しようもない脱線だらけの宣傳歌を得意らしく

大風の向ふを張つて吹立てよるものだから神罰が當つて、門出の血祭りに向脛を

擦り剥き、赤い血を出したのです。大體二人連れとか三人連れとかなら宜かつた

でせうが、一行四人連れと云ふのですから、あまり縁起の宜い事もありませぬわ

い」

玉國別「コリヤコリヤ道公、お前こそ言靈が悪いぢやないか、四人なんて、しよ

うもない事を云ふな、何是四人と云はぬのだ」

道公「四人と云へば餘つた人の様で尚更縁起が悪いぢやありませんか。私だつて

決して餘り人間ぢやありません。やつぱり一人前の裸百貫の色男ですからな」

玉國別「あれを見よ、丑寅の空に怪しい黒雲が出た、あれは風玉だ。あいつが一

つ吹きつけて来ようものなら昨夜の烈風どころぢやない。早く行進を續けて河鹿

峠の懐谷まで到着し、暫く避難をしようではないか。サア行かう」

とスツクと立ち上り慌しく蓑を着し笠を手にシツカと握り杖をつきながら、急坂を下りつつ、懐より麵麩を出してかじりつつ行く。漸くにして河鹿峠の下り坂の中程の懐谷と云ふ南向きの、こんもりとした日當りのよき谷間へ着いた。此箇所は山道の一丁ばかり上である。玉國別一行は漸く此處に到着し蓑を敷き風の通過するのを待つ事とした。

河鹿峠に群棲する澤山の尾長猿は暴風の襲來を前知して何れも此懐谷を屈竟の避難所として幾千とも知れぬ程集つて來た。さうして玉國別一行の姿を見て驚いたと見え、四五間ばかり近寄り周圍をアトラス形に取まいてキヤツキヤツと目を剥き牙をならし啼き叫んでゐる。

道公は數千匹の猿に圍まれたのを見て、
「何とマア澤山な庚申の眷族だのう。何奴も此奴も人間に能う似た姿をして赤い顔で吾々を護衛してゐる。此奴もやつぱり風の神が恐いと見えて此處へ避難して來たと見えるわい。庚申の眷族は猿と云ふ事だが庚申と云ふ奴は風を引かす神だ。庚申の晩に風邪に罹ると次の庚申の日まで本復せぬと云ふ事だが、ヤツパリ眷族

だけで風に恐れて此處まで陣を引いたのだなア。エー、キヤツキヤツと八釜しう吐かすな、耳が聾になつて了ふわい。亡國的の悲調を帯びた哀音を共唱しよつてアタ縁起の悪い。むかつく代物だなア」

玉國別「アハ、、またしても、はつしやぎ出したな。ア、困つた男を連れて來たものだ。おい道公、お前の口は身體より三千年ばかり前へ生れてると見えるな」

道公「三千年前へ口が生れるから三千口と申すのです。アハ、、三千世界を立直す宣傳使のお供には逃へ向でせう。それ道の以て道とすべきは眞の道に非ず。道とせざる所に眞の道あり。三千年の御艱難御苦勞の神徳現はれて天地の間に充ち満ちにけり。：奥山に紅葉は照れど道なくば如何でか人の訪ひ來るべき：と申しましてな、世の中に何が大切だと云つても道位大切なものはありませぬよ。道といふ字はコトバと読みませう。神の教に「太初に道あり。道は神なり、神は道と偕にあり。萬物これによつて造らる。總て世の中の造られたるもの一切は道によりて造られざるはなし」とチヤンと神訓に現はれてみませう。それだから此道公は神の道にはなくてはならぬ人物ですよ。役者の子が大根を喰はぬのも道の爲、

浄瑠璃家の子が根深を食はぬのもやつぱり道のためですからな。アハ、ハ、ハ、ハ、

伊太公「モシ宣傳使様、神様の教には神も佛事も人民も鳥類畜類蟲族迄も助ける

とお示しになつてゐるぢやありませんか。これ丈ヶ澤山に庚申の眷族が吾々の尊

い言靈を聞かして貰はうと思つて集まつて來たのですから、一つ廣大無邊の御神

徳の籠つた言靈を振舞つてやつたらどんな物でせうなア」

玉國別「ウン」

道公「オイ、伊太公、措け措け。貴様の宣傳歌にはウンザリして了つた。又足曳

の山道で向脛を擦り剥いて泡を吹く位がおちだから」

伊太公「向ふの脛ならチツとも痛くないが、やつぱり己の脛だから一寸は困る。

然し乍ら前車の覆へるは後車の警めと云ふ聖訓を體得した伊太公だ。先の失敗に

懲りて今度はあんなへまな事はやらぬ積りだ。今度こそ本眞劍に宣傳歌を歌ふか

ら謹んで聞け。初めから馬鹿にしてかかられると根っから氣乗りがせぬので碌な

歌も歌へぬぢやないか。エーン」

道公「さう偉相に法螺を吹くのなら、一つ立派な宣傳歌を奏上して見よ」

伊太公「俺の宣傳歌は今度はとつとときの特別上等品だ。山河草木其聲に従ふと云ふ生言靈の發射だから用心せないと千里側へ吹き飛ばされて了ふぞ。かう云つても俺の決して法螺でも自慢でもないから眞面目に聞かうよ。オイ、純公も心を清め耳を洗つて拜聴しろ。抑も言靈の權威と云ふものは鬼神を泣かしむる豪勢なものだ。かうして宣傳使のお供を命ぜられたのも一方より見れば言靈の練習をして將來立派な宣傳使になるためだ。然し乍ら貴様の様な仕人物では到底満足な宣傳使にはなれないよ。總て人間は天才が手傳はねば駄目だからな」

道公「天才が聞いて呆れるわい。貴様が宣傳歌を歌ふと天地の大神様が怒りを發し給ひ忽ち天災を下し給ふから困つた天才だ。アハ、ハ、ハ、ハ、エー猿の奴、キヤツキヤツ吐しよつて根つから俺の言靈が不貫徹に終りさうだ。こんな處で言靈を發射する馬鹿があるかい。貴様は機を見る事を知らないから駄目だ」

伊太公「エヘン、機に臨み變に應ずるは天才智者の敢てよくする所、迂愚者の測知し得る限りでない。サア之から庚申の眷族に向つて生言靈の連發銃を發射するのだ。いいか、用心して居らぬと昨夜の烈風の様に吹き飛ばされて終ふぞ」

道公みちこう「足曳あしびきの山鳥やまどりの尾をの、又またしても長々ながながしい前口上まへこうじやうだなア。いい加減かげんに發射はつしゃして見みる」

伊太公いたこう「かう尾長猿をながざるの奴やつ、身邊しんぺん近く押寄おしよせ來きたつてはチツとばかり面食めんくらはざるを得えない。吾輩わがはいの言靈ことたまを以もつて一丁いつちやうばかり退却たいきやくをさして見みせるから伊太公いたこうの腕前うでまへ、否言いなこと靈たまの武者振むしやぶりを拜觀拜聽はいくわんはいちやうなされませ、エヘン。

三あななひけう五せん教でんしの宣傳使せんでんし 玉國別たまくにわけの音彦おとひこに

從したがひ來きたりし吾々われわれは 至いたつて尊たふとい伊太公いたこうぞ

神かみも佛ほとけも人民じんみんも 禽獸蟲魚きんじうちうぎよの端はしまでも

生言靈いくことたまの神力しんりきに 助たすけて進すすむ宣傳使せんでんし

オツトドツコイ吾々われわれは 神かみの司つかさの候補者こうほしやぞ

庚申かうしんさまの眷族けんぞくよ 貴様きさまは風かせが恐こはいのか

懷谷ふところだにへ集あつまつて キヤツキヤツと咆ほえるは何なんの事こと

みつともないぞ、こら畜生ちくしやう 四よつ手での化物ばけものやうやうと

枝から枝へと飛び廻り 木の實を喰ひキヤツキヤツと
 朝から晩まで咆え猛る その有様の面白さ
 あんまり良い氣になりよると 猿も木からバツサリと
 落ちて腰打ち足を折り 小便垂れて斃死つて
 非業の最後を遂げるぞよ 俺は誠の神司
 尊き神の生宮ぞ 俺の言葉をよつく聞け
 同じ天地に生れ来て 人間擬ひの猿となり
 頭の毛三本足らぬため 畜生の境遇に甘んじて
 月日を送るか情ない 頭の毛三本足らぬのは
 瑞の御靈の神様の 御恩を忘れた罰ぢやぞや
 早く心を取直し 天地の神の御前に
 四つ手をついて拜禮し 生宮様の言靈を
 耳をすませて拜聽し 一時も早く人間の
 社會に生れて來るがよい 人の眞似をば喜んで

致した罰で此通り

體は人間尾は獸

畜生道の苦しみを

助けて欲しいと思はぬか

こらこらキヤツキヤツ吐すなよ 耳が聾になりよるわ

雲雀か燕か小雀か 何の身靈か知らねども

あんまり口が過ぎるぞや 玉國別のお言葉に

沈黙せよと仰有つた 貴様もチツとは伊太公の

善言美口に神習ひ しばらく沈黙するがよい

伊太公さまが今此處に 千匹猿に打向ひ

嵌口令を布くほどに 我憲法を守らねば

天則違反で天國の 畜生警察へ訴へる

あゝ惟神々々 如何に畜生と云ひ乍ら

天地の神の御水火より 生れ出たる貴様等は

實に憐れな代物だ 一言天地を震動し

一聲風雨雷霆を 叱咤するてふ伊太公の

生言靈を謹んで 畜生ながらも反省せよ

吾は救ひの道の者 救ひの神に捨てられて

如何にガヤガヤ騒いでも 決して助かる筈はない

早く改心するが良い 改心すれば其日から

樂に此世が暮れるぞよ それも知らずに何時迄も

キヤツキヤツ吐かして山棲ひ 木實の蒂や澁柿を

食つて此世を送るとは 實に可憐な代物だ

とは云ふものの吾々も 人間界に向つては

大きな聲で言靈を 發射するやうな力ない

今日宣傳の門出に 演習氣取りで貴様等に

言靈戦を試みた これが利いたらお慰み

人を助けるばかりが 決して司の能ぢやない

鳥獸は云ふも更 蟲族までも濟度して

助けて行くのが神の道 これこれもうし宣傳使

玉國別の神司

俺の言葉は違ひますか

違ふなら違ふと云ひなされ
あれあれ皆さま猿公が

両手を合せ拜みよる
よつぽど俺の言靈は

猿公さまの琴線に
よくよく觸れたと見えまする

如何に畜生なればとて
決して馬鹿にはなりません

あゝ惟神々々
叶はないから止めませう

道公「アハ、貴様の言靈はよく利くと見えて、おひおひ吾々の身邊に押寄せ

て来るぢやないか

伊太公「きまつた事だ。餘り有難うて一言も洩らさじと俺の言靈を拜聴してゐる

のだ。「苦しうない、近う近う」と云ひもせぬのに身邊に近寄つて来るのだから

伊太公の初宣傳も随分有力なものだ

道公「目的と結果がそれでも違ふぢやないか

伊太公「そんなら貴様、猿公を退却させて見い。もし効能があつたら俺の首でも

熨斗つけて貴様に献上するわい」

玉國別「猿の奴も随分八釜しいが、それにもいやまして貴様等も騒がしい奴だな。まるで雷と同居してる様だ。アハ、ハ、ハ、ハ」

(大正一一・一一・二六 舊一〇・八 北村隆光録)

第三章 失明(一一一五四)

伊太公の膏汗を流しての飛び切り上等舶來と稱する宣傳歌も寸效なく尾長猿、手長猿の群は時々刻々に其數を増し、チクリチクリと一行の身邊に押し寄せ來る。道公「オイ俄宣傳使の伊太公、偉さうに仰有つたが、根つから言靈は利いたやうにないぢやありませんか。猿の人眞似をして掻き廻すものだからサツパリ猿公、立ち去る氣配も【トン】とないぢやないか、猿智慧奴さん」

伊太公「暫く吾輩に與ふるに時をもつてせよぢや……」

「猿冠者の猿智慧と聞きし

に勝る眞柴久吉だ……おれや【太閤】さまぢやぞ、「【大功】は【細瑾】を顧みず」だ、なんぼ猿公が【最近】へ寄せて來ても顧みないと云ふのが英雄豪傑の心事だ」

道公「どれ此の道公が一つ猿に道を傳へ血路を聞かしてやらう。貴様のやり方は些と製造法が違ふのだからよく聞いたらよからう、猿とは猿とは困つた代者だな。今年は庚申の年だから、さう猿をボロクソに云つては猿公だつて承知しないぞ。今年は吾々も猿公さまの御守護を受けて居るのぢやからなア。さうして俺も申の年の申の月の申の日の申の刻に生れたのだからなア、四輪揃うた道公ぢや、三輪揃うたら天下の長者になると云ふ位なのに、此方は猿が四つも揃うて、「サル者あり」と生れて來た俺ぢやから、猿だつて全然他人ぢやない。きつと降服して此場を立ち【去る】にきまつて居るわい。ナア玉國別様あんな仕様もない歌を歌つたつて、如何に畜生だつて【去る】ものですか、どうぞ私に一つ特別製の意匠登録を得た宣傳歌を歌はして下さいな」

玉國別「待て待て、お前達は猿智慧だから困る。俺が一つ此處で訓戒をするから、

それをよく腹へ入れて其上で何とか考へたら宜からう。

第一、未申の金神瑞の御靈の御教を忘れ【ざる】事

一、汝が心の垢を【さる】事

一、邪惡分子を根底より【さる】事

一、總ての惡事災難を拂ひ【さる】については大に神心に歸ら【ざる】可から

【ざる】事

一、一絲みだれ【ざる】底の信仰心をもつて奮起せ【ざる】可から【ざる】事

一、天地人道に背か【ざる】事

一、外れ【ざる】事

一、違は【ざる】事

一、至誠一貫萬世朽ち【ざる】香しき名を傳ふる事

一、天下の爲には地位、名望、財産、生命も敢て惜ま【ざる】事

一、至誠天地に恥ぢ【ざる】行ひを爲す事

一、善をなす爲めには如何なる妨害にも屈せ【ざる】事

- 一、 肉體は假令死すとも靈魂は永遠に死せ【ざる】 眞理を悟る事
- 一、 大業を成すに當つては千苦萬難に撓ま【ざる】 事
- 一、 道のためには屈せ【ざる】 事
- 一、 勁敵に遇ふとも退却せ【ざる】 事
- 一、 弱ら【ざる】 事
- 一、 決して何事にも悲觀せ【ざる】 事
- 一、 勇氣を鼓して如何なる失敗をも挽回せ【ざる】 可から【ざる】 事
- 一、 人欲のために心を亂さ【ざる】 事
- 一、 總ての生物を苦しめ【ざる】 事
- 一、 佯ら【ざる】 事
- 一、 罵ら【ざる】 事
- 一、 欺か【ざる】 事
- 一、 人の成功を嫉ま【ざる】 事
- 一、 人の業を妨げ【ざる】 事

- 一、
奪は【ざる】事こと
- 一、
傷つけ【ざる】事こと
- 一、
殺さ【ざる】事こと
- 一、
媚び諂は【ざる】事こと
- 一、
酒色を好ま【ざる】事こと
- 一、
道に外れ【ざる】事こと
- 一、
世界の進運に後れ【ざる】事こと
- 一、
何事にも成功を急が【ざる】事こと
- 一、
暴富を望ま【ざる】事こと
- 一、
貧乏を憂へ【ざる】事こと
- 一、
慢に竹木を伐ら【ざる】事こと
- 一、
輕學妄動せ【ざる】事こと
- 一、
人を攻撃せ【ざる】事こと
- 一、
惡所に足を踏み入れ【ざる】事こと

ひつじつ、 日々ひびの職務しよくむを怠おこたら【ざる】事こと

ひつじつ、 四恩しおんを忘わすれ【ざる】事こと

ひつじつ、 衣食いしよくに驕おこら【ざる】事こと

ひつじつ、 何事なにごとにも怒おこら【ざる】事こと

ひつじつ、 物ものに動どうぜ【ざる】やう常つねに心膽しんたんを鍊磨れんまする事こと

ひつじつ、 欲よくのため危あやふきに近ちか寄よら【ざる】事こと

ひつじつ、 敵てきを恨うらま【ざる】事こと

ひつじつ、 迷信めいしんに陷おちい【ざる】事こと

ひつじつ、 神明しんめいに仕つかへ奉まつる身みは常つねに清せい潔けつを尊たふとび、汚けがれ【ざる】やう注意ちういせ【ざる】べか

ら【ざる】事こと

ひつじつ、 終始しうし一貫いつくわん初しよ一念いちねんを變へんぜ【ざる】事こと

ひつじつ、 異端いたん邪説じやせつに惑まどは【ざる】事こと

ひつじつ、 現代げんだいの惡思想あくしさうに染そま【ざる】事こと

ひつじつ、 吾良心わがりしんを欺あやか【ざる】事こと

一、物云ふ花に狂は【ざる】事

一、惟神の大道を外さ【ざる】事

一、總ての事に騒が【ざる】事

一、人の悪事を摘發せ【ざる】事

一、義理人情を捨て【ざる】事

一、長上に對し反感の念をもた【ざる】事

一、産土神社へ信仰を怠ら【ざる】事

一、衛生に注意し病にかから【ざる】やう注意すべき事

一、如何なる憂目に遇ふとも決して泣き悲しま【ざる】事

一、禽獸の精神に劣ら【ざる】やう身魂をみがく事

一、交際に貴賤貧富の別を立て【ざる】事

一、猿共に擲掬は【ざる】事

一、何事も見【ざる】、聞か【ざる】、云は【ざる】の三猿主義を取る事

マアざつと如上の條項を守り、減らず口を叩かず、法螺を吹かず、沈黙を守り、

禽獸蟲魚の末に至る迄、其徳に悦服するやう注意をせなくてはなりませんぞ」

伊太公「何とまあ「サル」だの「ザル」だのと、「ザル」籠に這入らぬ程陳列な

さいましたなア。さう云はれて仕舞へばモウこれからは吾々は唾とならなくては

仕方がありますせぬワ。ほんとに惜い事でムいますわい」

道公「それ見たか伊太公、偉さうに云つても忽ち箝口令を布かれて仕舞へば、

「チウ」の聲も揚らぬぢやないか、本當に困つたものぢやのう」

伊太公「コリヤコリヤ道公、今宣傳使が「罵らざる事」と仰有つたぢやないか。

あれ見よ猿の奴あまりに宣傳使がサルだのザルだのと仰有るものだから得意にな

つて益々接近して来るぢやないか」

道公「何に猿はサルとしての、一つの考案があつて押寄せて来るのだ。何と云つ

ても道公の様な好男子がムるものだからなア。あの猿は決して雄ばかりぢやない、

雌だつて澤山居るからなア」

伊太公「アハ、ハ、ハ、好男子が聞いて呆れるわい。「講談師見て来たやうな嘘を

云ひ」と云つて目に見えた嘘を云ふぢやないか。貴様の顔は猿に似て居るから自

分達の仲間ぢやと思つて寄つて來るのだよ」

道公「何、俺が猿に似とるのぢやない、猿の方から俺に似てけつかるのだ。ア

ハ、ハ、

伊太公「どつちから似て居ても同じ事ぢやないかそれぞれ、身動きもならぬ程近

くへやつて來やがった。え、コン畜生、ちつとそつちへ行かぬかい」

と伊太公は力に任して間近にやつて來た猿を押し倒した。猿の群は俄にキヤツキヤ

ツと叫び出し、彼方の山の端からも此方の山の端からも幾萬とも知れない猿の數

となり四人に向ひ金切聲を出して掻きつく、武者振つく、後の方の猿は石を拾つ

て巧になげつける。四人は衆寡敵せず、一生懸命に正當防衛に力を盡して居る。

ノソリノソリと後の方からやつて來た、一層大きな白毛の猿は玉國別の後より不

意に目のあたりをかき「むし」つた。玉國別はアツと叫んで其場に打倒れた。三

人は一生懸命に猿に向つて金剛杖を打ち振り防ぎ戦へど、數萬の猿は入り替はり

立ち替はり押寄せ來るに力盡き今や危くなつて來た。時しもあれ山嶽も崩るる許

りの獅子の唸り聲、ウーウーと響き渡る。此聲に數萬の猿群はキヤツキヤツと悲

鳴をあげ一目散に逃げ失せて仕舞つた。
いづくともなく宣傳歌の聲爽かに聞え來る。

三五教の宣傳使 玉國別の一行は

尊き使命を忘却し 尾上を渡る荒風に

肝を冷してぶるぶると 慄ひ戦き懷の

谷間に隠れ暫くの 安きを盗みし愚かさよ

天罰忽ち報い來て 人にもあらぬ猿の群

責めなやまされ兩眼を 掻きやぶられし淺はかさ

吾は空助宣傳使 汝一行の旅立を

心に案じわづらひつ 獅子の背中に跨りて

後追ひ來り眺むれば 悲惨至極のていたらく

三五教の面汚し 天地の神に如何にして

此失策を謝罪する 月日にたとへし兩眼を

掻きやぶられし宣傳使

心の眼くらみなば

神の光も知らぬ火の

浪間に漂ふ如くなり

あゝ惟神々々

誠の心に立ち歸り

心の駒の手綱をば

引きしめ引きしめ大神の

勅のままに逸早く

月の御國に猛進し

神の依さしの神業を

一日も早くなし遂げよ

たとへ眼はやぶるとも

神の御守りある上は

靈は開けて天國の

救ひの道を安々と

此地の上に開設し

天と地との經綸の

司と仕へ得らるべし

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

星は天より落つるとも

濱の眞砂は盡くるとも

神の依さしの言の葉は

決して背く事なかれ

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

直日の靈幸倍ひて

曇りし汝が魂の 眼を開き助くべし

いざいざさらば いざさらば 吹き来る風も恐れなく

虎狼の襲来も 臆せず屈せず道のため

一時も早く進めかし あゝ惟神々々

御霊幸倍ましましてよ

と歌ひ終るや、忽然として四人の前に現はれたのは、巨大なるライオンに跨つた
時置師の神の姿であつた。玉國別は兩眼を潰され、打ち伏して宣傳歌の聲のみを
謹聴して居た。道公、伊太公、純公の三人は時置師神の雄姿を伏拜み、滂沱たる
涙を腮邊に漂はして居る。時置師神は疾風迅雷の如く、獅子に跨り嶮しき山を踏
み越えていづこともなく姿を隠したり。

(大正一一・一一・二六 舊一〇・八 加藤明子録)

第四章 玉眼開（一一五五）

伊太公「思ひきや きや きや きやと泣く猿に

キヤツといふ目に會はされるとは」

道公「コリヤコリヤ伊太公、氣樂相に狂歌所かい。宣傳使様が今日か明日か知らぬよな目に會はされて苦んでムるのに、何を呆けてゐるのだ。サ、早く谷川へで

も下りて清水を汲んで来い。俺は御介抱を申上げるから……」

伊太公「そんならお前達兩人に、先生の御介抱を頼む事にしよう。俺はこれから

谷水を汲んで来るワ」

といひ乍ら、水筒をブラブラ下げ、谷川さしておりて行く。

伊太公「ヤア此所に綺麗な水が流れてゐる。之を汲んで洗つて上げたらキツと癒るだろ。

山猿やまざるに搔かきむしられて何なにもかも

水みづの御靈みたまの救すくひ求もとむる。

この水みづは神かみの惠めぐみの露つゆなれば

今日けふは見みえると言いひたくぞある。

谷川たにがはに落おち込み水みづを汲くみに來きた

深ふかき心こころを汲くませ玉たまへよ。

此この「みづ」は眼まなこばかりか命いのちまで

救すくひ助たすくる惠めぐみの露つゆぞ。

惟かむながらかみ神ひかりの光あはの現あらはれて

玉國たまくにわけ別の眼照まなこてらせよ。

みず知しらず懷谷ふところだにの山猿やまざるに

搔かきむしられし事ことの悔くやしさ。

さり乍ながら神かみの使命しめいをおろそかに

いたせし罪つみの報むくい來きしにや。

時置師神の命が現はれて

心の眼開き玉へり。

待てしばしぐづぐづしてるところとこぢやない

早く眼をあらはにやならぬ。

伊太公の目は大丈夫さり乍ら

師の君見る目いたいたしく思ふ

と口ずさみ乍ら、清冽なる秋の谷水を水筒に盛り、一刻も早く玉國別を助けむと、
小柴や茨を掻きわけ、息をはづませ登り行く。玉國別は兩眼より血を垂らし乍ら、
布にて血糊を拭き取り、手の掌を兩眼にあてて痛さをこらへて俯いてゐる。道公、
純公は、

「サア大變々々」

と慌てふためき、うるたへ廻つて、チツとも閒しやくに合はない。

玉國別「道公、水はまだか。伊太公はまだ歸らぬか」

道公「ハイ山路をタツタツタと下つて行たきり、今に至り姿を見せませぬ。先生が是程傷で困つてゐるのに……エ、氣の利かぬ奴ですワイ。オイ純公、貴様何をウロウロしてゐるのだ。早く伊太公の水の催促に伊太々々」

純公「エ、洒落どころかい。大變な目に會うて吾々は進路に迷うてゐるのだ。一寸先は眞暗やみだ。そんな氣樂なことどこかいやい」

かかる所へ伊太公はフースーと鼻息荒く登り來り、

伊太公「ア、大變遅くなつてすみませぬ。一刻の間も早く歸りたいと思ひ、氣を合せればあせる程、キツイ坂で足がずり、漸くここ迄到着致しました」

道公「オイ早く水筒を出さぬかい。根つかから持つてゐないぢやないか」

伊太公は腰のあたりを探り乍ら、「アツ」と一聲打驚き、

伊太公「ヤア大變だ。餘り慌てて、谷底へ水を汲んだなり忘れて來たのだ。オイ道公、貴様早く取つて來てくれぬかい。先生の痛みが氣の毒だから、早く目を冷

さぬと段々腫れて來ちや大變だ」

道公「エ、慌者だなア、どこらに置いておいたのだ。それをスツカリ言はぬかい」

伊太公「谷川と云つたら、山の谷を流れる川だ。其水を汲んでチヤンと砂の上に
おいてあるのだ。サア早く行かぬかい。一分間でも先生の苦痛を助けにやなるま
いぞ」

純公「オイ伊太公、貴様が置いといたのだから、貴様が行かなグツグツ捜して
る間がないぢやないか。本當に困つた奴だな。丸で雉子の直使だ。水を汲みに行
つたつて、持つて歸らにや何になるものか」

伊太公「貴様、水を汲んで来いとぬかしたぢやないか。別に持つて歸れと迄は言
はぬものだから忘れたつて仕方がないワイ。オイ純公、貴様も来てくれぬかい。

實の所はどこで落したか分らぬのだ。二人よつて鵓の目鷹の目で、小柴の中や枯
草の間を捜し求めて見つけて来うぢやないか、……モシモシ先生様、モウ暫くの
御苦痛、どうぞ御辛抱下さいませ。誠に氣の利かぬ男でムいまして、御心中お察
し申します。コラ、道公、何を呆けてゐるのだ、早く御介抱を申さぬかい」
道公「介抱せいと云つたつて、仕方がないぢやないか。俺やここで猿の再襲來を
防禦してゐるから、貴様等兩人、水筒捜しに行つて来い」

伊太公、純公兩人はブツブツ呟き乍ら、小柴を分けて水筒の落ちた場所を探しに行く。漸くにして一丁ばかり下つた所に、水筒は落ちて居た。併し乍ら入口を下に尻を上うへに落おしたのだから、一滴も残らず吐き出してしまひ、空水筒となつて、天下太平てんかたいへい氣分きぶんで横よこはつてゐる。

伊太公「エ、氣の利きかない水筒すゐとうだな、落ちるのなら何故上うへ向けに落ちないのだ。

折角俺せつかくおれが吞のましてやつた水みづを、皆吐みなはき出して……何と都合なつがふの悪いわる時にや、都合なつがふの悪いものだなア。オイ純公、仕方しかたがない。マ一度谷底いちどたにそこまで一走り行いつて來こうかい
純公「さうだなア。水筒すゐとうが見みつかつた以上いじやうは貴様きさま一人ひとりでいいのぢやけれど、元來くわんらいが慌者あわてものだから、又道またみちで落おしよると何なんにもならぬ。俺おれが監視役かんしやくとして従ついて行いてや
らう」

純公は水筒すゐとうを懷ふところにねぢ込み、急坂きふはんを小柴こしばを分わけ、草くさに迂すべり乍ら、伊太公いたこうと共に深ふかき谷底たにそこに下おり立たち、清泉せいせんをドブドブと丸まるい泡あわを立たてさせ、口くちまで満みたした。

純公「【すみ】切りし此この谷水たにみづを水筒すゐとうに

呑^のませて歸^{かへ}る身^みこそ嬉^{うれ}しき。

伊^い太^た公^{こう}が折^せ角^{かく}汲^くんだ谷^{たに}水^{みづ}は

水^{みな}泡^わとなりて消^きえ失^うせにける

伊^い太^た公^{こう}「俺^{おれ}だとして落^{おと}す心^{こころ}はなけれ共^{ども}

目^めに見^みぬ智^ち慧^ゑを落^{おと}したるらむ。

落^{おと}したる瓶^{かめ}を拾^{ひろ}うて音^{おと}彦^{ひこ}の

眼^{まなこ}を洗^{あら}ふわれ「おと」ましき

純^{すみ}公^{こう}「さア早^{はや}う伊^い太^た公^{こう}の奴^{やつ}よついで來^こい

眼^{まなこ}伊^い太^た公^{こう}と待^まつてム^こるぞ

と云ひ乍ら、又もや急坂を攀ぢ登り、漸くにして玉國別の傍に着き、水筒の水を手にすくひ、玉國別の兩眼を念入りに洗滌した。

玉國別「ア、有難い、これでスツカリ目の痛みが止まつたやうだ」

伊太公「先生、痛みが止まりましたか、それは何より嬉しい事でムいます。併し

明りは見えませんか」

玉國別「イヤ痛みは餘程輕減したやうだが、チツとも見えないワ」

道公「エ、何と仰有います、お目が見えませぬか、コリヤ大變だ。大西洋の眞中

で蒸氣船の機關が破裂したよなものだ、これから俺達は如何したら良からうかな

ア」

玉國別「心配してくれな。物の「あいり」は分らぬが、ボンヤリとそこら中が明

く見えるやうだ。何れ熱が下つたら、元の通りになるだらう。これといふのも吾

身の安全を第一として烈風に恐れ、肝腎の神様に祈願することや言靈を以て風神

を驅逐することを忘れてゐた其罪が報うて來たのだ。實によい教訓を受けたもの

だ。せめて北光神様のやうに一眼なりと開かして下されば、結構だがなア」

道公はつくづくと玉國別の兩眼を打ち眺め、

「ヨウこれは思つたよりも大疵だ。モシ先生、右の目はサツパリ潰れて了つてゐますよ。まだも見込のあるのは左の目ですよ」

玉國別「左の目は日の大神様、右の目は月の大神様だ。月の國へ魔神の征服に出陣の途中、月の大神に配すべき右の目を猿に取られたのは、全く神罰に違ない。

まさしく坤の大神様が、吾目をお取上げになつたのだらう、あゝ惟神靈幸倍坐世」

道公「オイ伊太公、純公、コリヤ斯うしては居られまい、これから三人は谷底へ下つて一生懸命に水垢離を取り、先生の目の祈願をさして頂かうぢやないか」

斯く話す折しも、下の谷道を宣傳歌を歌ひつつ東北指して登り行く一隊があつた。これはケーリス、タークス、ポー口の一行が照國別の信書を携へ、齋苑館に

修行に向ふのであつた。

道公「ヤアあの聲は三五教の宣傳歌ぢやないか。モシ先生、キツとあれは吾々の味方に違ありません。一つ後追つかけて、貴方の眼病を鎮魂して貰ひませうか」

玉國別「苟くも宣傳使の身を以て、山猿に眼を掻きむしられ、どうしてそんな事

が、恥はづかしうて頼たのめるものか。何事なにごとも神様かみさまにお任せまかするより道みちはないのだから、御ご

親切んせつは有難ありがたいが、それ丈だけはどうぞ止やめてくれ」

道公みちこう「それだと申まをして、危急ききふ存亡そんぼうの場合ばあひ、そんな事ことが言いうてゐられますか。今いま

なつては恥はぢも外聞ぐわいぶんもいつたものぢやムいませぬ。何程なにほど神徳しんとく高たかき宣傳せんでん使しでも、怪我けが

は廻まはりものですからそれが恥はぢになると云いふ事ことはありますまい。オイ伊太公いたこう、純公すみこう、

何をグツグツしてなるのだ。千危せんき一機いつきの此場合このばあひに泣なく奴やつがあるかい。早はやく宣傳歌せんでんかの

聲こゑを尋たづねて頼たのんで來こぬか」

伊太公いたこう「それもさうだ。オイ純公すみこう、お前まへも御苦勞ごくらうだが、俺おれに従ついて來きてくれ」

純公すみこう「ヨ一シ、合點がつてんだ。急せかねばならぬ、急せいては事ことを仕損しそんずる。氣きをおちつけ

て、ゆるゆる急いそいで行ゆかう」

道公みちこう「何卒どうぞさうしてくれ。サアサア早はやう早はやう、手てを合あはして、今日けふは俺おれが頼たのむか

ら」

玉國別たまくにわけ「コリヤ三人さんにん、どうしても俺おれのいふ事ことを聞きかぬのか、俺おれに恥はぢをかかす積つもり

か」

道公は頭を掻き乍ら、

道公「ダツて貴方、これが如何して安閑として居られませうか」

玉國別「神様の教に、人を杖につくな、身内を力にするな……といふ事がある。

俺の目は俺が神様に祈つて何とかして貰ふから、どうぞそれ丈はやめてくれ、頼

みだから」

道公「オイ伊太、純、どうも仕方がないぢやないか」

伊太公「俺達の先生だもの、俺達三人が神様に祈つて直して貰へばいいのだ。外

の宣傳使に先生の恥を曝すのも濟まないからなア」

玉國別は天に向つて合掌し、天津祝詞を奏上し、……國治立大神の神名を稱へ

て、罪を謝した。其詞、

「高天原の主宰にして、一靈四魂三元八力の大元靈にまします大國治立大神様、

私は貴神の尊き靈力體を賦與せられ、此地上に生れ來て、幼少の頃よりいろいろ

雑多の善からぬ事のみ致しまして、世を汚し、道を損ひ、人を苦め、親を泣かせ、

他人に迷惑をかけ、しまひの果にはウラル教の宣傳使となり、日の出別神様に救

はれて一人前の宣傳使として頂きました。かかる罪深き吾々をも捨て玉はず、きため玉はず、廣き厚き大御心に見直し聞直し詔直し下さいまして、尊き宣傳使にお使ひ下さいました事は、罪深き吾々に取つては、無上の光榮でムいます。かかる廣大無邊なる御恩寵に浴し乍ら、知らず知らずの間に慢心を致し天下の宣傳使氣分になつて、世の中の盲聾啞瘂などを癒やし助けむと、勇み進んで此處迄参りました事を、誠に恥かしく存じます。今日只今山猿の手を借つて、吾々の兩眼を刳出し、汚れたる心を清め、曇りたる心の眼を開かせ、身靈を明きに救ひ玉ひし其御恩徳を有難く感謝致します。人間の體は神様の生宮とある以上は何處迄も大切に此肉體を守らねばならないのでムいますが、自分の心の愚昧より大切なる肉の宮を損ひ破り、吾々の靈肉を與へ下さいました貴神様に對してお詫の申上げやうもムいませぬ。誠にすまない無調法を致しました。假令玉國別兩眼の明を失する共、せめては心の眼を照らせ下さいますれば神素盞鳴大神様より依さし玉ひし吾使命を飽迄も果たし、齋苑の館に復命をさして頂く考へでムいます。此上は御無理な願は決して致しませぬ。何卒々々惟神の御攝理に依りて、御心の儘にお

取成し下さいます様に謹んで御願を申上げます」

と願ひ終り、兩眼より雨の如く涙を流してゐる。三人も此有様を見て、思はず落

涙にむせび、大地にかぶり付いて感謝の祈願を凝らしてゐる。玉國別は尚も一生

懸命に、天地の大神に對し、懺悔の告白をなしつつあつた。不思議や左の目は俄

に明るなり、四邊の状況は手に取る如く見えて來た。玉國別は嬉し涙に咽び乍ら、

又もや拍手再拜して神恩を感謝する。

玉國別「イヤ道公、伊太公、純公、喜んでくれ。どうやら片眼が見え出したやう

だ。神様は罪深き玉國別を助けて下さつた。あゝ有難し有難し」

と又もや合掌。三人は此言葉に驚喜し、

「あゝ有難し勿體なし」

と一齊に合掌し、勢込んで再び天津祝詞を奏上し始めた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一一・二六 舊一〇・八 松村眞澄録)

第五章 感謝歌〔一一五六〕

玉國別たまくにわけ 大神おほかみの恵めぐみ開ひらきぬ詳細まつぶさに

清きよき目めの玉國別たまくにわけの司つかさ。

あり難がたし神かみの恵めぐみに照てらされて

常夜とこよの暗やみも晴はれ渡わたりたり。

北光きたてるの神かみの司つかさになれとてや

一ひとつの眼まなことらせ給たまへり。

これからは心こころを片かため眼め身を片かため

神かみの光ひかりを照てらし行ゆくべし。

盲めしひたる人ひとの澤さはなる世よの中なかに

吾われは嬉うれしき目ま一ひとつ箇つの神かみか。

玉國別たまくにわけ神かみの司つかさは今いまよりは

身魂を磨き道に盡さむ。

【玉】しひを神と御【國】に捧げつつ

道【別】進まむ荒野ヶ原を。

常夜往く闇夜も晴れて吾眼

一入清く光り初めたり。

山猿に掻きむしられし吾眼

玉國別の魂を救ひつ。

昔より良からぬ事をなし遂げし

吾身の仇を悔しと思ふ。

吾魂は神の御國に甦り

不可知世界の光見たりき。

肉の眼を失ひたりし其時ゆ

悟り得にけり神の世界を。

天ヶ下四方の國々隈もなく

照らし行くなり片目司は。

萬代の「かため」と神は定めけむ

心にたちし國の御柱。

吾は今一つの眼失ひて

所存の臍を「かため」たるかな。

逸早く神の大道に進み行かむ

行手にさやる枉言向けて。

三五の神の教ぞ有難き

心の盲目救ひ行く道

道公 玉國別神の命は吾々の

弱き心を「かため」ますらむ。

河鹿山渡りて來れば猿の群

吾等三人の眼さましつ
『

伊太公いたこう いたいたし君きみの眼まなこを見るみにつけ

吾目わがめの中なかに涙なみだこぼるる。

時置師神ときおかしのかみの命みことはライオンに

跨りまたが來きたり吾われを救すくひぬ
』

玉國別たまくにわけ 目めの光ひかり失しひゐたる吾身わがみには

神かみのいでまし悟さとらざりけり。

あな尊たふと吾等われら四人よにんを救すくはむと

現あらはれますか時置師神ときおかしのかみ。

天地あめつちの神かみは吾等われらを守まもりまし

助け給ひし事の尊さ
たす たま こと たふと

純公 大空の澄み渡りたる秋の日も
すみこう おほぞら す わた あき ひ

暫しは雲に包まることあり。
しば くも つつ

水筒を道に落して伊太公が
すゐとう みち おと いたこう

狼狽へ騒ぎし事の可笑しき。
うろた さわ こと を か

谷川に下りて汲みとる岩清水に
たにがは お いく いはしみづ

なやみ去りけり水の魂。
なやみ さ みづ たましひ

瑞御霊神素盞鳴の神徳は
みづみたま かむすさのを しんとく

谷の底まで流れけるかも。
たに そこ なが

瑞御霊幸はひまして世の明り
みづみたま さち は ひまして よの あか

五六七の神の救ひ尊し
みろく かみ すく たふと

道公みちこう 道みちを行ゆく人ひとに會あふごと三五あななひの

神かみの教をしへを宣のべ傳つたへばや。

今いまとなり神かみの稜威みいづを悟さとりけり

吾わが師しの君きみの目めの開あきしより。

目めも鼻はなもあかざる事ことが來くるぞよとの

神かみの教をしへをいまさら悟さとりぬ。

惟かむながら神かみに從したがひ行ゆく身みには

何なにか恐おそれむ世よの中なかの道みち 〇

玉國たまくに別わけ 天地あめつちの神かみの光ひかりを拜をがみてゆ

吾わが身み魂たまさへあかくなりぬる。

照てるく國くに別わけ神かみの命みことは今いま何處いづこ

大御おほみ惠めぐみに安やすく居あまさむ。

黄金姫わうごんひめ清照姫きよてるひめの便りたよをも

聞かきま欲ほつしけれ旅たびなる吾われは。

吾罪わがつみを赦ゆるし給たまひし大神おほかみの

心畏こころかしこみ御世みよを教をしへむ。

罪深つみふかき吾身わがみなりとは今いまの今いま

目めを破やぶるまで悟さとらざりけり。

省かへりみれば吾身わがみは枉まがの容いれもの器と

なりゐたりしかいと恥はづかし
□

道公みちこう 千早ちはや振ふる天あまの岩戸いはとは開ひらけたり

吾師わがしの君きみの眼まなこ清きよけく。

村肝むらぎもの心こころを神かみに任まかせつつ

進すすみ行ゆくべし荒野あらのがヶ原はらを。

大道おほみちに迷まよひし人ひとを悉ことごとく
導みちびき行ゆかむ神かみの御國みくにへ
』

伊太公いたこう『ゆくりなく吾師わがしの君きみの遭難さうなんに

伊太公いたこう今いまや眼覺まなこさめたり。

幸さいはひに二ふたつの眼光まなこひかれども

吾心眼わがしんがんの闇くらきを悲かなしむ
』

純公すみこう『すみ渡り大空傳おほぞらつたふ月見つきみれば

心恥こころはづかしくなりにけるかも。

月つきも日ひも下界げかいを照てらし給たまへども

時ときに黒雲くろくもさやる忌々ゆゆしさ
』

傳歌を歌ひ乍ら下り行く。
玉國別は左の目の光を得たるを打喜び、三人を従へ山を下りて坂道に出で、宣

三千世界の梅の花 一度に開く木の花の

咲耶の姫の御守護 空助司と現はれて

獅子の背中に跨りつ 伊猛り狂ふ猿の群

峰の彼方に追ひ散らし 吾等が盲目の一行を

救はせ給ひし有難さ 右の眼は失せたれど

吾等が運命まだ盡きず 神の司と選ばれて

伊猛り狂ふ枉神を 言向和す宣傳使

許させ給ふ神の愛 辱なみて今よりは

百の艱難もいとひなく 天地の神の御爲めに

誠一つの三五の 教を楯に四方の國

勇み進んで開き行く あゝ有難し有難し

神は吾等と俱にあり

神の御子と生れたる

青人草は云ふも更

草木の片葉に至るまで

恵みの露を施しつ

チームス峠やライオンの

激流渡り玉山の

胸突坂も乗り越えて

神の任しの神業に

仕へまつらむ四人連れ

あゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて

完全に委細に神業を

遂げさせ給へと天地の

尊き神の御前に

玉國別が眞心を

捧げて祈り奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

神の恵みの深きをば

如何でか忘れむ敷島の

大和男子の魂は

岩をも射ぬく桑の弓

ひきて返さぬ金剛心

空照り渡る日月の

光も清き玉國別は

一切萬事打捨てて

神かみの御おん爲ため世よの爲ために
誠まことを筑つく紫しの果はてまでも

勇いさみ進すすんで出いでて行ゆく
道公みちこう伊太公いたこう純公すみこうよ

汝なれも神かみの子こ神かみの宮みや
吾われに從したがひ何處どこまでも

至し仁じん至し愛あいの大おほ神かみの
大御心おほみこころに神習かむならひ

清きよき司つかさと成なりおほせ
四方よもの國くに々ぐに島しま々しまを

限くまなく照てらし救すくへかし
あゝ惟かむながらかむながら神々々

河鹿峠かしかたうげの峻坂しゅんぱんを
神かみに守まもられ下くだりつつ

玉國別たまくにわけの赤誠まごころを
披瀝ひれきし愼つつしみ願ねぎまつる

道公みちこうは足拍子あしびやうしをとり乍ながら歌うたひ出だした。

河鹿峠かしかたうげの急坂きふはんを
玉國別たまくにわけに從したがひて

懷谷ふいこの麓ふもとまで
やつと來きかかる折をりもあれ

前代未聞ぜんだいみもんの烈風れつぷうに
吹ふき捲まくられし腑甲ふが斐ひなさ

吾師の君を初めとし
吾等弱蟲三人は

木の根に確としがみつ
冷き風に煽られて

戦き居たる淺間しさ
夜は森々と更け渡り

キヤツキヤツキヤツと猿の聲
瞬く間に數千匹

四方八方より取巻いて
威喝したのが吾々の

小癩にさはり腹を立て
睨み佇む折もあれ

猿の奴め増長して
おひおひ近より攻めかかる

伊太公さまが鼻高く
長い口上竝べ立て

呂律も合はぬ宣傳歌
無性矢鱈に歌ひ出す

流石の猿奴も呆れ果て
ザワザワザワと騒ぎつつ

チクチクチクと攻め寄する
伊太公の奴は無謀にも

猿の一匹掴まへて
力を籠めて突倒す

サアそれからが大變だ
小人数連れと侮つて

衆を恃んで四方から
爪を尖らせ迫り来る

中に勝れた大猿は 玉國別の後より

キヤツとも何とも吐さずに 二つの眼を掻き潰し

勝鬨あげて逃げて行く 其外數多の小猿奴は

各自に石を拾ひ上げ 雨や霰と投げつける

危険刻々迫り来て 如何はせむと思ふ折

かすかに聞ゆる宣傳歌 間もなく獅子の唸り聲

衆を恃みし猿共も キヤツと一聲背を向けて

雲を霞と山の尾を 傳つて逃げ行く面白さ

四邊を見れば此は如何に 玉國別の神司

眼を押へ紅の 血潮をトボトボ落しつ

痛さを堪へて草の上に 蹲みますこそ悲しけれ

吾等三人は狼狽し 一先づ伊太公を谷川へ

水筒を持たして水汲みに 遣はしやれば慌者

道に水筒を遺失して 手持無沙汰に歸り来る

肝腎要かんじんかなめの此時このときに 間に合あはないとぼやきつつ

純公すみこう添そへて谷底たにそこへ 再びふたたび水を汲くみにやる

何なんぢや彼かんぢやと大騒おほさわぎ 吾師わがしの君きみは土つちの上へに

兩手りやうてを合あはせ天地あめつちの 神かみに向むかつて詫わび玉たまふ

神德しんとく忽たちまち現あらはれて 眼まなこの痛いたみは輕減けいげんし

漸やつやく片目かためは助たすかりて 再びふたたび此世このよの明あかりをば

拜をがみ給たまひし嬉うれしさよ あゝ惟かむながらかむながら神々た々

神かみの惠めぐみは目まのあたり 吾われもそれより皇神すめがみの

深ふかき惠めぐみを覺さとり得えて 心境しんきやうたちまち一變いつべんし

挺てこでも棒ぼうでも動うごかない 信神しんじん堅固けんこの信まめ徒ひとと

なり變かはりたる尊たふとさよ 神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと惡あくとを立別たてわける 尊たふとき道みちの御教おんをしへ

今更いまさら思おもひ知しられたり 如何いかに罪科つみとが深ふかくとも

誠心まことしんに祈いのりなば 廣ひろき心こころに宣のり直なほし

見直しまして速すみけく 許ゆるさせ給たまふ神かみの愛あい
 伊太公純公兩人よ 此處ここは名なに負おふ急坂きふはんだ
 足の爪先氣つまさきをつけて 何卒どうぞ怪我けがなどして呉くれな
 俺おれもこれから氣きをつけて 板いたを立てた如やうな坂道さかみちを
 いと悠々いいうと下り行く これも全まったく皇神すめかみの
 尊たふとき恵めぐみと知るからは 寸時すんじも神かみを忘わすれなよ
 あゝ惟神かむながらかむながら々々 御靈みたま幸さちはひましませよ」

と歌うたひ一行いっかうの後あとについて下り行く。

(大正一一・一一・二六 舊一〇・八 北村隆光録)

第二篇 月下げっかの古祠ふるほくら

第六章 祠前ほらひのまへ（一一五七）

山猿やまざるどものつどひたる

懷谷ふところだにを後あとにして

片目かためを取とられし神司かむつかさ

玉國たまくに別のわけ一行いっかうは

岩石がんせき崎嶇きくたる急坂きふはんを

一足ひとあし一足ひとあし力ちから入れ

南みなみをさして下くだり行ゆく

又またもや吹ふき來くる烈風れつふうに

笠かさをむしられ裳裾もすそをば

捲まくられながら【しと】しとと

眼まなこを据すゑてアブト式しきに

どんどんと膝栗毛ひざくりげ

吾物わがもの顔がほに下くだりゆく

御供みともに仕つかへし伊太公いたこうは

皺しわ枯がれ聲こゑを張はり上あげて

一足ひとあし一足ひとあし拍子へうし取り

汗あせをタラタラ流ながしつつ

冷つめたき風かぜを苦くにもせず

伊太公いたこう「ウントコドツコイドツコイシヨ」
玉國別たまくにわけに従したがひて

齋苑いその館やかたを出立しゅつたつし
意氣揚々いきやうやうと膝栗毛ひざくりげ

上のぼりつ下くだりつ進すすみ來くる
今いま吹ふく風かぜよりひどいやつ

どつと許ばかりにやつて來きて
俺等わしらの體からだを中天ちうてんに

遠慮會釋えんりよあしやくも荒風奴あらかぜめ
吹ふき散ちらさむとした故ゆゑに

用心深ようじんぶかい宣傳使せんでんし
吾師わがしの君きみは吾々われわれを

勞いたはりたまひ道端みちばたの
木きの根ねに確しつかと「しがみ」つき

「ウントコドツコイ危あぶないぞ」
又またもや風かぜが吹ふいて來きた

うつかりしてると散ちらされる
これこれ二人ふたりの供ともの者もの

確しつかり木きの根ねに喰くらひつき
風かぜの通とほるを待まつがよい

などとドツコイ仰有おつしやつた
これ幸さいはひと三人さんにんは

轟とどろく胸むねを撫なでながら
慄ふるひ戦をのき夜よを明あかし

又またもや吹ふき來くる荒風あらかぜに
吾身わがみ大事だいじと一散いっさんに

懷谷ふたいくに驅かけつけて
避難ひなんなしける折柄せりからに

「アイタ、タッタ、コン畜生」
高い石めに躓いた

猿公の奴めがやつて来て
畜生だてら吾々に

からか
擲揄ひやがる「ウントコシヨ」
それ見る度に「ウントコシヨ」

癩に觸つて耐らない
遠慮會釋も知らぬ奴

とうとう側へやつて来た
伊太公さまは「ウントコシヨ」

腕に力を籠めながら
お猿を一匹突き倒す

キヤツ キヤツ キヤツ キヤツと吠乍ら
縦横無盡に「ウントコシヨ」

群がり掛る恐ろしさ
大猿の奴めが飛んで来て

吾師の君の兩眼を
キヤツとも何とも吐かずに

背中の方から掻きむしり
ドテライ羽目に落しよつた

俺は谷川へ水汲みに
いつた所が「ドツコイシヨ」

肝腎要の水筒を
小柴の中へ「ヤツトコシヨ」

落した時の阿呆らしさ
道公さまにクドクドと

お小言計り頂戴し
俺の立つ瀬はあるものか

アタ阿呆らしい「ドッコイシヨ」
純公さまの手を引いて

水筒の所在を尋ねむと
下つて往けば草の上

平氣の平左で水筒奴が
素知らぬ顔して寝て居よる

確りせぬかと尻たたき
純公さまが「ひん」握り

深き谷間に下りたつて
突つ込む水筒ブルブル

屁のよな泡を吹き乍ら
腹一杯に飲みよつた

今度は落しちやならないと
グツと素首「ひん」握り

吾師の君の御前に
持ち歸り来て兩眼を

洗へば「ドッコイドッコイシヨ」
俄に止まる眼の痛み

瑞の御靈の御神徳
あゝ有難や尊やと

兩手を合せ拜む折
脚下に聞ゆる宣傳歌

こいつはテツキリ三五の
神の司に相違ない

これより後を追つかけて
「ウントコドッコイ」鎮魂を

願つて眼病の全快を
祈つて貰はふと願うたら

律儀一方の宣傳使

なかなか縦に首ふらぬ

吾は天下の宣傳使

心の油断につけ込まれ

畜生原に目をとられ

何の顔色あるものぞ

頼むでないと「ウントコシヨ」「ヤツトコドツコイ」危ないぞ

なかなか許して下さらぬ 俺も因果の腰を据ゑ

もう此上は神様に お願いするより道はない

枯草の上にとつと坐し 両手を合せ惟神

御靈幸はへましますと 祈りし甲斐もありありと

パツと開いた左の目 あゝ惟神々々

神の恵は目のあたり 「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」

これから先はだんだんと 坂がはげしくなるやうだ

純公氣をつけ道公さま お前の足許危ないぞ

俺もなんだか膝坊子 キヨクリ キヨクリと吐しよる

ほんに困った坂だなア アイタゝゝゝつまづいた

躑つまつく石いしも縁えんのはし 一いち樹じゆの影かげの雨あま宿やどり

一いつ河かの流ながれを汲くむさへも 深ふかき縁えんと聞きく上うへは

「ウントコドツコイ躑つまついた」 憎にくい石いしでも「ドツコイシヨ」

餘あんまり捨すてたものぢやない あゝ惟かむ神な々々ながら

御み靈たま幸さち倍はまして 一ひと日ひも早はやく月つきの國くに

ハルナの都みやこへドウドウと 進すすませ給たまへ三五あななひの

皇すめ大神おほかみの御おん前まへに 愼つつしみ敬うやまひ願ねぎまつる

「アイタタツタ又また倒たけた」

純すみ公こうは又また唄うたふ。

河か鹿か峠たうげの山やまの尾をを 吹ふく木こ枯がらしに木き々ぎの葉はは

敢あへなく散ちりて羽は衣ころもを 脱ぬいで捨すてたる枯かれ木き原はら

冬ふゆ野のの如ごとくなりけり 秋あきの山やま野のを飾かざりたる

黄金姫の紅葉も 夕日に清照姫の木も

今は全く「ドッコイシヨ」 憐れ果かなくなりけり

小猿の奴に目の玉を 「ウントコドッコイ」 引抜かれ

吾師の君は嘸やさぞ 残念だらう無念だらう

「ヤットコドッコイ ドッコイシヨ」 足許用心するがよい

高い石奴が竝んで居る 小面の憎い猿の奴

天と地との經綸者 萬の物の靈長と

生れ出でたる人間を 馬鹿にしやがる「ドッコイシヨ」

どうしてこれが世の人に 話がならうか恥かしや

三人の供がありながら 肝腎要のお師匠を

「ウントコドッコイ」 むごい目に 遇はして何と申し譯

神素蓋鳴大神の 御前に申し上げられよか

思へば思へば腑甲斐ない 話にならぬ御供達

これから何れも氣をつけて 吾師の君の身邊を

守らにやならぬ道公よ

伊太公も確りするがよい

アイタ、タツタ躓いた

厄介至極の坂道だ

うかうかしとれば玉の緒の

命も取られて仕舞ふぞよ

こんなところで斃ばつて

どうして天地の神様へ

何と云ひ譯立つものか

「ウントコドツコイ コレワイナ」

又々きつい風が吹く

頭の先から爪の先

腰の廻りに氣をつけて

一歩々々力籠め

「ウントコドツコイ」此坂を エンヤラヤツと下らうか

黄金姫や清照姫の 貴の司は此坂を

どうして下つて往かれたか その御艱難こそ思ひやる

照國別の宣傳使 三人の供と諸共に

此所を通らせたまうたに 違ひあるまい「ウントコシヨ」

キット功名お手柄を 七千餘國の國々で

お立てなさるでムらうぞ 何程大將が偉うても

つき添ふ奴が悪ければ

力一ぱい動けない

純公さまの云ふ事が

お前のお氣に觸つたら

直日に見直せ聞直せ

決して決して悪い事は

「ウントコドツコイ」云はぬぞよ

斯く歌ひ乍ら、八分許り毀れた祠の前に下りついた。

玉國別「お蔭で目の痛みも餘程軽減したが何だか些し許り頭がメキメキして來た。幸ひ此處に廣場があり、毀れた祠が立つて居る、何神様がお祭りしてあるか知らぬが、此處で一息して往かうぢやないか」

道公「ハイ、それが宜敷うムいませう、貴方は御病症の御身の上、無理をなさつてはいけません。今日計りでない明日も明後日もあるのですから、緩りと御休息

なさいませ。道公も大變疲れましたからおつきあひを致しませう」

玉國別は諾き乍ら蓑を大地にパツと敷いて其上にドツカと腰を下し、古祠の前に兩手を合せ、天津祝詞を奏上し初めた。三人も同じく祝詞を奏上する。

玉國別たまくにわけ 何神を祭りし祠ほこらかしらねども

いたいたしくもなりましにける。

よし宮みやは毀こはれたりとも神實かむざねは

常磐ときは堅磐かきはに鎮しづまりまさむ。

國治立神くにはるたちのかみの命みことも時ときを得えず

根底ねそこの國くにに隠かくれましぬる。

あゝ吾われは神かみの御惠みめぐみ蒙かかりて

此地このちの上うへに勇いさみ居をるかな。

神様かみさまの國くにに生うまれて神様かみさまを

齋いつかぬ奴やつぞ醜しこの曲津まが見み。

この社やしろ見るにつけても思おもふかな

天あまの日ひ澄すみの宮みやは如何いかにと。

エルサレムむかし昔むかしの姿すがた消え果はてて

今は淋いましき風こがらしの吹ふく。

惟かむながら神かみが表おもてに現あれまして

世よを治をさめます時ときぞ待またるる。

吾わが思おもふ心こころの儘ままになるならば

千ち木ぎ高た知かれる宮みや居ゐを建たてむ。

たてとほす誠まことの道みちの強つよければ

珍うづの宮みや居ゐもやがて建たつべし。

伏ふし拜をがむ祠ほこらの前まへに涙なみだして

我わが大神おほかみの行ゆく方へしのばゆ。

世よをしのび人ひと草ぐさを救すくふ素すさ蓋の鳴をの

神かみの命みことぞ尊たふとかりけり。

自おの凝ころの島しまにまします國くに武たけ彦ひこの

神かみの命みことの慕したはしきかな。

玉たま照てる彦ひこ貴うづの命みことや玉たま照てる姫ひめ

如い何かまさむと空そらを仰あふぎつ
』

道公みちこう 神かみの道朝みちあさな夕ゆふなに進すすむ身みは

やがて届とどかむ勝利しょうりの都みやこへ。

瑞御魂みづみたま嚴いづの御魂みたまと諸共もろともに

三五あななひけう教きつを築きつましけり。

三五あななひの道みちに仕つかへし吾われなれば

醜しこの曲津まがつの如何いかで襲おそはむ。

惟かむながら神かみより外ほかに何なにもなし

親おやも子こもなき吾わが身みなりせば

伊太公いたこう 吾われは今いま神かみの司つかさに從したがひて

神かみの大路おほぢの坂歩さかあゆむなり。

此このほこら祠い如何いかなる神かみのましますか

知らしずながららも祈いのりたくなりぬ。

いろいろと神の御名はかはれども

國治立のみすゑなるらむ。

皇神よ行先幸く守りませ

吾師の君の御身はことさら。

行く先に如何なる曲のさやるとも

神の息吹に拂はせたまへ

純公すみこう 村肝むらきもの心こころの月つきの清きよければ

如何いかなる曲まがもさやらざらまし。

三五あななひの月つきの教をしへを守りつつ

月つきの御國みくにへ吾進われすすむなり。

月つきの國くにハルナの都みやこに蟠わたかまる

八岐大蛇やまたをろちを如何いかに救すくはむ。

曲^{まが}神^{かみ}も皆^{みな}皇^{すめ}神^{かみ}の御^み子^こならば
吾^{われ}等^らは如^い何^かで憎^{にく}むべしやは

玉^{たま}國^{くに}別^{わけ} 玉^{たま}國^{くに}別^{わけ}神^{かみ}の司^{つかさ}は今日^{けふ}より

神^{かみ}のまにまに進^{すす}み往^ゆくべし。

齋^い苑^そ館^{かた}神^{かみ}の御^み言^{こと}を蒙^{かか}りて

吾^{われ}等^ら四^よ人^{にん}は大道^{おほ}ゆくなり。

河^か鹿^{しか}山^{やま}峰^{みね}の嵐^{あらし}は強^{つよ}くとも

如^い何^かで恐^{おそ}れむ神^{かみ}の兵^{つは}士^{もの}。

吹^ふく風^{かぜ}に煽^{あふ}られながら進^{すす}み行^ゆく

神^{かみ}の司^{つかさ}ぞ雄^を々^をしかりけり。

巴^は拉^ら蒙^{もん}の軍^{いく}の司^{つかさ}行^ゆく先^{さき}に

攻^せめ來^{きた}るとも刃^は向^むふなゆめ。

さり乍ながら千騎せんき一騎いつきの時とき來くれば

神かみのゆるしを受うけて動うごかむ。

動うごきなき玉たまの御柱みはしら撞つき固かため

愛善あいぜんの道傳みちつたへ行ゆくなり㊦

道公みちこう 皇神すめかみの道みちにさやりし曲神まががみを

言こと向むけ進すすむ身みの幸樂さちたのしも。

此この森もりの千歳ちとせの松まつに言こととはむ

國治立くにはるたちの神かみの昔むかしを。

此この森もりの千歳ちとせの松まつの物言ものいはば

神代かみよの昔聞むかしきかましものを。

過すぎ去さりし昔むかしの夢ゆめを辿たどりつつ

夢ゆめの浮世うきよに長ながらへてゆく。

現世も又幽世も神の世も

すべ守ります國の祖神。

三五の道を立てたる神柱

神素盞鳴の尊畏き。

素盞鳴の瑞の御魂にかなひなば

如何なる曲も背かざるらむ。

吾は今神の恵に守られて

師の君に従ひ宣傳の旅行く。

ゆく先は空照り渡る月の國

ハルナの都と聞くは勇まし

伊太公 暫くは嵐吹けどもやがて又

花咲く春に遇はむと樂しむ。

山々やまやまの諸木もろぎの末すゑに至いたるまで

冬ふゆごもりして時ときをまつなり。

田鶴たづ巢すくふ此この松まつヶ枝がえは夏なつ冬ふゆの

わかちも知らしに榮さかえけるかも。

鶯うぐひすの谷たにの戸とあけて出でる春はるを

まつも嬉うれしき宣せんでん傳でんの旅たび。

杜鵑ほととぎす八千はっせん八や聲こゑを鳴なき涸からし

黄金こがね花はな咲はなく秋ときをまちぬる。

冬ふゆ來きぬと目めにはさやかに見みえねども

空そら吹ふく風かぜにそれと憍しのばる。

此この森もりに常とき磐は堅かき磐はに在います神かみ

吾等われらを永と久はに守まもらせ給たまへ

純公すみこう 澄み渡る秋の大空眺むれば

忽ち起る醜の黒雲。

時雨して晴れ往く後に初冬の

月は御空に輝きにけり。

日は既に西山の端に春きて

うら淋しくもなりにけらしな。

さりながら神の心にかへりなば

夜晝しらに賑しと思ふ。

いざさらば吾師の君よ立ち給へ

やがては廣き道に出でまさむ

玉國別たまくにわけ 有難し眼の痛み今は早

うち忘れたり神の恵みに。

いざさらば三人の供よ神の前に

祝詞捧げて立ち出で往かむ。

有り難し尊き神の御前に

息やすめたる恵を嬉しむ。

御恵の露は木の葉の末までも

きらめき渡る月の夜半なり。

望の夜の月は御空に出でましぬ

山蔭あかくなりしと思へば

斯く歌ひ終り祠の神に別れを告げ、立ち出でむとする時しもあれ、前方より駒の蹄の音騒々しく聞え數百騎の兵士時々刻々此方をさして進み來る。玉國別外三人は此物音に耳をすませ何者ならむと雙手を組み思案に暮れて居た。今の物音は大黒主の部下鬼春別將軍の先鋒隊が齋苑の館に向つて進軍し來るのである。あゝ玉國別一行の運命は如何に成り行くならむか。

(大正一一・一一・二六 舊一〇・八 加藤明子録)

第七章 森議(一一五八)

齋苑いその館やかたを立出たちいでて 惡魔あくまの征討せいとうに上のほりゆく

玉國たまくに別の一行いっかうは 河鹿かしかたう峠たうげに出會でくわした

レコード破やぶりの烈風れつふうを 遁のがれむものと懐ふところの

谷間たにまに身みをば忍しのばせつ 山猿やまさる共どもに兩眼りやうがんを

搔かきむしられて暫しばくは 悲慘ひさんの幕まくを下おろせしが

漸やうやく神かみの御助みたすけに 一いち眼がんのみは全快ぜんくわいし

勇いさみ進すすんで河鹿山かじかやま 峠たつげの南みなみに下くだり行ゆく

日は西山せいざんに春うすづきて 黄昏たそがれ近ちかき晚秋ばんしゅうの

空に輝く月影を
力と頼み古ぼけし

祠の前に一行は
息を休らひ立上り

互に歌を詠みかはし
又もやここを立出でて

前進せむと思ふ折
坂の下より聞え來る

駒の嘶き人の聲
訝かしさよと立ち止まり

耳をすまして窺へば
鬼春別の率ゐたる

先鋒隊と知られたり
スワ一大事兔も角も

敵の様子を探らむと
常磐木茂る森蔭を

これ幸ひと奥深く
忍びて待つこそ危けれ。

玉國別は俄に聞ゆる人馬の物音に噂に聞くハルナの都の大黒主の軍勢、我大神
の鎮まります齋苑の館へ魔軍を引つれ進撃せむとするものならむ、何は免もあれ、
此森蔭を幸ひ様子を窺はむ……と三人に目配せし乍ら、祠の裏深く、樹蔭に身を
隠した。望の夜の月は皎々と照り輝け共、常磐木の老樹の枝を以て天を封じた祠

の森は、際立つて暗い。併し乍ら祠の前は少し廣庭があつて、木立も疎なる爲、森の中よりハツキリと庭の小石迄が見えてゐる。道公は聲をひそめて、
「モシ先生様、アリヤ一體何者でゝいますか。あの物音にて察すれば、餘程の人数と見えます。此様な急坂を隊を組んで登つて來るとは、合點の行かぬ話ぢやありませんか。貴方は其物音を聞くなり、直様此森蔭にお忍びになりましたが、又しても卑怯な奴と、神様にお叱りを蒙り、折角助けて貰つた一箇の目を猿どもにめぐり取られるやうな事はゝいますまいか。烈風に恐れて右の目を神様から間接に取上げられ、貴方は神業をおろそかに致した罪ぢやと云つて、神様にお詫をなさつたでせう。まだ其の舌の根の乾かぬ先に、天下の宣傳使が人馬の足音を聞いて、斯様な所へお忍びになるとはチツと卑怯ではありますまいか。若しも齋苑の館へ進撃するバラモン教の軍隊であらうものなら、それこそ宣傳使の職務はゼ口でせう。どうしてもここでも喰ひ止めなくては、貴方のお顔が立ちますまい。アレ早くも祠の前に騎馬の軍卒が現はれました。一つ此邊で出しぬけに言靈を打出さうぢやありませんか」

玉國別は小聲になつて、手で空を押へるやうにして、

「お前のいふも一應尤もだが、さう急ぐに及ばない。マアとつくりと様子を聞いた上、臨機應變の策を施せば良いぢやないか。わしも今頭が痛んで仕方がないから、言靈の使用機關たる肉體を完全に修理した上でなくては思ふやうに働けない。お前等三人の言靈に力さへあれば、わしは只司令官の地位に立つて采配を揮つて居れば良いのだが、一切萬事今の所では、自分一人で主要なる職務をやつてのけねばならぬのだから、マアさう急がずに私の言ふ通りになつて居るがよからうぞ」

道公「モシ先生、信心に古い新しいはないぢやありませんか。私の言靈が信用出来ないやうに仰有いましたが、貴方のお聲も吾々の聲も、ヤツパリ其原料は同じ神様の水火のイキを調合されたものでせう。千騎一騎になれば、キツと神様は應援して下さいませう。あれ御覽なさいませ、祠の前にだんだんと妙な影が殖えて来るぢやありませんか。何奴も此奴も皆馬に乗つて居ります。エーエ、腕が鳴りますわい、これだから猪突主義も何だが、餘り退嬰主義の先生も困つたものだ。豫定の退却ばかりやつてゐては、千年萬年経つたとて、ハルナの都までは行け

ませぬぞえ」

玉國別「さう血氣にはやるものではない。軽々しく進んで却て敵に利益を與へる

よりも落着き拂つて前後を考へ、徐に言靈を必要と認むれば、全力を集注して、

打出す迄のことだ。先づ先づ鎮まつたがよからう。少しく冷靜になつて呉れ」

道公「忠勇義烈の熱血男子、最早全身の血が沸き返り立つてもゐても居られなく

なりました。そんなら先生、貴方は貴方の御考へがムいませうから、どうぞ私に

單獨行動を許して下さいませ。何程先生だつて、神様の爲活動する吾々の行動を、

頭抑へに阻止なさる譯には行きますまい」

玉國別は冷靜に首を左右に振り乍ら、三人の顔を見廻し、

玉國別「道公、お前の言ふものも一應尤もだ。併し乍ら一行四人の……私は支配

者だ。何程道公が天才家だと云つても、六韜三略の奥の手は分らない。さう神様

の道は單調なものではない、千變萬化の秘策があるのだから、先づ暫く控へたが

よからうぞ」

と言葉尻に力をこめて、睨めつけるやうに言つた。道公は「へー」と厭相な返詞

をし乍ら黙り込んで了つた。祠の前には片彦、久米彦の先鋒隊長が人員點呼をやつてゐる聲、一二三四五六七八九十十一十二……と順々に大小高低の聲が聞えてゐる。何れの聲も皆言葉尻が坂道のやうに立向けに「はね」てゐる様に聞えた。玉國別は小さい聲で落つき拂つて、玉國別「ヤツパリあれはバラモン教の先鋒隊と見えるなア。どうやら齋苑の館に向つて攻撃に參るものらしい。神様の御經綸は今となつて考へれば、實に巧妙を極めたものだ。面白い面白い、これでこそ吾々の首途の功名をあらはす事が出来る」

道公は又もや口を開き、玉國別の膝近く「にぎり」寄り、木蔭に蔽はれた宣傳使の顔を覗き込み、稍息を喘ませ、先生、今のお言葉では貴方もヤツパリ、齋苑館へ攻めよせる敵軍とお認めになつたやうですなア。それが分つて居乍ら、なぜ泰然自若として活動を開始なさらぬのか、首途の功名を現はす時だと仰有いましたが、ムザムザ敵を見遁し、お館へ進入させて、如何してそれが手柄になりませう。貴方も片眼をお取られ遊ばし

て、心氣頓に沮喪し、卑怯未練の雲に包まれ遊ばしたのぢやムいませぬか」

玉國別は冷靜に、

「マア待て、これには深い戦略のあることだ」

道公「へエー、妙な戦略もあるものですねア。クロパトキンのように豫定の退却を

以て唯一の戦略と思召すのですか」

伊太公「オイ道公、三十六計の奥の手だよ」

道公「ソリヤ怪しからぬ。如何して吾々の顔が立つものか、第一先生のお顔も立

つままい。勇將の下に弱卒なし、といふことがある。併し乍ら弱將の下に勇卒あり

だから、チツと勝手が違ふわい。併し乍ら何程大將が弱くても部下さへ強ければ

大將の名があがるものだ。オイ、伊太公、純公、一つ俺と同盟して先生に退隱を

迫り、一大改革を斷行し、道公が司令官となつて大活躍を試みようぢやないか」

純公「匹夫下郎の分際として何を云ふのだ。先生の御胸中が吾々に分つて堪らう

か。吾々が測量し得らるるやうな先生なら、大抵貫目はきまつてゐるぢやないか。

曖昧模糊として捕捉す可らざる所に先生の大人格が勇躍してゐるのだ。何事も指

揮命令に從ふのが俺達の勤めだ。先生の職權まで、下郎の分際として批評する價値があるか。それに貴様は猪武者だから、前後の辨へもなく、先生放逐論まで持出しよつて何の事だ。チツと落着かないか。少し風が吹いてもバタバタ騒ぐ木の葉の様な木端武者が、如何して此御神業が勤まるか」

道公「ソリヤさうかも知れないが、アレ見よ、腹が立つてたまらぬぢやないか。祠の前は黒山の如く敵が集り、人員點呼迄やりよつて、旗鼓堂々行きよる此姿を見て、如何して之が看過出來ようか。三尺の秋水があらば月光に閃めかし、獅子奮迅の勢を以て、片つぱしから斬り立て薙ぎ立て、一泡吹かしてくれたいは山々なれど、何と云つても無抵抗主義の三五教、吾々の武器と云つたら、言靈の發射か、マサ力違へば巖の如き拳骨の武器を有するのみだ。エ、残念な事だなア」

伊太公「俺も何だか、體中が躍動して仕方がない。それに引替へ先生は勁敵を前に控へ乍ら、冷然として岩の如く、默然として唾の如しだ。こりやマア如何したら良いのだらうかなア」

玉國別は靜に兩手をパツと開き、三人を押へつけける様な眞似をして二三回空中

を抑へ、

玉國別たまくにわけ「まてしてしばし神かみの御言みことの下くだるまで

海うみより深ふかき天てん地ちの仕組しくみをを

道公みちこう「これが又またジツと見みのがし居をれませう

みすみす敵てきを前まへに控ひかへてを

玉國別たまくにわけ「なにも神かみの心こころに任まかすこそ

汝等なれら三人みたりの勤つとめと覺さとれを

道公みちこう 『これはしたり思おもひもよらぬ師しの君きみの

へらず口くちには呆あきる而の已みなり』

純公すみこう 『道公みちこうよ貴様きさまは分わからぬことを言いふ

玉國たまくに別の教をしへに背そむくか』

伊太公いたこう 『背そむかぬが道みちか誠まことか知しらね共ども

何なんとはなしに心こころせかるる』

道公みちこう 『伊太公いたこうの心こころは俺おれと同おなじこと

いざいざさらば二人ふたり立たたうか』

玉國別たまくにわけ 皇神すめかみに受うけし命いのちを棄すて鉢ばちに
さやぎける哉かな醜しこのたぶれがが

道公みちこう 其または又おも思おもひもよらぬ仰あふせ哉かな
醜しこのたぶれは吾わが師しの君きみよよ

純公すみこう コリヤ二人ふたり失禮しつれいなことをぬかすない
唐たう變へん木ぼくに何なにが分わからうらう

道公みちこう 卑怯ひけふ者もの二人ふたり豪傑がうけつ又また二人ふたり
いよいよ茲ここに立たて別わかれたりたり

玉國別たまくにわけ「面白いおもしろ勇み言葉いさことばの二人連れふたりづ」

眞理しんりに反そむきて過あやまちをすなな」

玉國別たまくにわけは決けつして片彦かたひこ、久米彦くめひこの一隊いったいの勢いきほひに辟易へきえきし、此森蔭このもりかげに隠かくれたのではない。片彦かたひこ、久米彦くめひこの一隊いったいを無事ぶじに通過つうくわさせ、彼かれが懷谷ふところだにの方面ほうめん迄登のぼった頃ころには、治國別はるくにわけ一行いっかうがやつて來くるに違ちがひない。さうすれば敵てきをやりすぎし、前後ぜんごより一齊いっせいに言靈ことたまを打出うちだし、敵てきを袋ふくろの鼠ねづみとして歸順きじゆんせしめようとの、神算鬼謀しんさんきぼうを抱いだいてゐたからである。併しかし乍ながら三人さんにんの部下ぶかに其祕策そのひさくを示しめすのは餘り價値あまかちなき様やうに思おもはれたからであつた。道公みちこうは玉國別たまくにわけの態度たいどに憤慨ふんがいし、言葉ことばつよく、道公みちこう「モシ先生せんせい、只今ただいま限りお暇ひまを頂戴ちやうだい致しますいたす」玉國別たまくにわけ「ウン望のぞみとあれば暇ひまを與やらう。大分敵だいぶてきが恐おそろしくなつたと見みえるのう。其舉措動作そのきよそどうさは何なんだ。丸まるで蒟蒻こんにやくの様やうだ」道公みちこう「ハイ恐おそろしくになりました。餘り貴方あなたの腰こしが弱よわいので、それが恐おそろしいのですよ。神様かみさまにつくか、師匠ししやうに従つくか、其輕重そのけいちようを考かんがへねばなりません。決けつして先生せんせい

を捨てる心は微塵もありませぬが、神様の爲には涙をのんで反きます。師の影は三尺隔てて踏まずといふことさへあるに、貴方に背く私の心根、熱鐵を呑むよりも辛うムいますが、どうぞ許して下さいませ。此道公は命を的に敵に向つて突喊致します。幸にして勝利を得ましても、決して私の手柄には致しませぬ。ヤツパリ先生の御手柄になるのでムいますから……」

玉國別は涙を流し乍ら、小さい聲で、

玉國別「道公、近う寄れ、耳よりの話がある」

道公は甦生つたやうな氣分になり、二足三足思はず飛び上り、犬が暫く會はなかつた主人に出會うた時のやうに飛び付き抱へつき、玉國別の口元に耳を寄せた。

道公は幾度も首を縦に振り、

道公「ハイ分りました。それならば私も安心致します。流石は先生だ。如何にも妙案奇策です。到底匹夫下郎の企て及ぶ所ではムいませぬ。オイ純公、伊太公、安心せい、ヤツパリ俺の先生は偉いワ。普通一般のお師匠さまとは聊か選を異にしてゐるのだ。こんな先生を持つた俺達は實に幸福なものだぞ」

伊太公いたこう「さうか、そりや有難ありがたい。どんな事ことだい。一寸洩ちよつとらしてくれないか」

道公みちこう「副司令官ふくしれいくわんの俺おれが知しつて居をりさへすれば、それでいいのだ。匹夫下郎ひつぷげろうの分際ぶんざい

として英雄えいゆうの心事しんじを伺うかがはむとするは以もつての外ほかだ。貴様きさま二人ふたりにお明あかしなさるのな

らば、如何どうして俺おれの耳許みみもとへ小聲ここゑで囁ささやきなさる道理だうりがあらう。天機洩てんきもらすなどの謎なぞ

に相違さうあない。そんな事ことに氣きの付つかぬやうな道公みちこうぢやない。マア神妙しんめうに、俺おれのする

ままに盲従まうじゆうする方ほうが、お前達まへたちの天職てんしよくだ。エーン」

純公すみこう「イヤお前まへさへ得心とくしんすれば、俺おれや何なんにも尋たうねる必要ひつえうはないのだ。ナア伊太公いたこう、

さうぢやないか。道公みちこうが得心とくしんする位くらゐだから大抵たいてい定きまつてるワ。先まづ先まづ安心あんしんしたが

よからうぞ」

祠ほらの前まへより進軍歌しんぐんかが聞きえて來くる。四人よにんは耳みみを澄すまして、一言ひとことも洩もらさじと聞き

てゐる。

此世このよを造つくり玉たまひたる 梵天ぼんてん帝釋たいしやく自在じざい在天いてん

大國彦おほくにひこの魂たまの裔すゑ ハルナの都みやこに現あれまして

大黒主と名乗りつつ

豊葦原の瑞穂國

青人草の末までも

恵みの露を垂れ玉ひ

天國淨土を地の上に

開かせ玉ふぞ尊けれ

さはさり乍ら世の中は

月に村雲花に風

醜の曲津は遠近に

さやりて世をば紊しゆく

中にも分けて素盞鳴の

醜の魔神は齋苑館

數多の魔神を呼び集ひ

大黒主の神業を

覆へさむと朝夕に

企みあるこそゆゆしけれ

吾等は神の子神の宮

神に等しき身を以て

此世を荒す醜神を

ゆめゆめ許しおくべきか

來栖の森に來て見れば

神素盞鳴の惡神が

差遣はしし宣傳使

照國別の一行に

思はず知らず出會はし

變幻出沒自由自在

妖術幻術使ひたて

吾等一行は荒風に

木の葉の散りゆく其如く

一度は豫定の退却を

餘儀なくされし悔しさよ

さはさり乍ら世の中は

悪がいつ迄續かうか

天の岩戸を閉したる

速素盞鳴の悪神も

吾々一行堂々と

轡を竝べて攻め込めば

何條以てたまるべき

風をくらつて逃げちるか

但は降參致さむと

吠面かわいてあやまるか

ビワの湖乗越えて

日も漸くにくれの海

コーカス山に逃げ行くか

何は免もあれ吾軍の

勝利は手に取る如く也

あゝ勇ましし勇ましし

勝鬨あぐるは時の間ぞ

進めや進めいざ進め

正義に刃向ふ刃なし

大黒主の御言もて

進む吾れこそ神の宮

神の軍ぞ堂々と

進めよ進めいざ進め

河鹿峠は峻しとも

吹來る風は強くとも

あななひけう 三五教の宣傳使
たとへいくまんきた 假令幾萬來るとも
あらし 嵐の前の燈火と
はかなく消ゆるは案の内
すす 進めよ進めいざ進め
あくま 悪魔の軍勢の亡ぶ迄

こゑいさ と聲勇ましく、
あくがみ 悪神は悪神としてヤハリ自分の味方を善と信じてゐるもの如く、
てんち 天地に恥ぢず進軍歌を歌つてゐる。
いたこう 伊太公は逆上せあがり、
その 其まま物をも言はず、
あだてんばし 韋駄天走りに密集部隊を指して、
こんがうづゑ 金剛杖を打ふり打ふり夜叉の如くにあばれ込
しま 了つた。

かたひこ 片彦、
くめひこ 久米彦の率ゐる軍隊は俄にどよめき立ち、
けは 嶮しき細き谷路を右往左往に
か 驅まはり喚き叫ぶ聲、
たに 谷の木霊を響かせてゐる。

(大正一一・一一・二七 舊一〇・九 松村眞澄録)

第八章 噴飯(一一五九)

玉國別は、伊太公の命令も肯かず森影を飛び出しバラモン教の先鋒隊に向つて
只一人突入し、祠の前にて敵軍は算を紊し右往左往に驚いて往來する有様を遙に
見やり、冷然として救ひに行かうともせず控へてゐる。純公は氣をいらち兩手で
膝をピシヤピシヤと思はず叩き乍ら言葉せはしく玉國別に向ひ、
「モシ、先生様、如何致しませうか。勇敢決死、敵軍の中へ伊太公只一人師の君
の御命令を肯かず飛び込みましたが、何程伊太公鬼神を挫ぐ勇ありとも飛んで火
に入る夏の蟲、寡を以て衆に當るのだから屹度亡ぼされて了ふでせう。サアこれ
から道公と兩人心を協せ援兵と出掛ませう。貴方はお目が悪いのだから何卒此處
にお潛み遊ばし吾々の奮闘振りを御覽なさいませ。サア道公行かう」
玉國別は平然として詞も徐に、
「待て、純公、今飛び出すのは餘り無謀ぢや」
純公「だと云つて貴方は見す見す部下を見殺しになさる御所存ですか。私だつて
親友の危難をどうして高見から見物する事が出来ませう」
道公「伊太公の奴、とうとう荒魂をおつ放り出しよつたな」

玉國別たまくにわけ 伊太公いたこうのは荒魂あらみたまではない。暴魂あれみたまだ。荒魂あらみたまと云ふのは陰忍自重いんにんじちようの心こころだ、彼

は匹夫ひつぷの勇ゆうだ。總すべて武士つはものには二種類にしゆるゐがある』

純公すみこう 二種類にしゆるゐとは如何いかなるものでいますか』

玉國別たまくにわけ 夫それ兵つはものは血氣けつきの勇者ゆうしやと仁義じんぎの勇者ゆうしやとの二種類にしゆるゐがある。抑そもそも血氣けつきの勇者ゆうしやと

は合戦がっせんに臨のぞむ毎ごとに勇いさみ進すすんで臂ひぢを張はり強つよきを破やぶり堅かたきを碎くだく事こと鬼おにの如ごとく忿神ふんしんの如ごと

く速すみやかである。されど此等これらの兵つはものは敵てきの爲ために利りを以もつて含ふくめ、味方みかたの勢いきほひを失うしなふ日は速の

がるるに便べんあれば或あるひは敵てきに降伏かうふくして恥はぢを忘わすれ、或あるひは心こころにも發おこらぬ世よを背そむくものだ。

斯かくの如ごときものは則すなはち血氣けつきの勇者ゆうしやだ。又また仁義じんぎの勇者ゆうしやといふものは、必かならずしも人ひとと先せん

を争あらそひ、敵てきを見て勇いさむに高聲多言かうせいただげんにして勢いきほひを振ふるひ臂ひぢを張はらねども、一ひと度たび約束やくそくを

して憑たのまれた以上いじやうは決けつして二心ふたこころを存ぞんせず、變心へんしんもせず、大節たいせつを臨のぞみ、その志こころざしを奪うば

はず傾かたむく所ところに命いのちを輕かるんずる、斯かくの如ごときは則すなはち仁義じんぎの勇者ゆうしやだ。現代げんだいに於おいては聖人賢せいじんけん

者じや去さりて久ひさしく梟惡けうあくに染そまること多おほきが故ゆゑに仁義じんぎの勇者ゆうしやは尠すくないのだよ』

純公すみこう 成程なるほど、よく判わかりましたが然しかし此危このききふ急存亡そんぼうの場合ばあひ、血氣けつきの勇者ゆうしやも仁義じんぎの勇者ゆうしや

もそんな區別くべつを立ててゐる餘裕よゆうがありませんか。吾々われわれは二者にしや合併がっぺいし血氣けつきの勇者ゆうしやと

なり、仁義の勇者となつて大活動を演じ、兔も角伊太公を救ねばならぬぢやあり

ませぬか」

道公「それもさうだが、何事も神様の御心にあるのだから如何なるのも仕組だ。

神のまにまに任すが宜からうぞ。吾々はこうなつた以上は先生の御命令通り遵奉

するより外に道はないのだから」

純公「何として又今夜はこんな軟風が吹くのだらう。昨日の強風に引き替へ、天

地顛倒も實に甚しい。此森にはどうやら柔弱神が巢くつてゐると見える。如何に

落着かうと思つたつて友の危難を見捨てて如何して安閑として居られやうか」

玉國別「さう騒ぐものでない。神様に於て何か仕組のある事だらう。何事も惟神

の御攝理だ」

純公「先生、さう惟神中毒をなさつては仕方がないぢやありませんか。ここは惟

人も必要でせう。人事を盡して天命を待つと云ふぢやありませんか。袖手傍觀難

を避け安きにつく卑怯の限りを盡して惟神の攝理といつて遁辭を設け、すましこ

んでゐるとは何の事ですか。宣傳使の體面にも係はりませう。エーもう仕方がな

い。此この純公すみこうも伊太公いたこうの爲ために殉死じゆんしの覺悟かくごでムごいます。これが此世このよのお暇いとま乞ごひ、先せん生せい様さま、隨分ずぶん御壯健ごさうけんで御神業ごしんげふに奉仕ほうしなさいませ。道公みちこう、之これが顔かほの見納みをさめになるかも知しれない。隨分ずぶん健まめでお目めの悪わるい先生せんせいの事ことだからお世話せわをして上げて呉くれ。貴様きさまもこれから段々だんだん寒天さむぞらに向むかふから隨分ずぶん體からだに注意ちゆういして風かぜを引ひかない様やうにして呉くれよ。と涙なみだを拂はらひ乍ながら決心けつしんの色固いろかたく早はやくも此場このばを立去たちさり、敵てきの群むれに向むかつて突入とつにふせむとす。其勢そのいきほひ容易よういに制止せいしし難がたくぞ見みえてゐる。玉國たまくに別わけは少すこしく言葉ことばを尖とがらし、純公すみこう、其方そのほうは吾命わがめいれい令れいを無視むしするのか、吾命わがめいれいは即すなはち神かみの命めいれい令れいだ。神かみに背そむいて天地てんちの間に如何どうして活動くわつどうをする積つもりだ。チツと荒魂あらいたまを放ほり出だしたら如何どうだ。なる堪かん忍にんは誰たれもする、ならぬ堪忍かんにんするが堪忍かんにんだ。忍しのぶべからざるを忍しのぶのが所謂いはゆる荒魂あらいたまの發動はつどうだ、仁義じんぎの勇者ゆうしゃだ。純公すみこう、それだつて敵てきの奴やつ、伊太公いたこうばかりか畏おそれ多くも吾等われらの奉ほうずる神柱かむばしら神素盞かむすさの鳴の大神ほかみ様さまを、惡神わるがみ呼よばはりし打亡うちほろぼし呉くれむと、貴方あなたもお聞ききの通とほり進軍しんぐん歌かを歌うたつて居をつただぢやありませぬか。之これが如何どうして看過かんくわする事ことが出來できませうぞ。君恥きみづかしめられて臣死しんしすとは此處ここの事こと、私わたしはこれから死しにます。何卒どうぞ其手そのてを放はなして下くださいませ。』

玉國別たまくにわけ 士しは己おのれを知るもののために死す、玉國別たまくにわけだとて忠誠無比ちゅうせいむひの伊太公いたこうをムザムザ敵てきに渡して何安閑なにあんかんとしてゐるものか。胸むねに萬斛ばんこくの涙なみだを湛たたへ灼熱しやくねつの血ちを漂ただよはして居る千萬無量の吾心裡わがしんり、ちとは推量すゐりやうしてくれても宜よからう」

純公すみこう「へエー」

道公みちこう「何と云つても先生の仰有る通り暫く時機を待てい。何程貴様が賢いと云つてもヤツパリ先生の智慧には叶ふまいぞ。屹度伊太公は假令敵に捕はれても無事に生命は保つてゐるに違ひない。敵の奴、伊太公をムザムザ殺さうものなら、此方の様子が分らないから屹度生命を保たしておくに相違ない。如何なり行くも道のため、世の爲めだ。あまり心配するな」

玉國別たまくにわけは益々冷然ますますれいぜんとして、

「どうで伊太公は吾々の命令を肯かずに單獨行動を採つたのだから、表向きから云へば反抗者と云つてもいいのだが、彼の心も亦酌みとつてやらねばなるまい。何れ敵に捕はれ大變な苦みをするだらうが決して神様はお見捨て遊ばさぬから、なるべく伊太公の苦痛の輕減する様に吾々は祈るより道はない。最前も道公にソ

ツと吾々の策戦計画を打明かし、純公には云はなかつたのは深き考へのあつての事だ。伊太公の様な慌者が飛び出し敵に捕へられてウツカリ喋られては大變だと思つたから、純公は水臭いと思つただらうが、それも已むを得なかつたのだ。今となつては何も隠す必要もない。何もかも安心する様に云つてやらう。實の處はバラモンの軍隊を無事通過させたならば屹度懷谷の方面で治國別様の一隊と出會すであらう。さうすれば前と後から治國別、玉國別の言靈隊が攻撃を開始し、敵を怪我なしに歸順させ誠の道に引入れようと云ふ考へだ。最前も道公に一寸此大略を洩らしたのだから道公もそれがために發動を中止したのだ。アハ、ハ、ハ、

純公「イヤ、それで私も安心致しました。何時の間にか敵軍は行つて了つたぢやありませんか。伊太公は首尾克く敵の捕虜となつたでせうなア」

玉國別「ウン、そりや確に捕虜となつてゐる。何は兔もあれ月夜を幸ひ祠の前まで出張らうぢやないか。然し乍らまだ敵の片割れが残つてゐないとも限らないから聲を立てぬ様、足音を忍ばせて祠の前まで行つて見ようぢやないか」

道公「先生、貴方はお目が悪い上に少しく頭痛がなさるのだから何卒此處に純公

と一緒に休息してゐて下さい。私が一寸斥候隊の役を勤めて來ます。さうして何者も居ないと思へば手を拍つて合圖を致しますから、手がなりましたら何卒ボツボツお出で下さいませ」

玉國別は頭を兩手で押へ乍ら、

「ウン、そんなら御苦勞だが敵の様子を窺つて來て呉れ。暫くの間此の森影で純公とヒソヒソ話でもやつて待つ事としよう」

道公「左様ならば一足お先へ」

と云ひ乍ら祠をさして足を忍ばせノソリノソリと進んで行く。

玉國別「純公、心配を致すな。もう一時ばかりは大丈夫だ。一時経つと敵軍は屹度治國別の言靈に打たれて此處へ逃げ歸つて來るに相違ない。それ迄に十分の休養をなし、英氣を養うておくが宜からうぞ」

純公「イヤ、それは勇ましい事でムいますな。そんなら此處で居乍ら治國別様のお餘りを頂戴すると云ふのですか。それを承はりますと思はず腕がリユウリユウと鳴り出しました。どれ今の内に兩腕に撚をかけて敵を待つ事としませう」

玉國別「腕力の必要はない。お前の身魂に撚をかけて何者が現はれても騒がず、焦らず、泰然自若として大山の如き魂を作つておかねばならないぞ。一寸した事にも慌ふためき輕舉妄動する様な事では惡魔征服の御用は到底駄目だ」

純公「時に道公は根つかから手を拍たぬぢやありませんか。これを思へばまだ殘黨が祠の附近に居るのでせうなア」

玉國別「ウン、確に居る筈だ。二人ばかり見張がついてゐるだらう」

純公「貴方お目の悪いのに、而も夜分ぢやありませんか。祠の前に居る人間が如何して見えますか。私は道公の姿さへ、テンデ分りませぬがな」

玉國別「さうだらう。肉眼では見えない。心の眼で見たのだ。祠の前には二人の男、種々と妙な話をしてゐる。道公は祠の後から息を凝らして一言も洩さじと聞いてゐる」

純公「へエ、その聲が聞えますか。貴方のお頭が異状を來しガンガン鳴つて居るのでそれが人聲に聞えるのぢやありませんか。私の壯健な頭でも耳には入りませぬがな」

玉國別たまくにわけ「俺も心の耳おれ ころ みみで聞いてゐるのだ。天耳通てんじつうの力ちからだよ」
純公すみこう「いやもう感心かんしん致いたしました。ヤツパリ私わたしの先生せんせいは何處どこか違ちがつた所ところがありますな」

一方祠いっぽうほこりの前まへには甲乙かふおつ二人ふたりのバラモン教けうの目付めつけ、祠ほこりの前まへにドツカと坐ぎし、後あとから、もしや三五教あななひけうの宣傳使せんでんしが現あらはれ來きたりはせぬかと片彦將軍かたひこしやうくんの嚴命げんめいによつて臨時關守りんじせきもりを勤つとめてゐる。

甲かふ「オイ、俄にはかに祠ほこりの裏うらから三五教あななひけうの奴やつが一匹飛いっぴぎとび出だしやがつて大變たいへんな番狂ばんくるはせを喰くらはせやがつたぢやないか。片彦將軍かたひこしやうくん様も彼奴あいつの痛棒つうぼうを喰くらつて目めから火ひを出だし落馬らくまなさつたが本當ほんたうに危あぶない事ことだつた。三五教あななひけうの奴やつは生命いのち知らずだからな」

乙おつ「本當ほんたうに盲滅法めくらめつぱふ向むかふ見みずと云いふ奴やつだな。何なんと云いつても素盞すさのを鳴尊のみことの眷族けんぞくだから荒あらつばい事ことをしよるわい。クルスの森もりでは照國別てるくにわけの宣傳使せんでんし一行いっかうに追おひ捲まくられ金剛杖こんがうづゑを以もつて縱橫無盡じゅうわうむじんに叩たたきつけられ、無殘むざんにも散々ちりぢりバラバラに敗走はいそうし、漸やっやくライオン川がはで勢揃せいぞろひし此處迄ここまでやつて來きた位くらゐだから、此軍このいくさは中々なかなか容易よういの事ことで勝利しょうりは得えられまいぞ。何なんと云いつても三五教あななひけうは天下てんかの強敵きやうてきだからな」

甲 併し、何だよ、照國別の一行の次にやつて来るのは玉國別と云ふ事だ。チャーンと斥候の報告によつて片彦將軍には分つてゐるのだよ。大方最前現はれた猪武者は玉國別の部下かも知れないぞ。さすれば玉國別の奴、此祠の近所に潜伏してゐるのぢやあるまいか。そんな事だつたら、それこそ大變だがな

乙 もう三五教の話はいい加減に切り上げたら如何だ。あななひ所かあぶないわ。もうこれきりあぶない教の事は話さぬ様にして、何か一つ口直しに生言靈をチツとばかり匂はしたらどうだ

甲 さうだね、吾々は殿を勤めて居るのだから矢受けになる氣遣ひもなし、先づ先づ安全地帯に居る様なものだ。一つ昔噺でも思ひ出して博覽會でも開かうかな

乙 所りや面白からう。賛成々々、入場料は何程要るのだ

甲 貴様は創立委員だから特別優待券を交附する。随分面白い俺のローマンスを聞かしてやつたら齒が浮く様だぞ。エーン

乙 何を吐しやがるのだい。南瓜に目鼻をつけた様な御面相で、ローマンスもあつたものかい

甲「それでもあつたのだから仕方がない。あつた事を有りのまま曝け出したならば如何に頑強な貴様だつて自然に目が細くなり口が開き鼻がむけつき垂涎三尺止め度なしと云ふ愉快な境遇に引入られるかも知れないぞ」

乙「アハ、何を吐すのだい。そんなら落し話でも聞くとおもつて辛抱して聞いてやらう。折角博覽會を開設しても觀覽者がなければ會計がもてないからな」

甲「俺の生れは貴様の知つてる通りチルの國だ。そこにチルとばかり澁皮の剥けた、否大に澁皮の剥けた雪か花かと云ふ様なホールと云ふナイスがあつたのだ。年は二八か二九からぬ花も羞らふ優姿、そいつが毎日日日乳母に手を引かれて天王の森へ參拜しよるのだ。その通り路が丁度俺の宅の前だ。往復共に俺が何時もお經を調べて居ると、見るともなし、見ぬともなし、妙な目付をして通りやがるぢやないか」

乙「ウン、そらさうだらう。貴様の様な南瓜面は、滅多に類例がないからな。只で化物見るとおもつて通つてみたのだらうよ」

甲「馬鹿を云ふない、思案の外と云ふ事を知つてるか。そこが戀の妙味だ。俺だ

つて自分乍ら愛想のつきる様な此面相、乞食の子だつて、旃陀羅の子だつて、一瞥もくれないだらうと豫期して居たのだ。それが貴様、豈圖らむや、天王の森詣りは表向で其實は俺に何々して居たのだといの、エへ、へ、へ、」

乙「ウフ、へ、へ、コラ、いい加減に落とし話は切り上げぬかい」

甲「馬鹿云ふな。こんなローマンスを落したり放したりして堪らうか。俺が一生の昔噺だから、錦のお守袋さまに入れて固く保護してゐるのだ。夢にだつてこんな事を忘れて堪るかい」

乙「それから如何したと云ふのだ。早く後を云はぬかい」

甲「追徴金は何程出すか。こんな正念場になつてから天機を洩して、貴様等に幾分でも「かき」とられて了つちや忽ち大損耗を來し家資分散の厄に會ふかも知れないからな」

乙「エー、口上の長い奴だな。そんならもう聞いてやらぬわ。俺の方から眞平御免だ、平に此儀はお断申しませうかい」

甲「ウン、其御免で思ひ出した。さうやつたさうやつた俺が經典を一生懸命にな

つて奉讀してゐると松蟲の様な聲で窓の外に「オホ、何とマア驚の様な立派な聲だ事、あんな涼しい聲を出す方は屹度心の綺麗な人でせうね。妾あんな人を夫に假令一日でも持つ事が出来たならば死んでも得心だわ。ナア乳母や」と恥かし相な聲が聞えて来る。經典拜讀に耽つて居つた俺もフツと顔を上げて窓外を眺むれば婢妍窈窕たる美人薔薇の花の雨に潤ふ如き絶世の美人、ハテ不思議よとよく見れば何時も吾門先を通るホールさまだつた。チルの國のホールさまと云へば美人で名高いものだ。ハルナの都の石生能姫だつて眞裸足で逃げ出すと云ふ尤物だからね、エーン」

乙「何ぢや、みつともない。しまりのない聲を出しやがつて、頤の紐が解けて居るぢやないか」

甲「ほどけるのは當然だ」とけて嬉しき二人の仲」と云ふのだからな」

乙「それから如何したと云ふのだ」

甲「それからが正念場だ。俺が一寸氣を利かして、何方か知りませぬが、そこは日が當つてお暑いでせう。破家なれどテクシの住宅、サアサア御遠慮なくお二人

ともお這入りなさい」と「かま」した所、ホールさまはパツと頬に紅を散らし起居振舞も淑やかに裾模様すそもやうに梅花ばいくわを散らしたお小袖こそででゾロリゾロリと庭土にはつちを撫なで乍ながら欣然きんぜんとして御入來ごじゆらいと云ふ光景くわうけいだ。俺も男をとこと生うまれた甲斐かひにはこんなナイスと一言ひとくち話はなしするさへも光榮くわうえいだと思おもつてゐるのに、エへへへ、俺のお館やかたへお這入り遊あそばすぢやないか。其時そのときの嬉うれしさと云いつたら天てんもなければ地ちもなく、一切いっさい萬事ばんじ只此ただこの美人びじん一人いちにん、宇宙うちうの中心ちうしんに立たつて居ゐる様な心地こちがした。エーンそりやお前まへ、エへへへ、ウフへへへ、

乙「そりや何吐なにぬかすのだ。さう意茶いちやつかさずに早く云いつて了しまはないか」

甲「さうするとホールさま、ニタリと笑わらひ紅べにの小さい唇くちびるをパツと開ひらき「これなテクシさま、あたいが毎日まいにち日日ひにち天王てんわうの森もりへ参拜さんぱいするのは何なんのためだと思おもつて下くださいますか」とやさしい聲こゑで吐ぬかしやがるのだ。エへへへ、あゝ涎よだれが主人しゆじんの許ゆるしもなく滅多めつた矢鱈やたらに出動しゅつどうしやがるわい。さうしてな、暖あたたかい柔やはららかい眞白まつしろ氣けの手てで俺おれの手てをグツと握にぎり三みつ四よつ體からだを揺ゆりよつた時ときの嬉うれしさ、エへへへ、

乙「それから如何どうしたのだ」

甲「後は云はいでも知れた事だ。大抵そこ迄云つたら何ぼ頭腦の空氣がぬけた貴様でも推量がつくだらう」

乙「そんな正念場で中止されちや今迄辛抱して聞いた效能がないわい。ドツと張り込んで其後を引續きお耳に達せぬかい」

甲「バベルの塔から飛んだ様な心持でドツと奮發して祕密の庫を開けてやらうかな。實は此テクシもホールさまの柔かい手でグツと握られ柳の様な視線を注がれた時にや、まるで章魚のやうにグニヤグニヤとなつて了ひ四肢五體五臟六腑が躍動し心臓寺の和尚は警鐘を亂打する。まるで天變地異が突發した心持がしたが、そこは戀の名人は違つたものだ。天變も地異も警鐘もグツと鎮壓し素知らぬ顔してキツとなり、儼然たる態度を以てホールさまに向ひ態と澁柿でも囁んだやうな面を装ひ「これはこれは大家のお嬢さまの身を以て吾々如き青二才の手を握られるとは御冗談にも程がある」と「かま」した所、ホールさまもよつぽど俺にホールさまと見えて、思ひ切つたやうに「エーもう斯うなつては構ひませぬ、どうなつと貴方の勝手にして下さい」と柔かい白いデツプリとした體を俺の

膝ひざに投なげつけられた時の嬉うれしさ、エへ、、これが何なんと喜よろこばずに居をれやうか。それで俺おれも男をとこだ、据膳食すゑぜんはねば恥はぢだと思おもひ嫌いやぢやないけれど一つ箸はしを取とつてやらうかと柔やはらかいフサフサした乳ちちの邊あたりをグツと握にぎるや否いなや、豈あに圖はからむや妹圖いもつとらむやホルさまはピーンと肱鐵砲ひぢでつぱうを喰かまじよつた。ハア………よつぽどよく俺おれにおいでて居をるな。乳母うばの前まへだからあんな體裁ていさいを作つくつてゐるのだな。益々ますます前途ぜんとう有望いうぼうだ、八尺やくの男子だんし、箸はしを採とらずんばある可べからずと、又またもやグツと取とりつく途端とたんにホールさまは「エー」と一聲ひとこゑ強力がうりきに任まかせて俺おれの體からだを窓まどの外そとへホール出だしよつた。放ほり出だされた俺おれは門かどの尖とがつた石いしで腰こしを打うち「アイタ、」と思おもつた途端とたんに目めが覺さめた。そしたら貴様きさま蚤のみの奴やつ、俺おれの腰こしを一生懸命いっしやうけんめいに噛かんでけつかつたのだ、アハ、、

乙おつ「ウフ、、、大方おほかたそんな事ことだと思おもつてゐたよ」

祠ほらの後ごから割鐘われがねの様やうな笑わらひ聲こゑ、

「クワツハ、、、」

甲乙かふおつ二人ふたりは此聲このこゑに肝きもを潰つぶし、

「ヤア大變たいへんだ。化物ばけもの現あらはれたり」

と一生懸命に坂道さしてフース フースと息を喘ませ逃げて行く。

(大正一一・一一・二七 舊一〇・九 北村隆光録)

第九章 輸入品(一一一六〇)

月照り渡る森の木蔭に小聲で話し合つて居る二人があつた。これは玉國別、純公の二人なる事は云ふ迄もない。今迄銅色の雲の衣をかぶつて居た圓滿具足の望の月は心ありげに二人の對話を窺くものの如くであつた。數十間隔たつた祠の森の邊りには二三人の男の笑ひ聲が聞えて來た。

純公「先生、此殺風景な魔軍の通つた後に、何とも知れぬ碎けたやうなあの笑ひ聲、修羅道の後へ歡樂郷が開けた様な光景ぢやありませんか。極端と極端ですな

ア

玉國別「ウン、窮すれば達す、悲しみの極は喜びだ。喜びの極みは又悲しみだ。

處で仕方がありますまい。バラモン教の軍隊が治國別様の言靈に打たれて遁走して來るのもう間もありますまい。兔も角もあの祠を指して参りませうか。ヤア手が鳴りました。あれはキツと道公の合圖でせう。サア参りませう」

玉國別「そんなら行かう」

と立ち上り、二つの笠は空中に二本の杖は白く月に照り乍ら地を叩いて下つて往く。

祠の前には、ニコニコした顔を月光に曝し、道公が唯一人踞んで居る。

純公「オイ道公さま、お前一人だつたか」

道公「ウン合計めて一人だ。何も居ないよ。あいさに木の葉がそよ風に吹かれて何だか譯の分らぬ事を、舌を出してペラペラと喋つて居よるが、俺の耳には植物

の聲はトンと聞えないわ」

純公「お前一人で二人も三人もの聲を一時に出したのか、餘程器用な男だねえ、先生様のお越しだ。挨拶をせぬか」

道公「今其處で別れた計りぢやないか。師弟の間柄、十間や二十間分れたつて七

六ヶ敷う挨拶が要るものか。そんな繁文縟禮の事をやつて居ると埒は明かないぞ。先生、貴師は私の心を御存じでせうね」

玉國別「ウンよく分つて居る。時に道公誰も居なかつたか、二人計り居つただらう」

道公「ハイ、猿の子孫がめて二人計り祠の前に犬踞ひになつて唸り合つて居りましたよ。私の神力で、とうとう笑ひ散らしてやりました。アハ、ハ、ハ、」

玉國別「ア、月の光を浴び乍ら此祠の御前を借用して敵軍の歸り來るのを待つ事にしよう」

と云ひながら祠前の恰好の石に腰打ちかけた。

道公「オイ、今二人の奴の話を聞けば伊太公はどうやら敵の捕虜になつたらしいよ。併し乍ら、今となつては悔んでも及ばぬ事だ。此後吾々は伊太公を救ふため、友人の義務を盡さうではないか」

純公「さうだなア、仕方がないなア。神様が伊太公にも御守護を遊ばすからさう悲觀するにも及ぶまい」

道公みちこう「これから半時はんとき以上いじやうも、こんな所ところでチヨコナンとしてこまいぬぜん狛犬こまいぬ然ぜんと待まつて居ゐるのも氣きが利きかぬぢやないか。月つきの光ひかりを浴あびながら、谷川たにがはへ下おりて水みづでもいぢつて來くるか、さうでなければ昔話むかしばなしでもして時ときの到いたるを待まつたらどうだ」

純公すみこう「それでも先生せんせい様が沈黙ちんもくを守まもれと堅かたく仰おつしや有あつたぢやないか」

道公みちこう「モシ先生せんせい、あんまり黙だまつ言つて居ゐますと、口くちの中で蜘蛛くもの巢すが張はります。又また耳みみの穴あなにも棚蜘蛛たなくもが巢すをかけますから蜘蛛くも拂はらひのためすこに少むかし昔話ばなしでもさして下くださいな。手てなと足あしなど、口くちなつと赤坊あかんばんのやうに始しじう終うご動ごかして居をらねば蟲むしの納をさまらない。厄介やくかいの奴やつだから、どうか廣ひろき心こころに見み直なほし聞き直なほし、ここはひと一ひつ宣のり直なほしを願ねがひます」

玉國別たまくにわけ「ウンそれも差支さしつかへはない。併しかし言靈戰ことたませんの準備じゆんびは整ととのうて居ゐるかな」

道公みちこう「プロペラーも、餘あまり長ながらく使用しようしないと鑄さびがついて思おもふやうに圓滑ゑんくわつに回轉くわいてんしませぬから、言靈戰ことたませんの豫行演習よかうえんしゆだと思おもつてチツと發聲機關はつせいきくわんを使用しようさして下ください」

玉國別たまくにわけ「ウンよしよし、もう暫しばひくすれば實戰期じつせんきに入るいるのだから夫それ迄まで何なになりと話はなしたがよからうぞ」

道公みちこう「オイ純公すみこう、忽たちまち願ねがひ濟すみだ。サア最も早はや誰たれ人れに遠慮ゑんりよも要いらぬ、天てん下か唯ゆゑ一いつの雄ゆう

辨家道公さまが布婁那の辨を縦横無盡にまくし立てるから、聞き役になつて呉れ。そして閒さには、ウンとか、なる程とか、其次はどうなつたとか云うて呉れなくしては旨く話の結末がつかないから頼むよ。先づ俺の若い時のローマンスでも陳列してお慰みにお耳に入れることにしよう」

純公「オイ、道公、お前のやうな青瓢箪に目鼻をつけたやうな男でも矢つ張りローマンスはあるのか、妙だねえ」

道公「餘り馬鹿にして貰ふまいか、蛇の道は蛇の道の道公様だ。種々の素晴らしい齒の浮く様な道行話が胸中に満ち溢れて居るのだ。俺計り寶の持ち腐りをして居ても天下國家のためにならないから、一つ此處で祠の森の神様に奉納の積りで餘興に昔語りをやつて見るから謹んで拜聴せよ。エヘン抑此道公さまの御年十八才の頃、俺の生れ在所にホールと云ふ素的滅法界の美人があつたのだ。そした所が、其ホールさまが、乳母と一緒にオペラパツクを細い腕にプリンと提げ、シヨールに蝙蝠傘を携へ裾模様すそもやうに梅の花を散らした素晴らしい衣装をお召しになり櫻見物にお出なさつたのだ。その時俺はまだ十八の色盛り顔の艶も好く、ブラリブラリと

公休日こうきゅうびを幸さいはひ片手かたてを懷ふところに入れ握にぎり鞆丸きんたまをしながら櫻さくらのステツキの乙おつに曲まがつたやつを小脇こわきに挟はさみやつて行いつたと思おもひ給たまへ。さうすると彼方かなたにも此方こなたにも、瓢箪酒へうたんざけを呑のんで居ゐる三人五人七人の團隊だんたいがあつたと思おもひ給たまへ。ウラル教けうの奴やつも、バラモン教けうの奴やつも澤山たくさん居ゐたと見みえて、「飲のめよ騒さわげよ一寸先いっすんさきは闇やみよ、闇やみの後あとには月つきが出る。月つきは月つきでも縁えんのつき」だなんてぬかしやがつて、「へべレケ」に酔よつて居ゐる。そこへホールさまが花はなも恥はぢらふ優姿やさすがた、乳母おんばに手てを曳ひかれ天教山てんけうざんの木花姫このはなひめ様のやうなスラリとした姿すがたでお出いでなさつた。そこへ又また道公みちこうさまが最前さいぜんいつた様な意氣いきな姿すがたでブラついて居ゐた様さまは實じつに詩的してきだつたネー。まるで畫中くわちゆうの人のやうだつたよ。ホルさまは、何奴どいつも此奴こいつも妙めうな顔かほをして酒さけに酔よひ喰くらつて居ゐるのを打うち眺ながめ、梅花ばいくわの露つゆに綻ほころぶやうな優やさしい口許くちもとで、「ホ、ホ、ホ、」と笑わらひたまうたと思おもひたまへ。さうすると酒喰さけくらひの奴やつ、そろそろお嬢ぢやうさまを見みて喰くつてかかつたのだ」

純公すみこうは道公みちこうの話はなしに釣つり込まれ、思おもはず知しらず膝ひざを寄よせ目を丸まるくしながら、

「エ、それから其後そのあとはどうなつたのだ、早く云いはないか」

道公みちこう「この先さきは天機漏てんきもらすべからずだ。これからが肝腎要かんじんかなめの正念場しやうねんばだからな。オ

イ袖そでの下の流行りうかうする世よの中なかだ。こんな神祕しんびてき的話はなしを聞きかうと思おもふなら、些ちつとさかて酒代さかを
はり込こめ、ハルナの大劇場だいげきぢやうだつてこんな實歴じつれきだん談だんは聞きく事ことは出で来きないぞ」

玉國別たまくにわけ「アツハ、ハ、ハ、」

純公すみこう「サア早く次つぎを云いはぬかい。もどかしいぢやないか」

道公みちこう「後はどうなりますか。又明晚またみやうばんのお樂たのしみと云いふべき處ところだが、どつと張はり込こ

んでこの後あとを漏もらさうかなア、エへ、ハ、ハ、あゝ涎よだれの奴やつ、主人公しゅじんこうの許ゆるしも得えず

自由じゆう自在じざいに迸へい出しゅつせむとする不届ふとどきの奴やつだ。エへ、ハ、ハ、もう云いふまいかな。イヤイ

ヤ矢張やつはり祠ほこりの森もりの神様かみさまに奉納ほうなふすると云いうたから出惜だしをしみをしては濟すむまい。エへ、ハ、ハ、

然しかり而しかうして泥醉よいどれ者なかの中なかから顔かほ一面いちめんに熊襲くまそ髯ひげを生はやし、目めと鼻はなとのぐるり計ばかり赤黒あかぐろ

い肌はだを現あらはした大男おほをとこが「ムツク」と立たち上あがり、姫様ひめさまの首筋くびすぢをぐつと驚おどろか

ヤ阿魔あまつちよ、何なんだ失禮しつれいな、此方このほうが折角せつかく機嫌きげんよく酪酩めいていして居ゐるのに何なにがをかしい

のだ、エーン俺おれの面つらを見て笑わらうたが笑わらふに付つけては何なにか譯わけがあらう。サア貴様きさまの

手てで俺おれに一杯酒いっぱいさけをつげ」とかう大おほきく出でやがつたのだ。ホールさまは忽たちまち顔色かほいろを

變かへ「アレ恐こはい乳母うばどうしようか」とおろおろ聲こゑを出だして狼狽うろたへ廻まはつてムむるのだ。

大の男は益々威猛高になり、「俺を誰だと思つて居る。おれこそは月の國にても名の賣れた色の黒い純公だぞ、纖弱い阿魔つちよに嘲弄されてどうして男が立つか。サア神妙に酌をせい」と吐かすのぢや、ホー爾さまは一生懸命「アレ恐い 助けて 助けて」と悲しさうな聲を出して叫ばれたのだ。さうすると其邊中に酒に酔つて居た泥酔者が「ヤ何だ何だ、喧嘩だ喧嘩だ」と姫様と純公の廻りを取り巻く、其光景と云つたら實に物々しいものだった。殆ど蟻の這ひ出る隙もない迄に、寄つたりな、寄つたりな、人の山。そこで此道公は「まつた まつた、暫く待つた」と大手を擴げ、捻鉢巻を「グツ」と締め、二人の中に割つて入る。純公は怒り立ち「どこの何者か知らないが、邪魔をするとお爲にならないぞ」と白浪言葉で睨めつける。俺もさる者日頃覺えた柔道百段の腕前で純公の素つ首引とらへ、空中目蒐けて、プリン プリン プリンと投げやれば、遠の大男も草原へドスンと轉落し、痛いとも何とも云はず、恨めしげに後を眺めてスゴスゴと歸つて往つた愉快さ、心地よさ。今思つてもなぜあんな力が出たかと思議のやうだ。そこでホー爾さまはどうしてムるかと思つて四邊を見れば、乳母に手を引かれ人込を押し

「サ」と逃げて往かれる。後姿を見て俺も何となく、人の居るのも構はず、指を銜へ伸びあがつて見て居たよ」

純公「アハ、ハ、ハ、骨折り損の疲勞儲けと云ふ幕が下りたのだな。大方そんな事だらうと思つて居た。お氣の毒様、ウフ、ハ、ハ、俺だつたら、も一つ進んで優しい姫様の口からお禮を云はすのだが、お前は矢張氣が弱いと見えるのう。ウフ、ハ、ハ、」

道公「何これで終極ぢやないよ、これからが正念場だ。エ、ハ、ハ、ハ、それから、俺も何となく聊か戀慕の心が起り、も一度天女のやうなホールさまのお顔が見たいと、どれだけ氣を揉んだか分らない。併し名に負ふ富豪、隙間の風にさへ當てられないで育つて居るお嬢さまだからどうしても遇ふことは出來はしない。いろいろと考へた結果俺はその風呂焚に入つたのだ。即ち三助に入り込んだのだ。さうすればいつか姫様のお顔を拜する事が出來るであらうと思つたから、エ、純公「何と氣の弱い奴だな。俺だつたら、」先日「は甚いお危ない事で、ムいませぬか。花見の時お嬢様が惡漢にお遇ひなされ

た時お助け申した私は道公だ」と両親に名乗り優しい姫様の手からお茶の一杯も汲んで貰つて来るのだに、貴様は薄惚だから殆ど掌中の玉を失うて来たのだ。そんな失戀話は好い加減に切り上げぬかい。徒に時間を空費する計りぢや」

玉國別「オツホ、」

道公「是からが三段目だ。確かり聞かうよ。風呂焚きの三助に入り込んで丸に十字のついた法被を着用に及び、姫様が今日は入浴か、明日は入浴かと待つて居たが、豈圖らむやその風呂は上女中に入る風呂で、姫様は根つから覗きもしない。

其時の俺の失望と云つたらあつたものぢやない。エーン」

純公「アハ、、、梟の宵企み、夜食に外れたと云ふ光景だな。ウフ、、、」

道公「コリヤ、あまり輕蔑すな、まだ先があるのだ。斯の如くにして、三助を勤

むる事滿一年に及んだ曉、お嬢様は隣國のペンチ國の或富豪の家へお嫁入りと云

ふ事になつたのだ。「ア、しまつた。こんな事なら一年も三助をするのぢやなか

つたに、お聲も聞かねばお姿も見ず杜鵑よりも酷い」と歎き悲しんだのも夢の間、

番頭のテンプラ奴が「一寸三助お前に用があるから此方へ來い」と云うて來よつ

た。何事ならむと稍望みを抱きながら、恐る恐るテンプラの前に罷りつん出ると
思ひも掛けなく、「お嬢様のお嫁入りだから貴様駕籠舁にいつて呉れないか」と
お出なさつた。「ヤレ嬉しや、願望成就時到れり」と二十遍も首を縦に振り「御
用を承はりませう」と云つた處、其翌日いよいよお嫁入りの段となつた。駕籠に
お這りの時のお姿を見た時は魂奪はれ、魄消えむと思ふばかり、殆ど卒倒しかけ
たよ。それからお姫様の駕籠を相棒の奴と舁ぎながら歌うて見たのだ。その歌が
また奇抜だつたよ。

俺は十八お嬢さまは十七の花盛り 一人の乳母に手を曳かれ

梅を散らした裾模様 黒縮緬の扮装で

ぞろ ぞろ ぞろと櫻見に お越しなさつた其時に

彼方に五人此方には 又七人と酒を呑み

呑めよ騒げよ一寸先暗夜 闇の後には月が出る

月は【つき】だが縁の【つき】 ウントコドツコイ ドツコイシヨ

髯武者男の純公が

花も恥らふお嬢さまを

とつ捕まへて酌せいと

駄々を捏ねたる最中に

飛んで出たのは俺だつた

純公の奴めが腹を立て

武者振りつくのをとつかまへ

習ひ覺えた柔道で

ウンと一聲なげやつた

空中二三度回轉し

命辛々逃げて往く

後振りかへり眺むれば

ホールの姫は逸早く

乳母にお手を引かれつつ

館をさして歸り往く

あれ程美しいお姫さま

も一度お顔が拜みたい

何とか工夫はないものか

手蔓を求めて三助と

なつて月日を待つ中に

思ひも掛けぬ御結婚

あゝ是非もなし是非もなし

爺が鳶に油揚

もつていなれた心地して

せめては駕籠の御供を

さして貰つたを幸ひと

此處迄ウントコついて來た

ウントコドツコイ ドツコイシヨ

と足あしに合あはせて唄うたつたら、駕籠かごの中なかから細ほそい涼すずしいホールさまの聲こゑとして、「この
駕籠かご一寸待まつた。俄にはかにお腹なかが痛いたみ出だしたから、今日けふの結けつ婚こん嫌いやだ嫌いやだ 歸かへる」と仰おつ
有しやつてお聞ききにならぬ。サア大變たいへんだ、結けつ婚こんの途とちう中ちゆうお姫ひめ様さまが引返ひつかへしたのだから、ど
つちの家いへも大騒動おほさわどう、それからとうとう駕籠かごは家いへに歸かへり、奥おくの間まにサツサとお姫ひめさ
まは腹痛はらいたも忘わすれて入はいつて仕舞しまつた。よくよく聞きけば「あの駕籠かご昇かきと夫婦ふうふにして
呉くれねば妾わたしは死しぬ」と駄だ々だを捏こねたと思おもひ給たまへ。サアこれからがボロイのだ。と
うとう俺おれはホールさまの座敷ざしきに呼よび入いれられ、山野河海さんやかかいの珍肴ちんかう、姫ひめの細ほそい白しろい手て
でお酌しやくをして貰もらひ、初はじめて結けつ婚こんの式しきを擧あげて夫婦ふうふとなり、澤山たくさんの財産ざいさんを與あたへて貰もら
ふ事ことになつたのだ。さうすると、月つきに村雲花むらくもはなに嵐あらし、姫ひめ様さまと俺おれと杯さかづきを交かはして居ゐ
所ところへ、阿修羅王あしゆらわうの荒あれ狂くるふが如ごとく入はいつて來きたのは純公すみこうだつた。サア此方こちらの襖ふすまは叩たた
き毀こはす、火鉢ひばちをなげつける。亂暴狼藉らんぼうろうぜき、そこで俺おれも、も一度いちど姫ひめに吾手わがて竝なみを見みせて
おく必要ひつえうがあると思おもひ、「サア來こい來きたれ」と手てを擴ひろげた途端とたん、目めが醒さめたら、何なん
の事ことだ、破やぶれ小屋こやの二疊敷にでふじきで汗あせビツシヨリかいて夢ゆめを見みて居ゐたのだつた、ア
ハ、ハ、ハ、」

玉國別たまくにわけ 『ウツフ、、、』

純公すみこう 『ワハ、、、、馬鹿ばかにするない』

道公みちこう 『何なに、バラモン國こくから直輸入ちよくゆにふした計りばかの舶來品はくらいひんの卸し賣りおろだ、アハ、、、』

(大正一・一・二七 舊一〇・九 加藤明子録)

第三篇 河鹿かじかの靈嵐れいらん

第一〇章 夜よるの晝ひる（一―一六―）

齋苑いその館やかたに現あれませる

瑞みづの御魂みたまの救主すくひぬし

かむすさのをのおほかみ
神素盞鳴大神の

みことかしこ
神言畏み龜彦は

はるくにわけ
治國別と改めて

まんこうはるこういそこう
萬公晴公五三公の

みたり
三人の御供を従へつ

かみ
神の教を菊子姫

つま
妻の命に相別れ

こがらすさ
閑荒ぶ秋の野を

あし
足に任せてテクテクと

かじかたうげ
河鹿峠の山麓に

すす
進み來れる折もあれ

ちびき
千引の岩も飛び散れと

いはぬ計りに吹きつける

しなど
科戸の風に面をば

さらして漸く頂上に

いき
息をはづませ登りつき

あたりの巖に腰をかけ

よも
四方の原野を見はらして

わが
吾身のこし方行末を

おも
思ひまはずぞ床しけれ。

まんこう
萬公「先生様、何と佳い風景ぢやありませんか。河鹿峠の頂上から四方を見はら

くわうけい
す光景は何時も素的ですが、あれを御覽なさいませ。廣大なる原野の果に、白雲

きぬ
の衣を被つて、頭をチヨツクリと出して彼の高山は、何とも云へぬ正しい姿ぢ

やありませぬか。八合目以下は綿の衣に包まれ、頭の上は常磐木が鬱蒼と生え茂り、腰あたりに白雲の帯を引締めてある光景と言つたら、何とも云へない床しさ否、眺めですなア。斯う四方を見はらした山の上に立つてみると、何だか第一天國へでも登りつめたやうな気分が漂ふぢやありませぬか。願はくはいつ迄も斯様な崇高な景色を眺めて、ここに千年も万年も粘着して居りたいものですなア」

治國別「さうだ、お前の言ふ通り、雄大な景色だなア。佐保姫もこれ丈の錦を、廣大無邊の原野に一時に織なすといふのは、餘程骨の折れる事だらう。これを思へば天然力否神の力は偉大なものだ。造化の妙機活動に比ぶれば、實に吾々の活動は九牛の一毛にも足らないやうな感じがして、實に神様へ對しお恥かしいやうだ。ア、かかる美はしき地上の天國に晏如として生を送らして頂く吾々神の子は何たる幸福なことであらう。神の造られし山河原野は俺達のやうに別に朝から晩まで喧しく言問ひせなくても、花の咲く時分には一切平等に花を咲かし、實を結ぶ時には統一的に實を結ぶ。實に神の力は絶大なものだ」

晴公「實に晴々とした光景ですなア。天か地か地か天か、殆ど判別がつかないや

うな極樂ごくらくの光景くわうけいぢやありませんか。此この無限むげん絶ぜつ大だいなる世界せかいに生せいを稟うけ、自然しぜんの天惠てんけいを十二じふにぶん分に樂たのしみ、自由じいう自在じざいに一切いっさい萬物ばんぶつを左右さいうし得うる權能けんのうを與あたへられ乍ながら、小ちひさい欲よくに捉とらはれて屋敷やしきの堺さかひを爭あそうたり、田畑たはたの畦くろを取合とりあひしたりしてゐる人間にんげんの心こころが分わからぬぢやありませんか。私わたしは今いまとなつて此この景色けしきを見るみに付つけ、神様かみさまのお力ちからの偉あだ大いなるに驚おどろきました。ヤツパリ人間にんげんは低ひくい所ところに齷齪あくせくして世間せけんを見みずに暮くらしてると、自然しぜん氣きが小ちひさくなり、小利小欲せうりせうよくに捉とらはれて、自みづから苦惱くなうの種たねを蒔まくやうになるものですなア。あゝ惟かむながらたま神靈ちんげい幸倍坐世ちへま也や」

治國ちこく別べつ、併しかし乍ながら大神おほかみ様に承うけたまはれば、バラモン教けうの大黒主おほくろぬしの軍勢ぐんぜいが此この峠たうげを涉わたりて齋苑いその館やかたへ攻せめ來きたるとの事ことだ。吾々われわれ宣傳使せんべんしを四組よぐみも五組いっくみも月つきの國くにへ御派遣遊ごはけんあそばしたのも、深ふかき思召おほしめしのあることだらう。ハルナの都みやこなどは黄金わうごん姫ひめ様の御一行ごいっかうがお出いでになれば十分じふぶんだ。要えうするに吾々われわれは大黒主おほくろぬしの軍隊ぐんたいに向むかつて言靈戰ことたませんを開始かいしすべく派はけ遣んされたのであらう。さうでなくては、何程なにほど勢せい力りき無限むげんの大黒主おほくろぬしだとして齋苑いその館やかたの宣傳使せんべんし、殆ど總出そうでといふやうな大袈裟おほげさなことは神様かみさまが遊あそばす筈はずがない。お前達まへたちも其考そのかんがへで居をらなくてはならないぞ。月つきの國くには名なに負おふ大國たいこく五天竺ごてんじくといつて五州ごしうに

大別され、七千餘ヶ國の刹帝利族が國王となつて、互に鎬を削り、此美はしき地上の天國に修羅道を現出してゐるのだから、仁慈無限の大神の心を奉戴し、吾々一行は如何しても五六七神政出現の爲めに粉骨碎身の活動を勵まねばなるまい、實に重大なる使命を與へられたものだ。天地の大神様に十分に感謝をせなくてはならない。あゝ有難し有難し、惟神靈幸倍坐世』

と合掌し瞑目傾首してゐる。

五三公「モシ先生様、お話の通りならば、大黒主の軍隊はキツと途中で吾々と遭遇せずでせうなア』

治國別「ウン、最早間もあるまい。各自に腹帯を確り締めておかねばなるまいぞ五三公「ハイ、それは齋苑館出立の時から、腹が瓢箪になる程細帯でしめて來ました。赤い筋がついて痛い位ですもの、大丈夫ですワ。併し少しく腹が減りましたから、ここでパンでも頂きますか。さうでなくては、マ一度締め直さなくちやズリさうになつて來ました』

治國別「アハ、ハ、ハ、ハ』

萬公「オイ五三、分らぬ男だなア。そんな腹帯ぢやないワイ。心の腹帯をしめ…と仰有るのだ」

五三公「心の腹帯で、どんなものだい。無形の腹帯を如何して締めるのだ。そんな荒唐無稽のことをいふと、人心惑亂の罪で、バラモン署へ拘引されるぞ」

萬公「アツハ、徹底的に没分曉漢だなア。天の配劑宜しきを得たりといふべしだ。至聖大賢計りが斯う揃つてゐると、道中は固苦しくて根つから興味がないと思つてゐたが、五三公のやうなゴサゴサ人足が混入してゐるとは、面白いものだ。悪く言へば天の惡戯、よく言へば天の配劑だ。チツとばかり貴様があると蟲の藥になるかも知れない。アハ、アハ、」

五三公「コリヤ餘り口が過ぎるぢやないか。何だ、結構な神の生宮さまを掴まへて竹の子醫者か何ぞのやうに、天の配劑だとは、餘りバカにするぢやないか」

萬公「クスクスクス」

五三公「コリヤ、狸を青松葉で熏べた時のやうに、何をクスクス吐すのだ。チツと俺のいふことも能く【せんやく】（煎藥）して聞け、【こうやく】（膏藥）の

爲になるから、ヤクザ人足奴、そんな事でマサカの時のお【やく】に立つかい、

エ、ー

萬公「そんなこた、如何でもいゝワ。早くパンでも頂いて腹をドツシリと拵へ、敵の襲來に備へるのだ。グツグツしてはあられないぞ」

五三公「敵に供へてやる丈のパンがあるかい。自分の生宮に鎮座まします喉の神様や佛様に供へる丈より持つてゐないのだから、餘計な敵の世話迄やく必要があるか。敵に兵糧を與へる奴ア、馬鹿の骨頂だ」

萬公「神様の道からいへば、敵も味方も決してあるものでない。三十萬年未來に、自轉倒島に謙信、信玄といふ大名があつて、戦争をやつた時に、一方の敵へ向けて鹽を贈つたといふ美談があるさうだから、敵を仁慈を以て言向和すのには、恩威並び行はねば到底駄目だ。貴様の筆法で言へば丸切りウラル教式だ。自分さへよければ人はどうでもいいといふ邪神的主義精神だから、そんなことでは大任を雙肩に擔ひ玉ふ治國別先生のお供は叶はぬぞ。アーン」

治國別「オイ萬公、五三公、いらざる兄弟喧嘩はやめたがよからうぞ。サア是か

らがお前達の活動舞臺だ」

萬公「敵の片影を見ず、今から捻鉢巻をして氣張つた所で、マサカの時になつたら待ち草臥れて力が脱けて了ふぢやありませんか」

治國別「イヤイヤ半時許り経てばキツと敵軍に出會するにきまつてゐる。玉國別と吾々々が坂の上下から言靈を打出して、誠の道に歸順せしむべき段取がチヤン

とついてゐるのだ。能く心を落着けて、騒がない様にせなくちやならぬぞ。千載一遇の好機だ、之を逸しては、神の大前に勳功を現はす時期はないぞ」

萬公「それ程敵は間近に押寄せて居りますか。さう承はらば吾々もウカウカしては居られませぬ。併し乍ら黄金姫様や照國別様の一行は大衝突をやられたでせう

なア」

治國別「多少の衝突はあつたであらう。併し何れも御無事だ。あの方々と吾々は使命が違ふのだから……丁度此下り坂を楯にとつて、言靈戦を開始すれば屈竟

の地點だ」

五三公は、

「ヤアそれは大變、時こそ到れり、敵は間近に押よせたり。吾こそは三五教の宣傳使治國別の幕下五三公命だ。バラモン教の奴原、サア來い來れ。一人二人は邪魔臭いイヤ面倒だ。百人千人束に結うて束ねて一度にかかれ。ウンウンウン」と左右の拳を固め、稍反り氣味になつて、胸の邊りをトントントンとなぐつてゐる。

治國別「アツハ、五三公の武者振りは今始めて拜見した。何時迄も其勢を續けて貰ひたいものだなア」

萬公「コリヤ五三の蔭辨慶、何だ今からさうはしやぐと、肝腎要の時になつて、精力消耗し、弱腰を抜かし、泣面を天日に曝さねばならぬやうになるぞ。モウ少し沈着に構へぬかい。狼狽者だなア」

五三公「敵の間近き襲來と聞いて、如何してこれが騒がずに居られようか。弓腹ふり立て堅庭に向股ふみなづみ、淡雪なせる蹴えちらし、嚴の雄健びふみ健び、嚴の噴讓を起して、海往かば水潛屍、山往かば草生屍大神の邊にこそ死なめ、閑には死なじ、額に矢は立つ共背中矢は立てじ、顧みは爲じと、彌進みに進み、

彌い逼やりせに逼まり、山やまの尾を毎ごとに追おひ伏ふせ、河かはの瀬せ毎ごとに追おひ散ちらし、服まつろへ和やはし言こと向む和やはす
五い三公そさまの獅し子し奮ふん迅じんの武む者しや振ぶりだ。此この位くらの勢いきがほなくて、如ど何うして大たい敵てきに當あたられる
ものかい」

萬まん公こう「貴き様さまは頻しきりに愚ぐ問もんを發はつするから、此こ奴いつア、チト低てい能のう兒じだと思おもつてみたが、
比ひ較かく的てき俐り巧かうなことを竝ならべ立たてるぢやないか」

五い三公そ「きまつたことだい。三あ五な教ひけうの祝のり詞と仕じ込こみだ。祝のり詞と其そのままだ。群むらりよせ來くる
敵てきを拂はらひ玉たまへ清きよめ玉たまへと申まをすことの由よしを、平たひらけく安やすらけく聞きこし召めせと申まをす。惟かむな

神が靈ら幸ち倍ま坐は世ま」

萬まん公こう「アツハ、々々、此こ奴いつア又また偉えらい空から威ゐ張ゑりだなア、のう晴はる公こう、餘よ程ほどいゝ掘ほり出だし物もの
ぢやないか。マサカの時ときになつたら、尻しりに帆ほかけてスタコラヨイサと逃にげ出だす代しろ

物ものだぜ」

晴はる公こう「ウツフ、々々、」

萬まん公こう「一ひとつ此こ處こで風ふう流りゅう氣き分ぶんを養やしなつて參まりませうか。大たい敵てきを前まへに控ひかへ悠いっ々いっとして餘よゆ
裕しやく綽くしやく々しやくたりといふ益ます良ら男をの一いち團だんですからなア」

治國別はるくにわけ 『ウン、一つやつて見よひと』

萬公まんこう 『見わたせば四方よもの山野やまのは錦着にしきぎて

吾わが一行いつかうを迎むかへゐる哉かな』

五三公いそこう 『なあんだ、そんな怪體けたいな歌うたがあるかい、かう歌うたふのだ、エ、ー……

見みわたせば、山野やまのの木々きぎは枯かれはてて

錦にしきのやうに見みえにける哉かな』

萬公まんこう 『ハツハ、何なんと名歌めいかだなア、柿かき本人もとひと磨まろが運上うんじやうと取りくに来くるぞ』

五三公いそこう 『柿かきの本もとぢやないワ、山上やまのうへのあかひと赤人ひとだ。一つひと足曳あしびきの山鳥やまどりの尾ををやつてみようか

な、エ、ー』

萬公まんこう 『そりや面白おもしろからう。サアサア詠よんだり詠よんだり三十一みそひと文字もじを……』

五三公いそこう「山やまの上へにあかん人ひとこそ立ちにけり

萬更馬鹿まんざらばかとは見えぬ萬公まんこう」

萬公まんこう「コリヤ五三いそ、チツと御無禮ごぶれいぢやないか。禮儀れいぎといふことを辨わかへてゐるか」

五三公いそこう「禮儀れいぎを知らぬ奴やつがどこにあるかい。搦鉢すりばちの中なかへ味噌みそを入れてする奴やつぢやないか、エ、ー。それが違ちがうたら、賣僧坊主まいすぼうずが失敗しつぱいの言譯いひわけに腹はらを切る眞似まねする道だう

具ぐだ。エ、ー」

萬公まんこう「アハ、、此奴こいつアいよいよ馬鹿ばかだ。レンギと禮儀れいぎと間違まちがへてゐやがる」

五三公いそこう「其位そのくらゐな間違まちがひは當然たうぜんだよ、間違まちがひだらけの世よの中なかだ。石屋いしやと醫者いしやと間違まちがへたり、役者やくしやと學者がくしやと混同こんどうしたり、大鼓たいこと大根だいことを一つひとにしたりする世よの中なかだもの、

當然たうぜんだ。エ、ー」

萬公まんこう「ウツフ、、だ、イツヒ、、だ、アツハ、、阿呆あほうらしいワイ。そんな馬鹿ばかなことをいつてゐると、それ見みる、鳶とびの奴やつ、大きな口くちをあけて笑わらつてゐやが

るワ」

五三公「きまつたことだよ。飛び放れた脱線振りを發揮してるのだもの。鳶だつて、笑つたり呆れたり舌を巻いたりするだらうかい」

治國別「三人ともパンを食つたかなア、まだなら早く食つておかないと、時期が切迫したやうだ」

五三公「ハイ時機切迫と仰有いましたが、畏まりました。ジキに切迫とパクついで腹でも拵へませう。ハラヒ玉へ清め玉へだ」

と無駄口を叩き乍ら、パンを取出し、パクつき始めた。

風がもて来る人馬の物音騒々しく手に取る如く耳に入る。

萬公「ヤアお出たなア。コリヤア面白い。先生、一つ萬公の活躍ぶりを御覽下さい、花々しき大活躍を演じて見ませう」

治國別「心を落つけて三五教の精神を落さない様に一番槍の功名をやつて見たがよからう。サア行かう」

と蓑笠をつけ、杖を左手に握り、登り来る敵に向つて悠々迫らざる態度を持ち、宣傳歌を歌ひ乍ら降つて行く。

治國別はるくにわけ 神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと惡あくとを立別たてわける

此世このよを造つくりし國くにの祖おや 國治立くにはるたちの大神おほかみの

守まもり玉たまへる神かみの道みち 朝あさな夕ゆふなに身みを盡つくし

心こころを盡つくす三五あななひの 神かみの柱はしらと現あれませる

神素盞かむすさの鳴をの大神おほかみの 吾われこそ珍うづの神司かむつかさ

治國別はるくにわけの宣傳使せんでんし 萬世祝よろづよいはふ龜彦かめひこが

名なさへ目め出でたき萬公まんこうや 暗夜やみよを晴はらす晴公はるこうさま

三五さんごの月つきの御教みをしへに ゆかりの深ふかき五三公いそこうの

三人みたりの司つかさと諸共もろともに 七千餘國しちせんよこくの月つきの國くに

天地てんちを塞ふさぐ曲神まががみを 神かみの賜たまひし言靈ことたまに

服まつろひ和やはし天國てんごくを 地上ちじやうに立たてむ御神策ごしんさく

岩石崎嶇がんせききくたる河鹿山かじかやま 烈はげしき風かぜに吹ふかれつつ

苦くもなく越こえて來きたりけり あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈幸みたまさちはひましまして ハルナの都みやこに蟠わたかまる

八岐大蛇の化身なる
大黒主の軍隊を

これの難所に待ち受けて
一人も残さず言靈に

打平げて齋苑館
珍の御前に復り言

申さむ時こそ来りけり
あゝ勇ましし勇ましし

旭は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

嵐は如何に強くとも
敵は幾萬攻め來とも

いかでか恐れむ生神の
教を守る吾一行

朝日に露か春の雪
脆くも消ゆる曲津日の

魂の行方ぞ憐れ也
此世を造り玉ひたる

國治立大神は
吾等一行の信徒に

廣大無邊の神徳を
下し玉ひて此度の

吾等が征途を照らしまし
紅葉あやなす秋の野の

木々の梢に吹き當る
醜の嵐に會ひし如

曲を千里に追ひ散らし
敵を誠に言向けて

救ひやらむは目のあたり 玉國別の一行は

神の御言を畏みて 祠の森の木下蔭

月の光を浴び乍ら 吾等の一行を待つならむ

上と下より挟み打 神算鬼謀の此仕組

暗黒無明の魂持つ 片彦久米彦將軍は

飛んで火に入る夏の蟲 袋の鼠も同じこと

思へば思へば氣の毒や 直日に見直し聞直し

詔直しつ々天地の 教の道に救ひ行く

吾身の上ぞ楽しけれ あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

萬公は足の爪先に力を入れ、再び吹き來る夜嵐に面を向け乍ら、
月照る道を歌ひつつ下りゆく。

今宵の月は望の月

晝の白晝の如くなり

河鹿の山の頂上に

立ちて四方を見はらせば

大野ヶ原は綾錦

紅葉の園となり果てぬ

吾等一行四人連

晝と夜とを間違へて

峠の上に佇立して

四方を見はらす時もあれ

目下に聞ゆる鬨の聲

風がもて来る足音に

つつ立ち上りウントコシヨ

バラモン教の魔軍の

攻め来りしと覺えたり

いざいざさらば いざさらば

千變萬化の言靈を

打出し敵を悉く

天と地との正道に

服ひ和し天國の

其樂しみを地の上に

常磐堅磐に立てむとて

さしもに嶮しき坂路を

勢込んで下りゆく

あゝ面白し面白し

神に任せし吾々は

假令數萬の敵軍も

如何でか恐れひるまむや

あゝ惟神々々かむながらかむながら 神の守りを蒙りてかむ

晴公五三公二人ともはるこういそこうふたり シツカリ致せよ今や時いたいまとき

敵は閒近に押よせたてきまぢかおし あれあれあの聲聞いたかいこゑき

半死半生の叫び聲はんしはんしやうさけこゑ 兵兒垂れよつた鹽梅だへこたへんばい

駒に跨りハイハイとこままたが 登つて来る聲がするのぼきたこゑ

俺等は坂のてつぺからおれらさか 生言靈を打出せばいくことたまうちだ

不意を打たれし敵軍はふいとうてきぐん 面を喰つて忽ちにめんくらたちま

潰走するは目のあたりくわいそつま 面白うなつてお出でたなおもしろ

旭は照るとも曇るともあさひてくも 月は盈つとも虧くるともつきみか

假令大地は沈むともたとへだいちしづ 三五教はやめられぬあななひけう

お道を守つてゐたおかげみちまも こんな勇壯活潑なゆうさうくわつぱつ

實地の戦が出来るのだじつちいくさでき 向ふは兇器數多くむかきようきかずおほ

槍の切先揃へ立てやりきつさきそろ 林の如く抜き翳しはやしごとぬかざ

迫り来るに引きかへてせまきた 此方は神變不可思議のこちらしんべんふかしぎ

無形の言靈潔く

ドンドンドンと打ち出し

上を下への大戦

力を試す時は来ぬ

ウントコドツコイ

ドツコイシヨ

今こそ大事の體ぞや

一人を以て幾百の

魔神に當る貴重の身

指一つでも怪我したら

大神様に濟まないぞ

あゝ惟神々々

神の光を目のあたり

輝かし照らす時は来ぬ

進めよ進めいざ進め

神は吾等と共にあり

アイタ、タツタ夜の道

目玉が狂うてしくじつた

これこれモウシ宣傳使

ここが適當の場所でせう

敵の登るを待ち伏せて

不意に打出す言靈の

大接戦をやりませうか

治國別々 餘り慌てて下るにも及ぶまい。ここが屈竟の場所だ。先づ歌でも歌つて、敵の近付くのを待つ事にしよう。名に負ふ急坂だから、近くに見えてゐても容易

に登つては來られまい」
萬公「ハアさうですなア。先づ先づ敵の行列を拜見して徐に不意打を喰はしてやりませうかい。アハ、ハ、ハ、」

(大正一一・一一・二七 舊一〇・九 松村眞澄録)

第一章 歸馬(一一六二)

治國別一行は、片彦、久米彦の一隊馬上に跨り、いとも困難の態にて登り來る様子やうすを面白氣おもしろげに見下して居る。

萬公「ヨウ、おいでた おいでた強敵御參なれだ。この細い坂道を蜿蜒として長蛇うだの登のぼるが如ごとく行進かうしんし來きたる光景くわうけいは丸まるで繪卷物ゑまきものを見みる様やうだなア。霜黒葛しもくろくづら來くるや來くるや瘦馬やせうまの、毛曾呂毛曾呂もそろもそろに屁へを放こき來きたるといふ珍妙奇天烈ちんめうきてれつの大部隊だいぶたいだ。マアゆつくりと此處ここに待まつて居ゐませう。假令たとへ何百人居なんびやくにんをつた所ところで一列いちれつより進すすむ事ことは出で來きない

のだから、一人々々將棋倒しにやつつけければ手間も暇も要つたものぢやない、さ
てもさても運の悪い奴だな。一卒之を守れば、萬卒進む能はざる絶所と云ふもの
は此處の事だらう。アハ、ハ、ハ、ハ、治國別様、何と愉快ぢやありませんか

治國別 仇人の攻め来る見れば流石にも

八岐大蛇の姿なるかな

萬公 面白し蜈蚣の陣を張り乍ら

寄せくる敵も龍頭蛇尾に終はらむ

晴公 遙々とハルナの都を立ち出でて

河鹿峠で泡を吹くかな

五三公いそこう 風かぜが吹ふく此この山道やまみちで泡あわを吹ふく
五三公いそこう之これ見みて法螺ほらを吹ふくなりら

治國はるくにわけ別こころ 心こころせよ三人みたりの司つかさ惟むながら神かみ
神かみに任まかせて刃はむか向むかふな夢ゆめ

萬公まんこう 大神おほかみの館やかたを汚けがす枉まが神かみを
見みの逃のがし返かへす事ことやあるべきら

晴公はるこう 人ひとは皆みな天あめと地つちとの御子みこなれば
仇あだと云いへども憎にくむべしやはら

五三公いそこう 一條いちでうの此急坂このきふはんを登り來るのぼりくる

馬うまの足竝危あしなみあやふく見ゆるもみ」

治國別はるくにわけは悠然いいうぜんとして坂道さかみちの傍かたへに腰こしを卸おろし、上り來る敵てきの大部隊だいぶたいを見下し乍ら、
「ヤ、三人さんにんの者共ものども、此治國別このはるくにわけが敵てきの大將たいしやうに掛合かけあひを初はじむるまで、お前等まへたちの方ほうから慌あわて出しては可いかないぞ、呉々くれくれも注意ちゆういしておく」

萬公まんこう「さうだと申まをして素知そしらぬ顔かほして居をれば、いゝ氣きになつて齋苑館いそやかたへ進撃しんげきするぢやありませんか。今いまとなつて、そんな事ことを仰有おつしやると、何なんだか張りきつた力ちからがサツパリ抜ぬけて了しまふぢやありませんか」

治國別はるくにわけ「これしきの敵軍てきぐんに對たいし、かかる有利いうりの地點ちてんに陣取ぢんどり乍ら、別に力ちからも何も要いつたものぢやない。一人々々ひとりひとり捉つかへて善言美詞ぜんげんびしの言靈ことたまを浴あびせかけ、誠まことの道みちに歸順きじゆんさすれば可いいぢやないか。然しかし乍ながらお前等まへたちが慌あわて出すと、却かへつて折角せつかくの作戦計畫さくせんけいかくが畫餅ぐわへいに歸きす様やうの事ことがあれば、千仞せんじんの功こうを一簣いっさきに缺かく様なものだ。まづまづ落おち着ついたが宜よからう」

萬公まんこう「さうだと云つて何だか氣が勇んでなりませぬわ。此言靈戰は私に先陣を仰付け下されますれば有難うムいます」

治國別はるくにわけ「ウン、しつかりやれ、私はここでお前の言靈の發射振りを観戰する。晴公、五三公を貸してやるから、三人心を協せ敵に向つて慈悲の彈丸を打出すのだ。

いゝか、分つたかな」

五三公いそこう「エ、今自費の彈丸を打出せと仰有いましたが、私は自費の彈丸も官費の彈丸も持つてゐませぬが如何致しませうかな」

萬公まんこう「エ、分りもせぬ癖に喋くるない。慈悲と云ふ事は恵と云ふ事だ。ま一つ

わつて云へば情と云ふ事だ。シンパシイの心を以て敵に向へと仰有るのだ。貴様

は如何しても現界的の頭が脱けぬと見えて、直に何事でも統計的に解釋し、官費

だの自費だのと會計係か何かの様に直に、そんな處へ持つて行きやがるのだ。物

質的欲望の垢がとれぬと見えるわい。本當に困つたものだな。モシ先生、こんな

奴を言靈戰に参加させちや、却て味方の不利です。五三公だけは謹んで返上致し

ますから、何卒、塵紙にでも包んで明日の十二時まで、懐か袂へ入れてしまつて

おいて下さいくだ」

五三公いそこう「何を吐ぬかしやがるのだい。俺おれを蟲族扱むしけあつかひにしてるぢやないか。そんな事ことで善ぜん

言美詞げんびしの言靈ことたまを使つかふ神司かむつかさと云いへるかい。本當ほんたうに言靈ことたまの悪わるい奴やつだな」

敵てきの軍隊ぐんたいは峻坂しゅんぱんをエチエチと漸やつやく四五間しごけんまへ前まへまで登のぼつて來きた。ズツと谷底たにそこを見渡みわた

せば二三十丁にさんじつちやうばかりも騎馬隊きばたいが續つづいてゐる。萬公まんこうはツカツカと先鋒せんぼうに立たつた騎士きし

の前に進すすみより、大手おほてを擴ひろげて、

「バラモン教けうの軍人いくさびとども共ども、暫しばらく待まつた」

騎士きし「其方そのほうは吾々われわれの進軍しんぐんを妨さまたげ様やうと致いたすのか、怪けしからぬ奴やつだ。そこ除どけ、愚ぐ

圖々々づぐづ致いたすと、此槍このやりの切先きつさきがお見舞みまひ申まをすぞ」

萬公まんこう「アハ、々々ども吐ぬかしたりな吐ぬかしたりな、ヘナチヨコ士奴さむらひめ、俺おれを誰たれだと心得こころえてゐ

る。勿體もつたいなくも辱かたじけなくも、天地てんちの御先祖ごせんぞと現あらはれ給たまふ大國おほくに治立はるたちの尊のみことの御守護ごしゅご遊あそばす

三五教あななひけうの宣傳使せんでんしの見習生みならひせいだ、今日こんにち只今ただいま汝等なんぢらの一隊いったい河鹿峠かしかたうげを渡わたり齋苑いその館やかたへ攻め寄よ

せ來きたると聞きき、此處ここに待まち伏ぶせて居をつたのだ。サア此先このさき、一足ひとあしでも進すすめるものな

ら進すすんで見みたがよからうぞ」

と大手を擴げ眉を上げ下げし目をクリクリと回轉させ、芝居氣取になつて見えを切つた。

騎士「アハ、御供にも立たぬ蠅蟲奴等、其廣言は後に聞かう。サア之からは槍の錆だ、觀念致せ」

萬公「エー、愚圖々々吐すと言靈の發射だぞ」

騎士「アハ、怪體な奴が現はれたものだな」

先鋒隊の一人が立ち止まつたので、追々やつて來た騎馬隊は急坂に立止まり、立往生の態である。後の方から久米彦將軍は采配を打ち振り、「進め進め」と厳しき下知をやつて居る。殿には又もや一人の將軍、采配を打ち振り「進め進め」と叱咤してゐる。先に立つた騎士は萬公に遮られて進みも得ず、佛頂面を馬上に曝し、髮逆立てて唼鳴つてゐる。

騎士「コリヤ、小童子共、道を開け」

萬公「ハ、弱つたか。何程敵が澤山攻め寄せ來るとも此難所、一度に二人とかかる事は出來ようまい。一人々々蝨殺しにやつてやらうかい」

治國別はるくにわけ「コリヤコリヤ萬公まんこう、争あらそひを致いたせとは決けつして命令めいれいしない。何故なぜ善言美詞ぜんげんびしの
言靈ことたまを用もちひないのか」
萬公まんこう「言靈ことたまよりも私の腕うでが先陣せんぢんを勤つとめたがつて仕方しかたがありません。言靈軍隊ことたまぐんたいは
サツパリ休戦きゅうせんの喇叭ラツパを吹ふいたと見みえます。如何どうしても出でて來きませぬがな」
治國別はるくにわけ「そんなら晴公はるこう、お前代まへかはつて言靈ことたまを發射はつしゃせよ」
晴公はるこう「ハイ、確たしかに承知しょうち致いたしました。」

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし 治國別はるくにわけに從したがひて

ここに現あらはれ來きたりしは 御空みそらも清きよく晴はれ渡わたる

晴公はるこうさまの宣傳使せんでんし 吾言靈わがことたまを放はなちなば

一歩いっぽも此山このやま進すすめまい 早く馬うまより下くだり來きて

善言美詞ぜんげんびしの三五あななひの 世人よびとを救すくふ御教みをしへを

心こころを鎮しづめて聞きくがよい 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも 假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

星は天より落つるとも 悪の榮えし例ない

大黒主に従ひし 枉の軍の人々よ

一時も早く村肝の 心の駒を立直し

仁慈無限の大神の 清き教を聞くがよい

人は神の子神の宮 同じ天地に生れ来て

争ひ憎み戦ふは 皇大神の御神慮に

背反したる醜業ぞ 今打出す言靈を

心を据ゑてよつく聞け 大黒主は強くとも

手下は如何に多くとも 天地を造り給ひたる

神に對して刃向ふも 如何でか終を完うせむ

一時も早く目を覺ませ あゝ惟神々々

神に誓ひて晴公が 汝等一同に氣をつける

晴公が熱誠をこめて宣り上げた生言靈を耳にもかけず、馬に鞭撻ち一目散に坂

道を上り行かうとする。萬公は只一騎にても此峠を通過させてはならないと、雷の如き大音聲を張り上げ、

萬公（大聲で）「待て、曲者」

と呶鳴りつけた。先に立つた騎士は此聲に辟易し、馬は驚いて危険な谷道で荒れ狂ふ。先頭に立つた馬の足竝亂れたるを見て、次の馬も亦何に驚いてか荒れ狂ひ出した。一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂ふ譬へ、次から次へ傳染して、數百頭の馬はヒンヒンと嘶き乍ら飛び上り、何れの騎士も其制御にもちあぐんでゐた。

萬公「ハ、ハ、ハ、晴公の婉曲な生言靈よりも俺の一喝が餘程利いたと見えるわい。

一人でも萬公だから萬倍の力が備はつてゐると云ふ事を今實驗した。エへ、ハ、愉快だ愉快だ、何の馬も此の馬も一度に狂ひ出したぢやないか」

晴公「馬鹿云ふな、晴駒が狂うたのだ。晴公の言靈で駒が狂ふから春駒と云ふのだよ。「咲いた櫻に何故駒つなく、駒が勇めば花が散る」エへ、ハ、ハ、ハ、一番槍の

功名はやつぱり晴公だよ」

治國別はいと莊重な聲にて歌ひ初めたり。

誠まことの神かみが現あらはれて

河鹿峠かじかたうげの峻坂しゅんばんで

善神ぜんしん邪神じゃしんを立て別わかける

バラモン教けうの司等つかさたち

吾言わがこと靈たまを聞き召しめせ

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

天あめと地つちとの御水み火いきより

生うまれ出いでたるものぞかし

月つきは御空みそらに照てり渡わたり

日ひは晃くわう々と輝かがける

無事ぶじ太平たいへいの天國てんごくに

憎にくみ争あらそひあるべきぞ

一日ひとひも早はやく三五あななひの

仁慈じんじ無限むげんの御教みをしへに

眼まなこを覺さませ耳みみすませ

吾言わがこと靈たまを聞きし召めせ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

星ほしは空そらより落おつるとも

印度いんどの海うみはあすると

大黒主おほくろぬしの軍隊ぐんたいは

如何いかに勢いきほひ強つよくとも

皇大神すめおほかみの御道おんみちに

背そむきて事ことの成なるべきぞ

省かへりみ給たまへバラモンの

神かみの教をしへの司等つかさたち

其外そのほか百ももの軍人いくさびと

吾等は茲に謹みて

汝ら一同神の代に

安く楽しく救はむと

眞心こめて言靈の

光を現はし奉る

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直し聞直し

身の過を宣り直す

誠の神の御教を

諾ひませよ惟神

神に誓ひて龜彦が

治國別と現はれて

汝等一同に宣り傳ふ

あゝ惟神々々

御靈幸ひまませよ

と歌ひ終るや、先に立つた騎士は馬をヒラリと飛び下り、一目散に道なき山腹を
 駆け下る。一同の騎士は之に倣つて、何れも吾遅れじと馬を飛び下り一目散に引
 き返す、其可笑しさ。馬も是非なく妙な腰付し乍らコツリコツリと引き返し歸り
 行く。

萬公「アハ、何と脆いものだな。如何に鬼神だとしてこんな時に敵に出會したら堪つたものぢやないわ。何と神様はいい時に出會はして下さるものだ。之だからあまり急いで、遅れても、不可と云ふのだ。もしも登り坂で出會さうものなら斯う埒よく行かないが都合のいい地點だつた。アハ、有難い有難い治國別様、萬公の初陣は如何で亾いましたな。屹度金鷄勳章が頂戴出来るでせう」

治國別「ウン、遺憾乍ら改心させずに「ぼつ」返して了つた。然し乍ら此峠で喰ひとめた丈けが、まだしも吾々の職務が勤まつたと云ふものだ。先づ一服したら宜からう。逃げ行く敵に玉國別の一隊が祠のあたりで又もや言靈を發射してるだらう。敵になつても堪つたものぢやないわ」

五三公「何と先生の言靈はよく利きますなア。晴公の言靈が十五點なら先生のは萬點ですわ。いやもう恐れ入りました。オイ萬公、敵の勢に辟易して今迄の廣言に似ず絶句して一言も發射出来なかつたぢやないか。大方開いた口がすばまらなんだのか、すぼんだ口が早速に開かなんだのか、何と云ふ慘目な態だつた」

萬公「ナニ、俺のは荒木細工だ。荒木棟梁だ。晴公のは小細工棟梁だ。先づ此萬

公さまが、うまうまと荒削りをやつて置いたものだから、晴公の言靈も如何なり
斯うなり發射出來たのだよ。先生のは、こりや特別だ。さぞ今頃は敵の奴、狼狽
してゐることだらう。ヤア、月が俄に雲の衣を被り給うた。あの雲さへのけば敵
の敗亡を見下ろすに都合が好いだけだな。アハ、エへ、エへ、エへ、
治國別「サア、ボツボツと出掛ようか。玉國別さまと屹度衝突してるだらう。之
から後おつかけて、もう一戦しよう」
と立ち上り先に立つて下りゆく。谷間の彼方此方には敵の乗り捨てた馬が嘶いて
ゐる。萬公は得意になつて月下の道を下りつつ歌ひ初めた。

ウントコ ドツコイ ドツコイシヨ 河鹿峠はきつい坂

やうやう登りつめた時 月の光は皎々と

數十里にも亘りたる 原野を照らし給ひつつ

吾等一行守ります あゝ有難し有難し

治國別に從ひて 二人の弱蟲諸共に

坂さかの此方こなたに來きて見みれば

風かぜが持もて來くる鐘かねの音おと

こりや堪たまらぬと雀躍こをどりし

待まつ間程まほどなく登のぼり來くる

數百人すうひやくにんの騎士きしの隊たい

忽たちまち萬まんさま躍をどり出いで

疾風しつふう迅雷じんらい息いきつかず

大喝たいかつ一聲いつせい言靈ことたまを

ドンと一發いつぱつ打出うちだせば

先登せんとうに立たつた騎士きしの奴やつ

忽たちまち青あをい顔かほをして

地震ぢしんの孫まごか菟弱こんにやくの

幽靈いうれい見みたよにブルブルと

震ふるひ出だしたる可を笑かしさよ

ウントコドツコイ危あぶないよ

夜目よめにはしかと分わからねど

馬うまの足形あしがた澤山たくさんに

所狭ところせき迄までついでる

あゝ惟かむながら神々かむながら

一時いちじも早はやく此坂このさかを

トントントンと下くだりつき

祠ほこりの森もりに待まち給たまふ

玉國たまくに別のわけ宣傳せんでん使し

其他そのたの一行いつかうにおひついて

バラモン教けうの敵軍てきぐんを

片かたつ端はしから薙なぎ倒たふし

善言美詞ぜんげんびしの言靈ことたまを

雪ゆきか霰あられか夕立ゆふだちの

降り濺ぐ如浴びせかけ 誠一つの三五の

教を深く曉らしめ ウントコドツコイ曲り道

ウツカリすると滑るぞよ コリヤコリヤ五三公氣をつけよ

晴公も同じ事ぢやぞや 治國別の宣傳使

貴方も氣をつけなさいませ 何處かそこの木の蔭に

敵の片割潜伏し 不意に手槍を扱きつつ

突掛來るも圖られず あゝ惟神々々

神素盞鳴神様よ 何卒吾等が一行を

守らせ給ひて逸早く 曲津の軍を歸順させ

貴方の御側へ復言 申させ給へと萬公が

滿腔の熱誠捧げつつ 謹み敬ひ願ひます

朝日は照るとも曇るとも 月黒雲に隠るとも

此山道は如何しても 渡らにやならぬ吾々は

神の恵みを蒙りて 依さしの使命を果さぬと

何^どしても斯^こしても濟^すみませぬ　　ウントコ　ドッコイ　ドッコイシヨ
又^{また}もやそこに曲^{まが}り道^{みち}　　殊^{ことさら}更^{さら}きつい坂^{さか}がある
斯^こう云^いふ内^{うち}にも氣^きが急^せいて　　玉^{たま}國^{くに}別^{わけ}の身^みの上^{うへ}を
案^{あん}じ出^だされて仕^{しか}方^たない　　あゝ惟^{かむながらかむながら}神^{かみ}々々
御^み靈^{たま}幸^{さい}ひませよ
』

(大正一一・一一・二七　舊一〇・九　北村隆光録)

第一二章　雙^{さう}遇^{ぐう}（一一一六三）

晴^{はる}公^{こう}は夜^よ道^{みち}を下^{くだ}りながら、　　猿^{さる}の人^{ひと}眞^ま似^ね氣^き分^{ぶん}で歌^{うた}ひだした。

晝^{ひる}さへ嶮^{けん}岨^そな山^{やま}道^{みち}を　　ドンドンドンと下^{くだ}りゆく

こりや又何またなんとした事ことか ウントコドツコイ ヤットコシヨ

是これも矢張やつぱりお月つきさまの 吾等われらを照てらしたまふ爲ため

どうしても月日つきひは世よの中になかに なければドツコイをさまらぬ

月日つきひの駒こまは矢やの如ごとく 早暮はやくれかかる夜よるの道みち

ヒンヒンヒンと遠近をちこちに 馬うまの嘶いななき聞きこえ來くる

バラモン教けうの奴原やつばらが 乘のり捨すて置おいたお馬うまさま

聲こゑまで貧相ひんさうな奴やつぢやなア 貧ひんすりや鈍どんすと云いふ事ことは

俺おれも前まへから聞きいて居ゐる ヒンヒン吠ほえる瘦馬やせうまに

鈍どんな男をとこが乗のつて來きた 河鹿峠かじかたうげの峻坂しゅんぱんで

一泡ひとあわ吹ふいて逃にげかかる その爲體ていたらくを見みるにつけ

愛想あいさうが盡つきてウントコシヨ 早速さつそく口くちが塞ふさがらぬ

片彦かたひこ久米彦くめひこ將軍しやうぐんは 餘程よつほど弱よわいやつぢやなア

唯一ただいちにん人の晴はるさまの 生言靈いくことたまに怯おぢ恐おそれ

全體ぜんたい残のこらず總崩そうくづれ バラバラバラと坂道さかみちに

小石を打ちあけたその如く 味方を踏み越え乗り越えて

命からがら逃げ失せぬ よい腰脱けもあるものぢや

大黒主がウントコシヨ 何程軍勢持つとても

あれ程弱い代者を ウントコドツコイ ヤットコシヨ

連れて道中がなるものか 足手纏ひにドツコイシヨ

なる奴ばかり、エンヤラヤ 三千世界の穀潰し

お米が貴うなつたのも ガラクタ共が澤山に

ウヨウヨして居るその爲だ この調子ではどうしても

食料問題ドツコイシヨ 持ち上らねば治まらぬ

お蔭で月を隠したる 雲の衣がぬげたよだ

道が俄に白みえる 此足形は何だらう

瘦馬共の爪先に 堅く打ちたる蹄鐵の

半月形が澤山に あちらこちらに落ちて居る

あゝ面白や面白や 神の御稜威に照らされて

虎狼の咆えたける
噂に高き此山を

苦もなく進む吾々は
ウントコドツコイ天下第一

古今無雙の豪傑ぞ
治國別の宣傳使

嗚や得意でムいませう
私のやうなよい弟子を

よくマア探し當てたもの
何程世界を探しても

二人と決してありませぬ
オツトドツコイ ドツコイシヨ

知らず識らずに慢心の
鬼奴が角を振りたてて

つまらぬ事をドツコイシヨ
晴公の口から吐きよつた

あゝ惟神々々
尊き神のお守りに

稜威の宮居の此體
惡魔の襲ふ事もなく

いと「すく」すくと神の道
進ませ給へ天地の

尊き神の御前に
心も晴るる晴公が

畏み畏み願ぎまつる
あゝ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ
』

五三公は又歌ひ出したたり。

朝日は輝く月は盈つ 齋苑の館の神風に

吹かれて進む吾々は 治國別に從ひて

河鹿峠の頂上で 又もや風にドッコイシヨ

吹きまくられて行き悩む あゝ惟神々々

神は吾等をウントコシヨ 捨てさせたまはず直々と

さしも難所の坂道を 心平に安らかに

渡らせたまひし有難さ バラモン教の神司

片彦久米彦兩人は 數多の兵士を引率し

吾等一行のウントコシヨ 彼等を待つと知らずして

駒に鞭ちエイエイと 行き難みたる坂の道

登り来るぞをかしけれ 治國別の御許しを

受けて萬公が飛び出し 胸突坂に大手をば

ひろ 擴げて忽ち仁王立ち 似合ふか似あはぬか知らないが

ことたまきくわん 言靈機關が閉塞し 眼玉をキヨロキヨロ剥きだして

ぜつく 絶句したるぞをかしけれ ウントコドツコイ ドツコイシヨ

またまたつき 又々月に黒雲が すつかりかかつて來たやうだ

わがし 吾師の君よ皆さまよ 足許氣をつけ下りませ

ほら 祠の森も近づいた 懐谷を右手に見て

ましら 猿の聲を聞きながら 心いそいそ進み行く

われ 吾は天下の宣傳使 とは云ふもののドツコイシヨ

おほ 大きな聲では云はれない やつとの事で候補生の

まだ「ぬく」ぬくの俺達だ ウントコドツコイ ドツコイシヨ

またまたつき 又々月が現はれた 矢張俺等はドツコイシヨ

ドツコイドツコイ ヤットコシヨ 武運が強いに違ひない

いそこういそこう 五三公五三公と澤山に 萬公さまが仰有るが

いそこういそこう この五三公があればこそ 前代未聞の面白い

山路の旅が出来るのだ
アイタ、タツタ躓いた

あんまり喋べつて足許がお留守になつたと見えるわい

坂を下るに第一の注意を要する足の先

口が過ぎるとウントコシヨ
吾師の君にウントコシヨ

沈黙守れと叱られる
ほんとにきつい坂路だ

み空に月は輝きて
吾胸さへも晴れ渡り

吹き来る風も何のその
些も心にかからない

あゝ惟神々々
神の恵を今更に

謹み感謝し奉る
朝日は照るとも曇るとも

月黒雲に隠るとも
虎狼の咆ゆる野も

悪魔の征討の旅立ち
金輪奈落やめられぬ

こんな愉快の事あるか
あゝ面白し面白し

アイタタツタツタまた倒けた
ドテライお尻を臺なしに

ウンと云ふ程打ちました
こりやこりや晴公萬公よ

暫く待つて呉れぬかい 足が怪しくなつて来た

折角此處まで従いて来た 友を見捨ててスタスタと

進み往くとは何の事 友達甲斐のない男

そんな薄情な事すると 此世を去つて幽界へ

落ちた其時ドッコイシヨ かういふもののアイタタツタ

アイタタツタツタ痛いわいな 地獄の鬼奴がやつて来て

八萬地獄へ突落し きつと成敗するだらう

後生の爲を思ふなら 俺を助けて往くがよい

決して俺の爲ぢやない お前が來世にウントコシヨ

善因善果の喜びを 人にも分けずまる貰ひ

其種時ぎぢやドッコイシヨ 俺に同情して呉れよ

あゝ惟神々々 神の大地にありながら

仁義をしらぬ萬公や 晴公さまのすげなさよ

これこれモーシ宣傳使 二人を叱つて下しやんせ

神かみかけ念ねんじ奉たてまつる」

萬公まんこうは立たち止どまり、腰こしを屈かがめて下くだりゆく五三公いそこうを眺ながめ、

「チ工なん、何なんだい、肝腎要かんじんかなめの時ときに斃くたばりやがつて一いつ體たい其その腰付こしつきはどうしたのだい、まるで二重腰にぢゆうこしぢやないか」

五三公いそこう「さうだから、最前さいぜんから待まつて呉くれと云いつたぢやないか、どうやら腰こしの骨ほねが外はづれたやうだ。一寸ちよつと見みて呉くれないか」

萬公まんこう「馬鹿ばか云いへ、腰こしが外はづれたものが一足ひとあしだつて歩あるけるかい。大方おほかた大腿骨だいたいこつを岩角いはかどで打うつたのだらう。エ、厄介者やつかいものだなア。グヅグヅして居ゐると宣傳使様せんてんしさまに後おくれて仕舞しまふ。併しかし是これも乗のりかけた船ふねだ、サア癒なほしてやらう」

と云いひながら、平手ひらてで三みつ四よつ五三公いそこうの腰こしのあたりをピシヤピシヤと打うつた。

五三公いそこう「アイタタツタ、これで息いきが樂らくになつた。ヤア有難ありがたう、持もつべきものは矢やつ張親友はりしんいうだ」

萬公まんこう「サア早はやう往ゆかう。とうとう先生せんせいの影かげが見みえなくなつて了しまつた。いそげい

そげ」

五三公は、「よし来た。驅歩々々」と云ひ乍ら萬公の後について嶮しき坂路を下り行く。

話は元へ戻る。玉國別、道公、純公の三人は、伊太公の行方不明となつたのを打ち案じ乍ら、今や治國別の言靈に打たれて歸り來るべき敵を、言向和さむと、手具脛ひいて待つて居た。

純公「随分道公も妙な夢を見たものだなア。矢張常平生から、仕様もない事を考へて居るから、獏も食はないやうな、怪つ體な夢を見よつたのだ。本當に是を思へばお前の身魂は開闢以來の【デレ】さまと見えるのう、ウフ、々、々」

道公「俺達の夢は先づザツトあのやうな華々しいものだ。お前達の見る夢は、鬼婆に追ひかけられたり、逃げ損なつて糞壺に落ち込んだ位なものだ。夢だつて餘り馬鹿にならぬぞ。夢の浮世だから、何時かはそれが現實になるのだ。前途多望の良青年だからなア」

純公「良青年がそんな厭らしい夢を見るものか、ジャラジャラとした……先生様の前だぞ、不謹慎にも程があるわ。ナア先生、本當に可笑しいやつですね。あまりの事で臍が轉宅しかけましたよ」

玉國別は目を押へながら、いとも冷然として「ウフ、と靜かに笑つて居る。この時坂の彼方より騒々しき物音が聞えて來た。見るまに鞍をおいた荒馬七八頭速力を出して祠の前を逃げて往く。

道公「ヤア面白い面白い、いよいよ出會したな。落花狼藉、馬迄が驚いて敗走と見えるわい。聽て落武者共がやつて來るだらう、サアこれから一つ捻鉢巻だ。生言靈の連發銃だ、オイ純公、確り頼むぞ」

と捻鉢巻きをしながらお相撲さまのやうにトントンと四股踏んで雄猛びして居る。かかる所へ死物狂となつた數十人の敵は祠の森にて殘黨を集めむとやつて來た。

玉國別一行の姿を見て片彦は聲を怒らせ、片彦「ヤア其方は三五教の宣傳使、いい所で出會つた。貴様の家來を生擒に致して、連れて歸つたのも知らず、【のめ】のめとよう出て來やがつた。サア貴様も

三五教の片割れ、江戸の仇を長崎かも知らぬが腹いせにやつてやらう。オイ者共、此奴等に槍の切つ先を揃へて取り掛れ」

と厳しく號令して居る。數人の敵は三人を目蒐けて猛虎の勢凄じく突いて掛る。

三人は不意を喰つて手早く身をかはし祠を楯にとつて防ぎ戦はむとする。されども大將の玉國別は目を痛め、激烈なる頭痛に悩んで居る。如何に勇ありとて無茶

で出て来る敵には無茶で行かねばならず、敵は目に餘る大軍、あはや三人の命は

風前の燈火と云ふ危機一髪の際俄に聞ゆる獅子の唸り聲山嶽も崩るる許りであつ

た。此聲に敵は顛ひ戦き思はず知らず大地に耳を押つけて踞んで了つた。見れば

巨大なる獅子に時置師神が跨つて居る。玉國別はこれを見て思はず知らず兩手を

合せ、

「このはなさくやひめのみことさま、有り難うムいます」

と感謝の涙に咽ぶ。獅子に乗つた時置師神は【もの】も云はず嶮しき山を駆け登

り何處ともなく姿を隠した。

坂道の彼方より盛に宣傳歌が聞えて來た。一旦大地に踞んだ敵はムクムクと起

り

き上り、先を争ひバラバラと人馬諸共、下り坂目蒐けて一人も残らず逃げて往く。道公「ハ、ハ、ハ、御神力と云ふものは偉いものだなア、三五教には立派な生神様が御守護していらつしやるから【うま】いものだ。モシ先生様、結構ぢやムいませぬか、虎口を逃れるとは此事でムいませう」

玉國別「ウン、實に有難い事ぢや。併し今聞える宣傳歌の聲は正しく治國別様ぢや、お出迎へするがよからうぞ」

道公「ナニ、治國別さまですか、ヤそいつは有難い、よい所へ来て下さつた。如何にも先生の仰有つた通り一分一厘間違ひはムいませぬえ。いやもう感心致しました。オイ純公何をキヨロキヨロして居るのだ、早くお迎への用意をせぬかい。

工、辛氣臭い奴ぢや」

純公「餘り有難いのと嬉しいのとで、どうしてよいか分りやしないわ。こりや道公夢ぢやあるまいかな。今お前は夢の話をして居つたであらう、俺は如何しても本當と思へないわ。モシモシ先生様、現實ですか」

「ウン、確に現實だ。早く一足なりとお迎へに往かねば濟むまいぞ」

純公すみこう「ヤア本當ほんたうとあればキヨロキヨロしては居をられない、オイ道公みちこうサア往ゆかう。
それそれそこにどうやら黒くろい姿すがたが見みえて來きた。あゝ惟かむながらたま神靈ちへませ幸倍坐世ちへませ、あゝ惟かむながらたま神靈ちへませ」

(大正一一・一一・二七 舊一〇・九 加藤明子録)

第四篇 愛縁義情あいえんぎじやう

第一三章 軍談ぐんだん (一一一六四)

數十年すうじふねんの雨風あめかぜに弄もてあそばれて、屋根やねは飛散とびちり柱はしらは歪ゆがみ、見みるかげもなき古祠ふるほこの前まへに、
薄雲はくうんを被かぶつてボンヤリ輪廓りんくわくを不明瞭ふめいれうに現あらはした月の光つきひかりを浴あび乍ながら、話はなしに耽ふける七人しちにん

の男をとこがあつた。これは勿論もちろん治國別はるくにわけ、玉國別たまくにわけの一行いっかうである。

玉國別たまくにわけ「治國別はるくにわけさま、昨日さくじつ來の大風おほかせには随分ずぶんお艱なやみでしたらうなア。それに又またバラモン教けうの軍勢ぐんぜいがやつて來たので、一段いちだんと御骨おほねの折をれたことでせう」

治國別はるくにわけ「河鹿峠かしかたうげを此方こちらへ下る折をりしも片彦かたひこ、久米彦くめひこの軍勢ぐんぜいと出會でつくはし、兔とも角かくも屈くつきやう竟きやうの難所なんしょに陣ぢんを構かまへ、徐おもむろに言靈ことたまを打出うちだした所ところ、昨日さくじつの暴風ばうふうに木々きぎの木この葉はが散ちる如ごと

く、隊伍たいごを亂みだし、這々はふばふの體ていで逃にげ散ちつて了しまりましたよ。貴方あなたは此森このもり蔭かげに於おいて、キツと敵てきの潰走くわいそうを待受まちうけ、言靈ことたまを打出うちだしなさるだらう、兩方りやうほうより言靈ことたまの挟はさみ打うちも面おも

白しろからうと考かんがへて居をりました。そしてさぞ祠ほこりの森もりの前まへには澤山たくさんな歸順きじゆん者しやが居をるだらうと、イヤもう樂たのしんで參まゐりました。敵てきは此谷このたに道みちを通とほらなかつたですか」

玉國別たまくにわけ「ヤアもう殘念ざんねんなことを致いたしました。神様かみさまに神罰しんばつを蒙かうむり、大怪我おほけがを致いたし、心氣しんき沮喪そさうしたと見みえ、雪崩なだれの如ごとく逃にげくる敵てきを無念むねん乍ながらも、皆取逃みなとりがして了しまひました」

治國別はるくにわけ「それは何なんとも仕方しかたがありません。何事なにごとも神界しんがいの御都合ごつがふでせう。併しかし乍なが

大怪我おほけがをなさつたとは……」

玉國別「ハイ猿の奴に兩眼をかき【むし】られ、一旦は失明致しましたが、有難き御神徳によつて漸く片目を救はれ、此森蔭に休息して頭痛や目の痛みの癒るのを待つて居りました」

治國別「それは誠に氣の毒千萬、月夜とはいへ、餘りボンヤリとしてゐて、お顔が見えませなんだが、ドレ一寸見せて下さい」
と云ひ乍ら、玉國別の顔を覗き込んだ。

「ヤア大變だ。目のまはりがただだれて居ります。餘程きつく搔いたものと見えま
すなア」

玉國別「吾々が心の油斷より自ら災を招いたので。實に宣傳使として顔があり
ませぬ」

治國別「ここでは何だかきまりが悪いやうですが、どこぞ良い場所でゆつくり話
さうぢやありませんか」

玉國別「一町許り此森を登つて行きますと、恰好な休息所があります。實の所
は今宵も其森蔭で養生がてら、敵軍の進むのを眺めて居りました」

はるくにわけ 治國別 〇 そんなら、其森蔭の休息所までお供を致しませう」

たまくにわけ 玉國別 〇 何れ又敵の殘黨が通過するやら、再び蒸し返しに来るやら分りませぬか

ら、此處に二人程見張をさしておいて参りませうかなア」

はるくにわけ 治國別 〇 オイ五三公、お前御苦勞だが、此祠の前で暫く關所守をやつてくれない

か」

いそこつ 五三公 〇 ハイ承知致しました。玉國別さまの部下の方を一人拜借したいものです

なア。なることならば私と能く馬の合ふ伊太公と關守を勤めませう」

たまくにわけ 玉國別 〇 殘念ながら伊太公は貴方にお渡しする譯には参りませぬ」

いそこつ 五三公 〇 誰だつて同じことぢやありませんか。私の先生も斯うして一人留守番を

お命じになつたのだから、貴方だつて、伊太公の一人位ここにお残しになつても

よ 宜かりさうなものですなア」

みちこつ 道公 〇 實の所は伊太公の奴、敵の捕虜となつて了つたのだ。これから吾々兩人は

いたこつ 伊太公を取返しに敵中へ飛込まふと思つてゐるのだが、何分先生が目痛め、頭

を痛めてゐるものだから行くことも出来ず、氣が氣でないのだ」

五三公「ヤアさうか、そりや大變だ。俺も先生の許しさへあれば伊太公の所在を

尋ねに行きたいものだなア」

治國別「ヤア、玉國別さま、伊太公が敵の捕虜になつたのですか」

玉國別「残念ながら……」

治國別「ヤアそりや困つたことが出来たものだ。マアマアゆつくりと森蔭で御相談を致しませう。そんなら五三公、御苦勞だが、お前一人ここに關守をやつてゐてくれ」

五三公「ハイやらぬことはありませぬが、何だか私一人捨てられた様な氣分になりますワ。どうぞ晴公なりと残して下さいなア」

玉國別「イヤ宜しい、純公を此處に残して置ませう。オイ純公、お前御苦勞なれど、五三公さまと臨時關守を頼む」

純公「承知致しました。どうしても私は雑兵だとみえて、將校會議に參列は許されないのですなア、敵を遠くに追ひちらし、稍小康を得たる此場合、仕方ありませんから、私は五三公さまと又別働隊を造つて、將校會議を開設致しませう。」

サア、りやうせんせい初め道公、はるこう晴公、まんこう萬公、ゆつくりと休んでおいでなさいませ」

玉國別たまくにわけ「しつか確り頼む。たの變つたことがあれば手を拍つて合圖をしてくれ」

純公すみこう「ばんじのみこ萬事呑込んで居ります」

玉國別たまくにわけ「よろそんなら宜しう頼む」

と玉國別は先に立つて、いぜん以前の森蔭に登つて行く。

りやうせんせい及び三人は木の葉の堆く積んだ上に蓑を敷き、ことたません言靈戰の状況や、ふところだに懷谷の遭難の顛末などを包まず隠さず互に打明けて談じ合つてゐる。

此方こちらは古祠の前、すみこう純公、いそこう五三公は近い西山に隠れた月を見送り乍ら、

純公すみこう「つきさまヤア月様もとうとうアリヨースとお歸り遊ばした。どうも俄に山影が襲う

て來たと云ふものか、あんこくかい暗黒界になつたぢやないか」

五三公いそこう「つきどうせお月さまだつて、おなじとこ同じとこに止まつていらつしやる道理がない。

やがて又夜計りぢやない、よあ夜明けも近付いたのだから、しばり暫くグツとここで横はり、

バラモン征伐の夢でも見ようぢやないか」

純公すみこう「まへお前寢たけら寢てくれ、せきもり關守がそんなことぢや勤まらないから、あれ俺は此處

に目をあけて職務忠實に勤めてゐる。ヤア言靈戦で随分お前も疲勞れただらう、無理もない俺の蓑も貸してやるから、サア寝たり寝たり

五三公「お前の寝られないのは、モ一つ原因があるのだらう。伊太公の行方が氣にかかつてゐるのだらうがなア」

純公「それが第一の心配だ。一秒間だつて彼奴の事を忘れやうたつて、忘れられるものか。俺は斯うして安閑とここに關守を勤めてゐるものの、伊太公はエライ責苦に會はされてゐるかと思へば、如何して眠ることが出来ようぞ」

五三公「アハ、それ程苦になるか。人の一人位如何なつてもいいぢやないか、貴様さへ安全にあつたら何よりも大慶だらう。たつた今迄ピチピチして居つた人間が死といふ魔風に吹かれて、ウンと一聲冥土へ旅立ちする奴もあるのだ。何程貴様がハートに波を立ててもがいた所で如何する事も出来ぬぢやないか。そんな人の疝氣を頭痛に病むやうな馬鹿な事は思はぬが良いぞ。終ひにや貴様の體まで毀して了ふぢやないか」

純公「貴様は餘程良い冷血漢だなア。何程吾身が大事だといつて、友の危難を平

氣で見遁すことが出来ようかい。それが朋友の義務だ。否義務どころか情ぢやな

いか

五三公「さう心配するな。伊太公は決して勦殺になつたり、虐待されたりするやうな男ぢやない。彼奴は「じゅん」才な男だから、そこは甘く合槌を打ち、敵でさへも可愛がるやうな交際振を發揮してゐるよ。キツと敵に同情を受けてゐるに定つて居るワ」

純公「さうだらうかなア、それが本當ならば、俺もチツと許り安心だ」

五三公「伊太公はまた如何して捕虜になりよつたのだ。其顛末をチツと聞かして呉れないか」

純公「ウーン、俺達が先生とあの森蔭で休息してゐると、バラモン教の軍勢が此祠の前で休息し人員點呼までやつてゐやがるぢやないか。そして素盞鳴大神様を征伐すると云つて、ヒドイ進軍歌を歌つてゐやがるのだ。それを聞いて吾々三五の信者が如何して堪へて居ることが出来ようか。……不意に飛んで出て、一人も残らず打懲してやらうと思つたが、何分先生の目が悪いものだから、一息も離

れる譯に行かず、切齒扼腕悲憤の涙を流してゐると伊太公の奴堪りかねて、金剛杖を縦横無盡に打振り、命を的に敵中へ只一人飛び込んだきり、歸つて來ないのだ。實に残念なことをしたワイ。先生様のお止めなさるのも聞かずに行つたものだから、神様の罰で敵に捕はれよつたのだ。ア、思へば思へば又悲しくなつて來たワイ

五三公「何とした向意氣の強い男だらうなア、後前も考へず、匹夫の勇を揮ふと、そんな目に會はねばならぬ。何事も先生の命令さへ、神妙に聞いて居れば良いのだのになア」

純公「久方の空に消えたる月みれば

友の身の上慕はる哉。

吾友は今やいづくの何人に

救はれぬるか心許なし

五三公いそこう 惟神尊かむながらたふと 神かみ に仕つか へたる

神かみ の子こ ならば安やす くいまさむ〇

純公すみこう 「アア、餘あま りの心配しんばい で、歌うた を詠よ んでみようと思おも うたが、歌うた もハツキリ出で ては来こ ないワ。先生せんせい はあの通とほ り目め をわづらひ、頭あたま を痛いた め、伊太公いたこう は行方ゆくへ 不明ふめい となり、何なん とした俺達おれたち の一いっ 行かう は、運うん の悪わる いものだらう、神様かみさま に見離みはな されたのぢやあるまいかなア〇

五三公いそこう 「そんな事こと は吾々われわれ にや分わか らないワイ。善ぜん 悪あく 正せい 邪じゃ を区別くべつ するのは神かみ ばかりだ。それだから神かみ が表おもて に現あら はれて、善ぜん と悪あく とを立別たてわ けると、基本歌きほんか に出で て居ゐ るのだ。

兔と 角かく も伊太公いたこう の爲ため に、何神なにがみ の祠ほこら が知らぬが、ここで祈いの ることにしようかい〇

純公すみこう 「ヤアそりや有難ありがた い、伊太公いたこう の爲ため に祈いの つてやらうと云い ふのか〇

と涙聲なみだこゑ を出だ し乍なが ら、手て を合あ せて暗祈あんき 黙もく 禱たう をなすこと稍暫やしば し、漸やうや くにして 夜よ はカラリと明あ けた。

慌あわ てて谷間たにま に落お ちた二三頭にさんとう の馬うま、主人しゅじん の所在あrika を索もと めてノソリノソリと急坂きふはん を下くだ

つて来た。

純公「ヤア敵の馬が逃げそくれたと見えて、今頃にやつて来よつた。ヤア此奴ア、何奴も此奴も足を痛めてゐる鹽梅だ。畜生といひ乍ら可哀相だなア。一つ神様に願つて馬の脚を直してやらうかなア」

五三公「俄に獸醫でも開業する積りかなア、免状を持つてゐるか。今の時節は何程技能があつても免状がなければ駄目だぞ。どんな筍醫者でも、開業試験といふ關門を何うなり斯うなり通過さへしておけば、立派なドクトルだ。何を云つても規則づくめの杓子定規の行方だからなア」

純公「ア、馬の奴……皆さまお早うとも何とも吐さずに、俺達の好意を無にして通過して了ひやがった、ヤツパリ畜生は畜生だなア」

五三公「純公、馬も助けてやるのは良いが、馬よりも大切な者があるだろ」
純公「いかに、馬も助けねばなるまいが、第一先生の御病氣を癒す様に鎮魂をせなくてはならなかつたなア。併し俺は畜生の鎮魂位が性に合つてゐるのだ。到底

底先生の御病氣を鎮魂で癒すといふやうなこたア出来やしないワ」

五三公いそこう「誠心まごころさへ天てんに通つうじたら、先生せんせいの病氣びやうきだつてキツと癒なほるよ」

純公すみこう「さう聞きけばさうかも知しれぬなア、何なんだか知しらぬが、氣きが落おちつかないワイ。

斯かう夜よがカラツと明あけては、此この坂路さかみちは稍やや安心あんしんだが、併しかし乍ながら昨夜さくや逃にげ去さつた敵てきの

集團しふだんが、此この谷路たにみちに吾われ々の前途ぜんとを閉塞へいそくして、一ひとり人も殘のこらず、虜とりこにせむと、待構まちかまへて

ゐるやうな氣きがしてならないワ」

五三公いそこう「そりやキツトさうだらうよ。面白おもしろいぢやないか、エ、ー。これからが吾われ々

の眞劍しんけんの舞臺ぶたいとなるのだ、そんな弱々よわよわしたこと言いはずにチツと確しつりせぬかい」

斯かく話はなす時ときしも、馬うまから轉落てんらくし、足あしを傷きずつけた逃にげ遅おくれのバラモン教けうの男をとこ、槍やり

を杖つゑにつき、二人連ふたりづれでヒヨクリ ヒヨクリと跋びっこをひき乍ながら、此處ここへ現あらはれて來きた。

此この二人ふたりは片彦將軍かたひこしやうぐんの祕書役ひしよやくともいふべき、マツ、タツの兩人りやうにんであつた。二人ふたりは純

公こう、五三公いそこうの祠ほらの前に狛犬こまいぬ然ぜんと坐すわつてゐるのに氣きが着つき、馴なれ々なれしく、

マツ公こう「ヤア三五教あななひけうの大先生だいせんせい、お早はやうさまでムいます。夜前やぜんは大變御苦勞たいへんごくらうでムい

ましたなア。随分御疲勞ずぶんおきたびれになつたでせう。私わたしも大變お疲勞たいへんおきたびれになりました。これ御

覽らんなさいませ、一方いっぽうのコンパスがチツと許ばかり破損致はそんいたしまして、此手槍このてやりをコンパス

代用に、無理槍にここ迄下つて来た所です、此處でゆつくりと休んで行かうと思つて楽しんで参りました。良い所でお目にかかりました。世の中は相身互だから、あなたも赤十字班の衛生隊と思召して吾々兩人の看護をして下さいな。見れば貴方のお召物には丸に十がついてゐる。キツと白十字社の救護班と思ひますが、違ひますかな」

五三公「アハ、ハ、ハ、此奴ア面白い吾黨の士だ。オイ、コンパスの破損先生、ドクトルが一つ診察をしてやらう」

マツ公「イヤ其奴ア有難い、何分宜しう頼みます。敵と云ひ味方といふのも、人間が勝手につけた名稱で、ヤツパリ神様の目から見れば皆兄弟だからなア」

純公「ヤアま一人負傷者があるぢやないか」

マツ公「ハイこれはタツと言ひまして、片彦將軍の祕書役ですよ。私も一寸新米ではあるが、夏でもないのに、【ヒシヨ】（避暑）をやつて居ります。アハ、ハ、ハ、ハ、まだまだ七八人の負傷者が谷底に呻吟してゐますから、一つ擔架隊でも出して、此處まで持ち運び、此祠を臨時野戦病院として、治療を與へてやつて

貰もらひたいものですなア。三五あななひけう教てきは敵たすでも助たすけるといふ教をしへだと聞きいたから、此このマツ公こうもスツカリと氣きを許ゆるし、親おやの側そばへ歸かへつて來きたやうな氣き分ぶんになりました〃

何なに程ほど憎にくい敵てきでも惡あく人にんでも、向むかふの方ほうから打うち解とけ、開あけつ放はなしでやつて來こられると人にん間げんといふものは妙めうなもので、何なんとなく鼻ひ肩いがつき、吾わが身みを忘わすれて助たすけてやりたくなるものである。バラモン教けうのマツ公こう、タツ公こうは流さすが石がに片かた彦ひこ將しやう軍ぐんの秘ひ書しよを勤つとむる丈だけあつて、先さきんずれば人ひとを制せいするといふ筆ひつ法ぽうを能よく吞のみ込んでゐた。其その實じつは酢すでも蒟こん蒟やくでもいかぬ【しれ】者ものなのだ。五い三そ公こう、純すみ公こうもそんなことを知しらぬ様やうな馬ば鹿かではないが、敵てきの方ほうから斯こう出でられると、知しらず識しらずの間あひだに受う太た刀ちにならざるを得えないのであつた。

五い三そ公こう 〇 三五あななひけう教てき獨どく特とくの鎮ちん魂こんの妙めう術じゆつを施ほどこしてやるから、先まづそこで横よこになつて見みよマツ公こう 〇 イヤ有あり難がたう、三五あななひけう教てきの信しん者じやはさうなくてはならぬ。如い何かにも良いい教をしへだなア。博はく愛あい主しゆ義ぎだ。あゝ敵てき乍なら靈たま幸ち倍は坐ま世せ、カタク乍なら靈たま幸ち倍は坐ま世せ 〇 遺ゐ憾かん乍なら靈たま幸ち倍は坐ま世せ。イヤイヤ乍なら靈たま幸ち倍は坐ま世せ 〇 アハ、ゝ、此こ奴いつア面おも白しろい奴やつだ。遺ゐ憾かん乍なら靈たま幸ち倍は坐ま世せ。イヤイヤ乍なら靈たま幸ち倍は坐ま世せ 〇 仕しかたがない靈たま幸ち倍は坐ま世せ 〃

マツ公「アハ、、アイタ、、、餘り笑ふと、骨に響いて痛くて仕方がないワ。オイ、タツ公、貴様も一つ治療を受けないか、何程大治療を受けても藥禮も要らず、入院料も要らぬのだから、嬢の湯巻まで六一銀行へ無期徒刑にやる必要もなし、極めて安全なものだぞ」

タツ公「俺の傷は餘程深いのだから、さう直に治らうかなア」

五三公「さう心配をするな。俺の技術を信用してくれ。白十字病院長、死學博士

だ、千人の患者を扱ったら、九百九十九人までは皆靈壇へ直し、墓場へ送るのだ

から、死學博士といふのだよ、随分偉い者だらう。そして天國へ復活さしてやる

のだ。生かさうと殺さうと自由自在、耆婆扁鵲も跣足で逃げるといふ大博士だから

らなア。ウツフ、、、」

マツ公「いい加減に洒落をやめて、早く俺の苦痛を助けて呉れないか。白十字病

院の金看板を掲げ乍ら俺の苦痛を外にみて、仁術者の身分としてクツクツと笑ふ

奴があるかい、エーン、餘程此醫者は筍と見えるなア」

純公「副院長の俺がタツ公の治療をするから、五三公さま否院長さま、貴方はマ

ツ公こうを受持うけもつて、完全無缺くわんぜんむけつなコンパスにしてやつて下さい。どちらが早くはや癒なほるか
一つ競走きやうそうをやつて見みませうかなア。有名いうめいな死學博士しがくはくし計ばかりがよつて居ゐるのだからな
ア、アハ、ハ、ハ、

マツ、タツ一度いちどに「ウツフ、ハ、ハ、アイト、ハ、ハ、アハ、ハ、ハ、アイト、ハ、ハ、」
マツ公こう「コリヤ餘あまり笑わらはして呉くれない」

純公すみこう「笑わらふのは病氣びやつきの藥くすりだ。笑わらふ門かどには恢復くわいふく來きたるといつてな、俺おれは笑わらはすのが得とく
意いだ。それが醫術いじゆつの奥おくの手てだよ。イヒ、ハ、ハ、ハ、」

マツ公こう「モシモシ院長めんちやうさま、どうぞ早はやう治療ちれうにかかつて下くださいな」

五三公いそこう「貴様きさまの内うちには家いへもあるだろ。田地でんぢも倉くらも林はやしもあるだらうなア」

マツ公こう「俺おれだつて片彦かたひこ將軍しやうぐんの祕書ひしよやく役やくを勤つとめる位くらゐだから、相當さうたうの地位ちゐも名望めいぼうも財産ざいさん

も持もつてゐるわい」

五三公いそこう「ウンさうか、其奴そいつア掘出ほりだし者ものだ。早速さつそく癒なほすと俺おれの商賣しやうばいが干上ひあがつて了しまうワ

イ。コーツと、いつやらの話はなしだ……或所あるところに醫者いしやがあつた、大變たいへんようはやる醫者いしやで、

山井養仙やまゐやうせんさまといつて名高なだかいものだつた、其奴そいつに一人ひとりの山井養洲やまゐやうしうといふ弟子でしがあ

つた。そこへ土地の富豪が病氣に罹り養仙の薬を服用してゐた。少し快くなると
又悪くなる、又快くなる又悪くなる。三年許りもブラブラして、養仙の薬を神の
やうに思つて服薬してゐた。或時養仙が二三日急用が出来て、他行した不在の間
に、書生の養洲奴其男を留守師團長氣分で診察し、薬をもり與へた所、三日目に
スツカリ全快してお禮にやつて來よつた。四五日たつと、養仙先生が歸宅したの
で、書生の養洲奴、したり顔で……先生あの松兵衛を、貴方の不在中私が診察し
て薬をもりましたら、三日目にスツカリ全快し、最早薬に親しむ必要がないから、
お禮に來ましたと云つて、薬價を勘定し、チツと許り菓子料を置いて歸りました。
これが菓子料で△いますと差出し、褒められるかと思ひの外養仙は目に角を立て
……大馬鹿者ツ、貴様は醫者の資格はない……と呶鳴りつけた。そこで養洲が
【むき】になり……醫者は仁術といつて、人の病氣を助けるのが商賣ぢやありま
せぬか、何故お叱り遊ばすか……といへば、養仙は一寸ダラ助をねぶつたやうな
顔して……貴様は馬鹿だなア。松兵衛の内にはまだ倉もある、家も山林田畑も殘
つて居るぢやないか、エーン、さう早く癒して何うなるか、彼奴の財産が全部俺

の懐へ這入るまでは癒されぬのだ、バカツ……と言つたさうだ、實に偉い醫者だ。其心得がなくては、如何しても院長にはなれないワ。さうだから俺も其養仙さまに做つて、貴様の負傷を如何ともヨウセンのだ、アハ、ハ、ハ、イヒ、ハ、ハ、ハ、

マツ公「エへ、ハ、ハ、イ、イタイ、イタイ、イタイ、ウツフ、ハ、アイ

タ、ハ、ハ、ハ、

タツ公「エへ、ハ、ハ、アイタ、ハ、ハ、ハ、

純公「それ丈笑つたら、やがて本復するだらう。マア安心したがいいワ」

タツ公「オイ藪醫先生、何時になつたら癒るだらうかなア」

純公「マアマア一寸豫後不良だから、計算がつかぬワイ。すべて病には……エへ

ン……二大別がある。一を先天性疾病といひ、一を後天性疾病と云ふ。而して豫

後良あり不良あり、良不良を決し難きものありだ。治すべき病と、治すべからざ

る病と、治不治を決し難き病と、自然に放擲して置いて癒る病と四種類ある。そ

れから内科外科産科と分れてゐる。又婦人科小兒科といふのも此頃はふえて來た。

そして藥には内服用外用と大別され、頓服劑も必要があり、食鹽注射にモルヒネ

注射、此頃は六〇六注射迄開けて來たのだ、エーン。随分醫者になるのも學資が要るよ。(狂歌)千人を殺して醫者になる奴は、己一人の口すぎもならず……といふのだから、俺だつて今まで九百九十九人まで殺してきたのだ。モ一人殺せば一人前の醫者になるのだ。それだから丁度貴様を一人靈前に直す、有體にいへば殺すのだ。そこで始めて此純公も一人前のドクトルになるのだからなア。何とよい研究材料が出來たものだ。アハ、ハ、ハ、ハ、

マツ公「アハ、ハ、ハ、何時の間にか俺の足痛は尻に帆かけて遁走したと見えるワイ。オイ、タツ公貴様もいい加減に癒つたら如何だ。イヒ、ハ、ハ、ハ、

五三公「コリヤなまくらな、足痛の眞似をしてゐたのだな。仕方ない奴だ」

マツ公「さうだから、痛いかな痛くないか診察してくれと云つたぢやないか。實の所は負傷者だといつて、お前達の同情を買ひ、ここを無事に通過する積りだつたが、餘り貴様の言分が氣にいつたから、何もかも白状するワ。實は全軍の逃走した後始末をつけて歸つて來たのだ。足はかうして繃帯で巻いてゐるが、チツとも怪我してゐないのだよ、のうタツ公、アハ、ハ、ハ、ハ、

五三公「アハ、こいつア誤診だつた」

マツ公「誤診か御親切か知らぬが、打診もないやうだつたね」

五三公「随分聴診にのつて大變な失敗をした。サア之から貴様も望診々々で行つ

たらどうだ。問診も道で片彦に會うたら、死學博士が宜しう言つて居たと言つて

呉れ、アーン」

マツ公「オイオイ院長さま、なぜ鼻の下をさう撫でてゐるのだ。妙な恰好ぢやな

いか」

五三公「ウン之かい。髭はないけれど、氣分だけは八の字髭を揉んでゐる積りだ。

アハ、」

純公「オイ、モウ病院遊びはやめにしようかい。そしてゆつくりと軍話でもした

らどうだ。随分面白いだらうよ」

マツ公「敗軍の將、兵を語る……かな。葬禮すんで醫者話と同じ事だが、これも

成行だ。ここで一つ物語をやつてみよう。随分潔いぞ、エツへ、」

五三公「何と氣樂な奴が揃うたものだなア。丁度祠の前で四人打揃ひ、軍談を始

めるのも面白からう。ア、愉快だ愉快だ

マツ公は講談師氣取になつて長方形の岩の前に坐り、鐵扇にて岩をビシヤビシヤ叩き乍ら唸り出した。

ハルナの都に名も高き、梵天帝釋自在天、大黒主といふ智勇兼備の勇將あり。それに従ふ英雄豪傑、綺羅星の如く立ち並び、中にもわけて大黒主の三羽鳥と聞えたる鬼春別將軍、大足別將軍、マツ公將軍こそは英雄中の英雄なり。此度齋苑の館に天地に輝く神徳高き、酒の爛素盞鳴尊、數多の軍勢を引つれ、アブナイ教を組織して、大黒主の守らせ給ふ、天に輝く月の國、五天竺をば蹂躪し勢益々猖獗を極め天下は騒然として麻の如くに亂れ、人民塗炭の苦に陥りぬ。然る所へ、又もやデカタン高原の北方なるカルマタ國に、盤古神王鹽長彦を奉じて現はれ出でたる、ウラル教の常暗彦が軍勢、雲霞の如く、地教山を背景とし、集まりある。今や天下は三分せむとするの勢なれば、何條以て大黒主の許し給ふべき、三羽鳥を征夷大將軍に任じ、大足別はカルマタ國へ、鬼春別は齋苑館へ、テンデに部署を定め、進軍の眞最中なり。秋は漸く深くして木々の梢はバラバラバラ、散

りゆく無残の光景を心にもとめず、數多の軍勢率つれて、先鋒隊には片彦久米彦
兩將軍、あとから出て來る一部隊は、ランチ將軍、數千騎を率ゐ、最後の本隊は
鬼春別將軍、全軍を指揮し、秋風に三つ葉葵の旗を林の如く翻し乍ら旗鼓堂々と
攻め來る其物々しさ鬼神も驚く許り也。先陣に仕へし片彦將軍は今や河鹿峠の絶
頂に、全軍を指揮し轡を竝べ、蹄の音カツカツ、鈴の音シヤンコ シヤンコ
と、威風堂々あたりを拂ひ天地を壓して登り行く。百千萬の阿修羅王が進軍も斯
くやと思はれにける。然る所に豈計らむや、思ひがけなや、アタ恐や、三五教の
宣傳使治國別、萬公、晴公、五三公の木端武者を引つれ、一卒之を守れば萬卒進
む能はざる嶮路を扼し、神變不思議の言靈を速射砲の如く打かけ、向ひ來る其勢
の凄じさ。不意を喰つて味方の軍卒、忽ち總體崩れ、狼狽へ騒いで、元來し道へ
と、馬を乗り棄て、風に木の葉の散る如く、バラバラバツと、群ゐる千鳥群千鳥、
あはれ果敢なき次第也。無念の涙を押へ乍ら、バラモン軍の武運のつたなきを嘆
き悲しみ、片彦將軍の祕書官、マツ公タツ公兩人は、騒がず、焦らず悠々然とし
て、戦場の後を片づけ、負傷者と詐つて、ここ迄やうやう歸りける。アハ、ハ、ハ、

エー後は如何になりまするか、實地檢分の上ボツーボツと講談仕りますれば、明晩は何卒十二分の御ヒイキを以て、賑々しく御來聽あらむことを希望いたします。

チヨン　チヨン　チヨンだ

五三公、純公、タツ公一度に大口をあけ、

「アハ、ハ、ハ、」

と腹を抱へ、轉げて笑ふ。

（大正一一・一一・二八　舊一〇・一〇　松村眞澄録）

第一四章　忍び涙（一一六五）

祠の前には四人の敵味方頭の紐を解いて他愛もなく笑ひ興じてゐる。

五三公　「ア随分バラモン教にも面白い男が混入してゐるね。俺も今日は本當に鞆丸の皺伸しをしたよ。旅と云ふものは愉快なものだなア」

マツ公こう「俺おれだつてこんな面白おもしろい動物どうぶつに出で會あつたのは今日けふが初はじめてだ。チツトも戦せん争そう氣き分ぶんがせないわ。まるで喜劇きげきを口八くちやちやで見みてゐるやうだつた。一層いっそうの事こと、俺おれも祕ひし書よやく役やくを止やめて喜劇きげき師しとなりハルナの都みやこの大劇場だいげきぢやうで一ひとつ腕うでを揮ふるつて見み度たくなつた」

五三公いそこう「そりや貴様きさまのスタイルと云いひ、饒舌ぜうぜつと云いひ、氣轉きてんの利きく點てんから滑稽諧謔こっけいかいぎやくを、のべつ幕まくなしに吹ふき立たてる點てんは随分見み上げたものだ。屹度きつと千兩せんりやう役やく者しやになれるかも知しれぬよ」

マツ公こう「ナ―ニ駄目だめだ。齋苑いその館やかたを千兩せんりやう（占領せんりやう）役やくしや者しやと出掛でかけた處ところ、こんな嵐あらしに吹ふき散ちらされ、慘みぢめな敗軍はいぐんをやつたのだからな」

五三公いそこう「さうだから貴様きさまは軍人ぐんじんには適てきしないのだ。如何どうしても役やくしや者しや代物しろものだよ」

マツ公こう「さうかな、何なんだか俺おれもさう聞きくと役やくしや者しやを志願しぐわんしたくなつた。こんな殺風さつふう景けいな、何時いつ首くびが飛とぶかも知しれぬ様な危きけん險せんぱん千萬せんぱんな商賣しやうばいは嫌いやになつて了しまつたよ」

五三公いそこう「そんなら俺おれと此處ここで會あうたのも何なにかの因縁いんねんだらうから、一ひとつ奮發ふんぱつして改かい心しんとでかけ三五教あななひけうの宣傳使せんでんしのお供ともとなつたら如何どうだ。修業しうげふが出來できた上うへは又また宣傳使せんでんしとなれぬとも限かぎらぬからな」

マツ公こう「ヤ、三五教あなひけうの宣傳使せんてんしのお供ともも駄目だめだ。猿さるに目めを引ひかかれたり、捕虜とりこにせられて岩窟いはやの中なかへ打ち込ぶ込まれる様な事やうになると、さつぱり詮つまらぬからな、アハ、ハ、ハ、ハ、」

純公すみこうは膝ひざをにじり寄り、グツとマツ公こうの右手めてを握にぎり聲こゑを慄ふるはして、
「何なに、貴様きさま、誰たれにそんな事ことを聞きいたのだ。ちと可笑をかしいぢやないか。何なにも彼かも此こ處こで白状はくじやうしろ」

マツ公こう「誰たれにも聞ききやせぬわい。宣傳使せんてんしのお供ともして居ゐた伊太公いたこうを捕虜ほりよにして訊問じんもんした所ところ、俺おれの先生せんせいの玉國たまくに別わけさまは猿さるに目めを引搔ひつかかれたと白状はくじやうしたのだよ」

純公すみこう「その伊太公いたこうは一體いつたい何處どこに居ゐるのだ。貴様きさま知しつてるだらう。サア早はやく白状はくじやうせぬかい」

マツ公こう「そりや知しつてる。然しかし乍ながら片彦將軍かたひこしやうぐんから祕密ひみつを守まもれと云いはれてゐるのだから如何どうしても所在ありかは云いふ事は出で来きないわい。併しかし乍ながら生命いのちには別條べつでうないから安心あんするが宜よからう。彼奴あいつは何なんでも尋たづねされずればベラベラ喋しゃべるから大變重寶たいへんちゆうほうだと云いつてバラモン教けうの連中れんちゆうが岩窟いはやに入いれ毎日酒まいにちさけを飲のまして酔よはして齋苑館いそやかたの祕密ひみつを

皆みんなして聞きく事ことにしてゐるのだ。あんなに口くちの輕かるい奴やつは本ほん當たうに困こまつたものだね。尋たづねもせぬのに猿さるに搔かかれた事こともべらべら喋しゃべつて了しまつたのだ。さうだから片彦將軍かたひこしやうぐんも久米彦將軍くめひこしやうぐんも玉國別たまくにわけが負傷ふしやうしたと聞きいて大安心だいあんしんの體ていで河鹿峠かしかたうげを登のぼつて行いつたのだ。さうした處ところが前門ぜんもんの狼おほかみは弱よわりよつたが後門こうもんの虎とらに出會でくはし昨日ゆうべのあの敗軍はいぐんだ』
純公すみこう『何なんと貴様きさまも尋たづねもせぬ事ことに祕密ひみつをべらべら喋しゃべるぢやないか。伊太公いたこう以上いじやうだぞ』

マツ公こう『ナニ、斯かうして貴様等きさまたちと兄弟きやうだい同様どうやうになつたのだから、それ位くらゐの祕密ひみつは喋しゃべつたつて宜いいぢやないか。怪け我がもしとらぬ足あしを癒なほして呉くれた親切しんせつなお前まへだからな、アハ、ハ、ハ、』

五三公いそこう『そこ迄まで打解うちとけた以上いじやうは伊太公いたこうの所在ありかを知らしても宜いいぢやないか。どつと奮發ふんぱつして祠ほこらの神様かみさまへ寄附きぶすると思おもつて伊太公いたこうの所在ありかを奏上そうじやうせぬかい。御神ごしん殿でんに

……エーン』

マツ公こう『オイ、タツ公こう、如何どうしようかな。何なんだか片彦將軍かたひこしやうぐんに濟すまない様やうな氣きがするぢやないか』

タツ公「ウン何だか不徳義の様で言はれないな。秘密の守れぬ様な男は男子でな

いからな」

純公「そんな出し惜みをせずには打たぬ博奕に負けたと思つてどうだ、アツサリと

云つて呉れたら。俺だつて友達の難儀をジツとして見逃す譯にも行かぬからな」

マツ公「ウン、云つて呉れと云ふのなら言つてやつてもいいが、最前のやうに頭

抑へに白状せいなどと呶鳴りつけると、俺だつて少し腹に蟲があるから、云ひ度

くても云へぬぢやないか」

純公「いや濟まなかつた。そら、さうぢや、人間は感情の動物だからな、矢張穩

かに下から出て掛合ふのが利益だな」

マツ公「ハ、ハ、ハ、ハ、到頭兜を脱いでマツ公さまの軍門に降ると云ふ場面だな。

ヨシヨシお前がさう出りや俺だつて「まんざら」悪人でもない事はなから人情

に絆されて、チツと位は知らしてやつてもいいわ。併し乍ら此マツ公は云はない。

俺の肉體に憑依してゐる邪靈が云ふのだからな。今後屹度マツ公に聞いたなんて

云つちや不可いよ。悪神の守護神に聞いたと云つて貰はぬと困るからな」

五三公いそこう「アハ、ハ、ハ、中々なかなうまくやりをるわい。流石さすがは片彦將軍かたひこしやうぐんの祕書役ひしよやくだけあ
 るわい。何なににつけても巧妙かうめうなものだ。いや此この五三公いそこうも大おほいに感服かんぷく仕つかまつつた」
 マツ公こう「オイ、俺おれはバラモン教けうの片彦將軍かたひこしやうぐんの、やつぱり部下ぶかだから三五教あなひけうのお前まへ
 達たちに云いふ譯わけにや行ゆかない。何程なにほど邪神じゃしんだつて俺おれの體からだに憑ついてゐるのだから直接ちよくせう三五
 教けうには明あかされない。兔とも角かく此祠このほこらの神様かみさまに御祈願ごきぐわんするから其祝詞そののりとを拜聽はいちやうする方はうがよ
 からう。一寸待ちよつとつて呉くれ、谷川たにがはへ下おりて口くちを濺すずぎ手てを洗あらつて來くるから」
 と云いひ乍ながら只ただひとり人谷川たにがはへ下おり立たち、口くちや手てを清きよめ再ふたび此祠このほこらの前まへに歸かへつて來きた。マ
 ツ公こうは二拍手にはくしゆ再拜さいはい終はつて祝詞のりとを奏上そうじやうし始はじめた。
 「掛卷かけまくも畏かしこき祠ほこらの森もりに宮柱みやばしら太敷ふと建て高天原たかあまはらに千木ちぎ高知たかしりて堅磐かきはと常磐ときはに鎮しづまり給たまふ
 大自在だいじざい天大國彦あほくにひこの大前おほまへにバラモン教けうの軍いくさの司つかさ、千歳ちとせの綠榮みどりさかえに榮さかゆマツ公こう矣い慎つしみ
 敬あやまひ畏かしこみ畏かしこみも白まをす。抑秋そもそあきの紅葉もみぢは色いろづき初はじめ小男鹿さをしかの妻戀つまこふ河鹿山かじかやまの水清みづきよき谷
 川がはの邊ほとり、十月じふぐわつ十六日じふろくにちの朝日あさひの豊榮とよさか昇のぼりに願ねぎまつる。大黒主おほくろぬしの神かみの大御言おほみことを蒙かかぶり
 て齋苑いその館やかたに鎮しづまり給たまふ神素盞かむすさの鳴尊ののみことを言向和ことむけやはし糺きためむとランしやうぐん手將軍しやうぐんを初はじめとし片
 彦ひこ、久米彦將軍くめひこしやうぐん、征討せいたうに百ももの軍いくさを從したがへて上のぼりましき。先鋒隊せんぽうたいとして兩將軍りやうしやうぐんは十五

日の夕閒暮、月の輝き渡る祠の前に進みまし、暫し息を休らひ兵士の數を調べ進軍の御歌を歌ふ折しも、森の木蔭より現はれ出でたる、三五教の伊太公伊、物をも言はず軍の群に打ち入り縦横無盡に荒れ狂ひ、恨めしくも片彦將軍を打ち奉りたれば馬は驚きて跳ね廻り飛び上り將軍は佐久奈多里に道の邊に落ち給ひぬ。スワ強者現はれたりと、おのれマツ公は其強者に組みつき高手小手に縛め三人の軍人に護らせて、教も清晴の山の岩窟に隠しおきぬ。掛巻も畏き皇大神、嚴の御魂を照らさせ給ひて吾捕へたる伊太公を何處までも敵の手に歸らざる様守り幸へ給へ。又大黒主の軍人共は一人も過ちなく平けく安らけく守らせ給ひて、大黒主の御前に復言申させ給へと鹿兒自物膝折伏鶉自物頸根突抜天畏み畏みも祈願奉らくと白す。かなはぬからたまちはへませ、ポンポン」

純公「イヤ齋主御苦勞でムいました。あゝ貴方の熱誠な御祈願に感じ純公大明神も其願事を隅から隅までお聞きなさつたでせう、アハ、ハ、ハ、」

マツ公「エー、時にお前等の先生は如何なつたのだ。根つから其處邊にお姿が見えぬぢやないか」

純公すみこう「此森このもりのチツと向ふむかに治國はるくにわけ別の宣傳使せんでんし、玉國たまくにわけ別の宣傳使せんでんしと共に三人さんにんの俺達おれたちの友達ともだちと休息きゅうそくして居をられるのだ。何なんなら面會めんくわいしたら如何どうだ」

マツ公まつこう「イヤ、そりや願ねがうてもない事ことだ、おいタツ公こう、どうだ。一つひと拜顔はいがんの榮えいを賜たまはつたら」

タツ公こう「そいつア有難ありがたいなア。何程なにほど神力しんりきの強つよい恐おそろしい宣傳使せんでんしだつて、よもや吾々われわれを頭あたまから噛かぶりもなさるまいからな」

五三公いそこう「何なに、頭あたまから直すくにかぶりなさるぞ」

タツ公こう「ヤアそりや大變たいへんだ。まるで狼おほかみの様な宣傳使せんでんしだな」

五三公いそこう「きまつた事ことだよ。大神おほかみの教をしへを傳つたふる宣傳使せんでんしだもの。頭あたまからかぶらいで如何どうして役やくが勤つとまるかい」

タツ公こう「ヤアそいつア大變たいへんだ。おいマツ公こう、御免蒙ごめんかうむつて退却たいきやくしようぢやないか」

五三公いそこう「アハ、頭あたまからかぶると云いふのは宣傳使せんでんしの必要ひつえうな古代冠こだいくわんだよ」

タツ公こう「なんだ。吃驚びっくりさせやがった。俺おれだつて口くちからかぶるよ、無花果いちぢゆくや林檎位りんじく位めなら、アハ、ハ、ハ、ハ、」

純公「オイ、お前達二人は何處ともなしに親しみのある男だ。何れバラモン教へ這入つた位だから一通りではあるまい。一つ経歴談でも聞かして呉れないか」

マツ公「ウン、俺の生れはな、實はアーメニヤだ」

五三公「何、アーメニヤ？」

マツ公「ウン、其アーメニヤが不思議なのか」

五三公「實の所は俺の先生も純公の先生も生れはアーメニヤだからな」

マツ公「アーメニヤの生れならウラル教ぢやないか。それが又三五教の宣傳使になつてゐるのか。俺もアーメニヤの生れだが三五教は今におき、一人も居やせぬ。

チツと可怪しいな」

五三公「俺の先生はな、今迄は龜彦さまと云つてウラル教の宣傳使だつたのだ。

さうしてウラル彦の神様の命令で龍宮の一つ島へ三年も宣傳に行つてゐつた所、さつぱり駄目になつて歸る途中フサの海で難風に會ひ三五教の宣傳使日の出別に助けられ、それから國許へも歸らず三五教になつて了はれたのだ。そりや何とも神徳の高い先生だぞ」

マツ公こう 何なに、ウラル教けうの宣傳使せんてんしで龍宮りうぐうのひと一つ島じまへ宣傳せんてんに行いつて居をつた？ はてな、

そしてその名なが龜彦かめひこと云いふのかか」

五三公いそこう ウンさうだ。隨分ずぶん以前いぜんは面白おもしろい人ひとだつたさうだ。今いまこそ眞面目まじめ臭くさつて偉えら

い人ひとだがなな」

マツ公こう 其のお連つれの名なは聞きいてゐるのかか」

五三公いそこう ウン、聞きいてゐる。梅彦うめひこに岩彦いはひこ、鷹彦たかひこ、音彦おとひこ、駒彦こまひこ、そこへ俺おれの先生せんせいの

龜彦かめひこ様さまと六人ろくにん連づれた。半はんダース宣傳使せんてんしと云いつて隨分ずぶん名高なだかいものだつたらしいぞぞ」

マツ公こう 其の龜彦かめひこ宣傳使せんてんしは此森このもりの中なかに休やすんでゐられるのかか」

五三公いそこう ウン、居ゐられるら」

マツ公こう 一いっ遍會ぺんあひたいものだなな」

五三公いそこう 其前は又また先生せんせいの事こと云いふと顔色かほいろまで變かへて熱心ねっしんに尋たづねるが何なにか縁由ゆかりがある

のかか」

マツ公こう 有あるの無ないので、其の龜彦かめひこさまなら俺おれの永ながらく尋たづねてゐる兄にいさまだよ。

今いまは斯こうしてバラモン教けうに這入はいつてゐるが、もしや兄にいさまの所在ありかが、何なにかの機はづみに

分りはせぬかと、そればかり苦にしてゐるのだ。ア、有難い、その龜彦は俺の兄さまに違ひない。ア、惟神靈幸倍坐世かむながらたまちはへませと聲まで曇らせて感謝の意を表するのであつた。五三公は忽ち聲を張り上げて歌ひ出した。

神が表に現はれて 善と惡とを立別ける

そののみならず三五の 吾等を守る神様は

親兄弟の所在をば いと審に知らします

森の木蔭に憩ひたる 吾師の君よ龜彦よ

地異天變も畜ならぬ 突發事件が出来ました

さあさあ早く腰上げて 祠の前に出でませよ

思ひもよらぬ松さまが トボトボ此處に現はれて

龜彦さまに會ひ度いと 兩手を合して待つてゐる

あゝ惟神々々 神の恵は目のあたり

バラモン教の片彦が
一方の腕と仕へたる

神の司のマツさまは
吾師の君の弟に

間違ひないと知れました
治國別の宣傳使

何は兔もあれ逸早く
祠の前に下り來て

別れて程經し兄弟の
目出度き對面なされませ

此五三公も嬉しうて
手の舞足の踏む所

知らぬばかりになりました
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

兄弟二人の其緣由
なかなか盡きは致すまい

此世を造りし神直日
心も廣き大直日

ただ何事も人の世は
直日に見直し宣り直す

三五教の神の道
假令マツ公バラモンの

神のお道にあればとて
改心したれば天地の

清き氏子に違ひない
吾師の君よ逸早く

此處までお出で下さんせ
歡天喜地の花開く

前代未聞の御慶事が
今日の前に展開し

面白う嬉しうなります
貴方に仕へし五三公が

眞心籠めて願ひます
あゝ惟神々々

御靈幸はひまませよ

と歌つてゐる。

森の木蔭に息を休めてゐた五人の男、五三公の高らかに歌ふ聲に耳を澄ませて

ゐる。

晴公「モシ先生、あの歌の聲は五三公でせう。何だか妙な事を云ふぢやありませんか

ぬか

治國別「ウン、何だか合點の行かぬ事を云つてゐる様だ」

晴公「先生貴方は兄弟がおありなされるのですか」

治國別「ウン、あると云へばある、ないと云へばないやうなものだ」

晴公「それでも今五三公の歌に先生の弟が来たから會つてやつて呉れえと云つて
るぢやありませんか」

治國別「さう云つた様だな。如何しても合點のゆかぬ話だ。然し乍ら日頃念ずる
神様のお蔭で兄弟の對面をさして下さるのかも知れない」

と言葉も靜かに落着き拂つてゐる。

玉國別「治國別さま、どうも私は御兄弟が見えたやうな氣がしますがね。然し乍
ら御兄弟とすれば如何して斯んなバラモン教の軍隊の中を潜つて來られたのでせ

うか」

治國別「大方バラモン教へでも落ち込んでゐたのでせう。何だか最前から純公や
五三公の笑ひ聲が聞え、又外に二人ばかりも笑ひ聲が聞えてゐた様です。どうも
あの聲に何だか聞き覚えがある様に思ひましたよ」

かく話し居る所へスタスタとやつて來たのは狼狽者の五三公であつた。五三公
は上り坂で苦しかった息を喘ませ乍ら、

「せ、先生、最前から……私があの通り大きな聲で……歌つて知らしてゐるの

に、何を愚圖々々して居られるのだ。サア早く来て下さいな。偉い事になりましたぞ。それはそれは吃驚蟲が洋行する様な突發事件ですわ。サア早う下りて下さい。そして又伊太公の所在が分りました

玉國別は慌てて、

何？ 伊太公の所在が分りましたか。ヤアそれは有難い

治國別 俺の弟が分つたと云ふのか

五三公 分つたも分らぬもあつたものですか。最前からあれ程八釜しう騒いでゐるのに貴方は何を愚圖々々してゐるのですか。サア早く来てマツ公さまに喜ばしてやつて下さい

治國別は平然として少しも騒がず、笑ひもせず、別に喜びもせずと云ふ態度で、
ウ、弟が分つたら、それで宜い。やつぱり此世に生きて居つたかな

五三公 何と先生は兄弟に水臭い人ですな。兄弟は他人の初まりとか聞きますが如何にも古人は嘘は云ひませぬな。あれだけ焦れ慕うて久し振りに兄さまの所在が分り飛びつき武者振りつきし度い様に思つてゐるのに、旃陀羅が榎で鼻を擦つ

た様な事を仰有つちやマツ公さまの折角の期待を裏切ると云ふものだ。も少し優しく云つて下さいな。エー私までが悲しくなつて来た」

治國別「何は免もあれ祠の前迄下る事としよう。ヤア玉國別さま、三人の者共ボツボツ此天然別荘を出立する事にしようかなア、アハ、ハ、ハ、」

玉國別、治國別は悠々として四人と共に森の坂道を下り祠の前に着いた。

純公「ヤア、治國別様、お目出度うムいます。貴方の御兄弟が分りました。サア何卒お名乗りをなさいませ」

治國別は以前の如く冷然として、

「ア、左様か、大變な御看病に預かつたさうだな。マツ公さまの假病も全快しただらう。白十字病院も餘程繁昌してゐたさうですな」

純公「モシ先生、そんな洒落はどうでも宜しい、弟さまですよ。早くお名乗なさらぬか」

治國別「左様、弟に間違ひはあるまい。別に名乗る必要もないから」

玉國別「ウフ、ハ、ハ、」

道公みちこう「此奴アこいつ、妙なコントラストだ、アハ、ハ、ハ、」

（大正一一・一一・二八 舊一〇・一〇 北村隆光録）

第一五章 温愛をんあい（一一一六六）

治國別はるくにわけは儼然げんぜんとしてマツ公まつこうに向むかひ、

「何處いづこの何人なにびとの弟おとうとか知らぬが、まづまづ無事ぶじで目出めでたいなア。隨分ずぶん苦勞くらうをしたと

見みえて年の割わりりには寔やって居ゐるぢやないか」

マツ公まつこうは飛とびつくやうにして膝ひざをにじり寄よせ、

「貴方あなたは私わたしの兄様にいさま、龜彦かめひこさまでムいませう。ようマア無事ぶじで居ゐて下くださいました。

嬉うれしうムいます」

と早はやくも涙なみだをハラハラと垂たらして居ゐる。

治國別はるくにわけ「ヨウ、これは近頃ちかごろ迷惑めいわく、この治國別はるくにわけは其方そなたのやうな弟おとうとは持もつた覺おぼえがな

い。何かの間違ひではあるまいか」

マツ公「それはあまり胴欲のお言葉、よく此顔を御覽下さいませ」

治國別「ちつとも覚えがない」

タツ公「モシ龜彦様、否三五教の宣傳使様、私はマツ公の女房の弟、タツと申し

ます。縦から見ても横から見ても瓜二つ、御兄弟に間違ひはありません。そんなに「じら」さずに早く名乗つて下さいませ。義兄も氣を揉んで居ますから」

治國別「三五教の宣傳使玉國別の供を虜にし剩つさへ畏くも齋苑の館の大神様を

攻め滅ぼさむと致す、バラモン教の悪神の手先となるやうな弟は持った覚えがな

い……かく申す治國別の胸中は千萬無量、推量致せよ。バラモン教の神司、否軍

人」

マツ公「イヤ、兄様ではない治國別命様、輕率に兄弟呼はりを致しまして、誠に

御無禮でムいました。何卒お咎めなくお見直し聞き直しを願ひ上げます」

玉國別「イヤ治國別さま、決して御遠慮には及びませぬ。折角の御對面……」

と云はむとするを、治國別は玉國別の口元を押へるやうな手つきして、

「貴方の御親切は有難うございますが、是が如何して名乗られませうか。決して治國別は兄弟は持ちませぬ。マツ公とやら大神様の御前に三五の誠を現す氣はないか」

マツ公「ハイ然らば是より私の眞心を御覽に入れます。其上にて兄弟の名乗りをお願ひ申します」

と又もや泣き崩るる可憐らしさ。治國別は目を繁叩き、悲しさを耐へ默然として居る。

タツ公「サア兄貴往かう、到底誠を表はさねば何程實の兄様だつて名乗つて下さる筈がない」

と涙聲を絞りながら立ち上る。マツ公も立ち上り、
「宣傳使其他のお方々、暫時お別れ致します。明日はきつと此處でお目に懸りませう。此山口にはランチ將軍、片彦、久米彦初め鬼春別の大將が勢揃をして居りますれば、随分御用心なさいませ。今此處をお立ちなされては、如何に神力無雙の宣傳使なればとて、劍呑でムいます。左様ならば」

と立ち別れ、
兩人は急坂を南へ下り行く。

後見送つて治國別は涙を押し隠し、

☐ 焦がれたる人に相見し今日の身は

昔にましても苦しき。

走り往く人の姿を眺むれば

知らず知らずに涙ぐまるる。

過を改め直し大神の

道にかへれよ二人往く人。

秋の日の淋しさ吾に迫りけり

思はぬ人を見るにつけても。

懐しき戀しき人は曲津見の

醜の司となり下りける。

吾とても心は鬼にあらねども

神の大道を外すよしなし。

吾身魂如何なる罪を造りしか

淋しさ身に沁む秋の山路。

不意なくめぐり遭ひたる愛人は

神の仇とぞ聞きし悲しさ

玉國別 治國別神の御心思ひやり

吾も思はず涙おとしぬ。

やがて又花咲く春も来るらむ

冬籠りして待つ人の身は。

霜を踏み雪をかぶりて咲く花は

香めでたき庭の白梅

治國別はるくにわけ「有難ありがたし玉國別たまくにわけの言ことの葉はよ

三月やよひの木々きぎの心地こころなしぬる。

吾われは今いま悲かなしきチレンマにかかりけり

誠まことと愛あいの枷かせに責せめられ

道公みちこう「惟かむながら神かみの心こころに任まかしませ

やがて晴はれゆく秋あきの大空おほぞら」

萬公まんこう「親おやとなり子ことなり又またも兄弟きやうだいと

生うまるも神かみの仕組しくみなるらむ。

さりながら生しやうじやひつめつ者あし必滅めつ會あひ者あひ定離ぢやうり

浮世うきよの様さまを如何いかにとやせむ

晴公はるこう 師しの君きみの深ふかき心こころを思おもひやり

晴はるの心こころも曇くもりけるかな

五三いそこう公こう 師しの君きみよ心こころ安やすけく思おほしめ召めせ

頼たよりまつ身みの花はなや開ひらかむ。

清春きよはるの山やまに潜ひそみし伊太公いたこうを

伴ともなひ歸かへるマツ 夕ふたりツ二人ふたり。

マツ 夕ふたりツの二人ふたりの友ともはやがて此處ここに

笑ゑみを湛たへて歸かへり來くるらむ

玉國たまくに別わけ 最前さいぜんマツ公こうの話はなしに聞きけば、此山道このやまみちには鬼春別おにはるわけの軍勢ぐんぜいが數多あまた待ち伏ぶせ居をる
様子やうす、吾々われわれは別べつに急いそぐ必要ひつえうも、かうなつてはありますまい。暫しばく敵軍てきぐんの此山道このやまみちを
通過つうくわする迄まで待つ事ことに致いたしませうか

治國別はるくにわけ「それも一つの神策しんさくでせう。假令たとへ幾萬いくまんの敵軍てきぐんありとも神かみに任せた吾々われわれ、些すこしも驚おどろきは致いたしませぬが、敵てきを四方しほうに追おひ散ちらした處ところが、飯めしの上うへの蠅はへを追おふやうなもの、再び齋苑館いそやかたへ攻せめ來きたるは必然ひつぜんでせう。どうしても心こころの底そこより歸順きじゆんさすか、但ただしは此難所このなんしよを扼やくして其進路そのしんろを遮さへぎり留とめるより外ほか、名案めいあんもありませう。何卒どうぞ貴方あなたはもとの場所ばしよへお出いでなさつて英氣えいきを養やしなひ捲土重來けんどうじうらいの敵てきに備そなへて下くださいませ」

治國別はるくにわけ「左様さやうならば暫しばらく御免ごめんを蒙かうむりませう。サアサア萬公まんこう、晴公はるこう、往ゆかう」

と先さきに立たつ。後あとには玉國別たまくにわけ、道公みちこうの兩人りやうにんが残のこつて居ゐる。五三公いそこう、純公すみこうも治國別はるくにわけに従したがつて森蔭もりかげに身みを没ぼつした。晩秋ばんしゅうの風かぜは又またもや烈はげしく吹ふいて來きた。半毀ななばこれし祠ほくらはギクギクと怪あやしき聲こゑを立て、鳴なき出した。木々きぎの梢しすめはヒウヒウと笛ふえを吹ふく。バラバラバラと枯葉かれはが落おちる。冷つめたき雨あめさへ混まじつて、無雜むざふさ作さに目めの悪わるい玉國別たまくにわけの頭あたまを打うち叩たたく。二人ふたりは手早てばやく蓑みのを被かぶり、笠かさを確しつかと結むすびつけ、祠ほくらの後うしろに雨あめと風かぜとを辛からうじて避さける事ことを得えた。

日は漸やつやく西山せいざんに傾かたむいて、埒定ねぐらひさだむる鳥とりの聲こゑ彼方かなた此方こなたの谷間たにまより喧かまびすしく聞きこえ來きたる。

薄衣うすぎぬの肌はだを冷ひやす風かぜ、時々ときどき降り來きたる村時雨むらしぐれ、日ひの暮くれると共ともに寂寥せきれう益々ますます身みに迫せまり來きたる。道公みちこうは玉國別たまくにわけの身體からだを後うしろよりグツと抱だいて體からだの暖だんを保たもつべく、吾身わがみの寒さむさを忘わすれて勞いたはつて居ゐる。發作的ほつさてきに出でてくる頭あたまの痛いたみ、間歇的かんけつてきに出でて來くる眼めの痛いたみ、得えも云いはれぬ苦くるしみである。玉國別たまくにわけは私ひそかに神かみに祈いのり、且かつ身みの罪つみを謝罪しやざいして居ゐた。此時夕このときゆふべの谷間たにまを壓あつして宣傳歌せんでんかの聲こゑが聞きえて來きた。

至仁至愛しじんしあいの大神おほかみの 大御心おほみこころになりませる

三五教あななひけつの御教みをしへを 豊葦原とよあしはらの瑞穂國みづほくに

くまなく開ひらき照てらさむと 神素盞鳴大神かむすさのをのおほかみの

神言畏みことかしこみ出いでませる 吾背わがせの君きみの音彦おとひこは

今いまや何處いづこにましますか 齋苑いその館やかたの神かむどの殿どのに

額ぬかづきまつり吾夫わがつまの 功いさををたてさせ給たまへよと

祈いのる折をりしも摩訶まか不思議ふしぎ 吾目わがめにうつりし光景くわうけいは

河鹿峠かしかたうげに名なも高たかき 懷谷ふところだにに現あれまして

子猿こざるの群むれに十重とへ二十重はたへ 取り圍かこまれし其揚句そのあげく

二つの眼まなこを失うしなひて 苦しくるみたまふ有様ありさまを

窺うかがひまつりし吾心わがこころ 何なんに譬たとへむすべもなし

心を定さだめ肝きもを練ねり 神かみの御前みまへに額ぬかづきて

大神勅だいしんちよくを伺うかがへば 皇大神すめおほかみの御言葉みことばに

齋苑いその館やかたの五十子いそこひめ姫め 夫をつとの難なんを救すくふべく

今子いまこの姫ひめを従したがへて 片時へんじも早はやく出いでませと

詔のらせ給たまひし有難ありがたさ 天てんにも登のぼる心地こころちして

心こころいそいそ河鹿山かしかやま 涉わたりて此處ここまで來きたりけり

あゝ惟かむながらかむながら神々々かむながら 御靈みたま幸さちはひましまして

吾背わがせの君きみの遭難さうなんを 救すくひたまひて三五あななひの

神かみの依よさしの神業かむわざを 完全うまらに委曲つばらに成なし遂とげる

御稜威みいづを與あたへ給たまへかし 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月は盈つきつとも虧かくるとも 假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

神に仕へし吾夫の 二つの眼は失すとも

如何でかひるみ給はむや 遠き山野を打ち渡り

吾背の君の後追うて 其神業を詳細に

補ひまつり五十子姫 今子の姫と諸共に

此神業を果さねば 假令百年かかるとも

齋苑の館へ歸らじと 盟ひまつりし悲しさよ

あゝ惟神々々 此急坂を吹きつける

醜の嵐の一時も 早く静まり冬も過ぎ

花咲く春の來ること 吾背の君の眼病を

開かせたまへ惟神 神の御前に願ぎまつる

斯く歌つて下り來るのは歌の文句に現はれた玉國別の妻五十子姫であつた。

玉國別の妻神と 仕へたまひし五十子姫

夫の危難を救はむと
神の御許し受けたまひ

孱弱き女の身をもつて
荒風すさぶ荒野原

漸く越えて河鹿山
淋しき山野を打ち渡り

又もや吹き来る烈風に
髪梳り雨に濡れ

木の根に躓き足破り
種々雑多と艱苦して

尋ね來ますぞ雄々しけれ
今子の姫は今此處に

吾師の君の後を追ひ
女ながらも皇神の

道にさやれる曲津見を
嚴の言靈打ち出して

言向け和し月の國
四方にさやれる鬼大蛇

醜神司を拂はむと
岩の根木の根踏みさくみ

足にまかして進み來る
あゝ惟神々々

吾等一行の出で立ちを
憐れみたまひ逸早く

吾師の君の御前に
進ませたまへ惟神

神の御前に今子姫
誠心捧げ願ぎまつる

獅子狼は猛るとも 如何に木枯強くとも

河鹿峠は嶮しとも などが恐れむ皇神の

恵を受けし此體 勇み進んで何處までも

往かねばおかぬ吾思ひ 遂げさせたまへ天地の

御親とまします大御神 神素盞鳴大御神

日の出の神や木の花の 姫の命の大前に

頸根突き抜き願ぎまつる

と歌つて祠の森の前に向つて下り來るのが今子姫であつた。五十子姫、今子姫は、

玉國別が此祠の後に雨風を凌ぎ居るとは夢にも知らず、

五十子姫「ア、今子さま、やうやう祠の森迄参りました。お蔭で風も静まり雨も

やみましたから、此處で御祈念をして暫く足をやすめる事に致しませう。かうス

ツポリと日が暮れては坂道は劍呑でムいますからなア」

今子姫「ハイさう致しませう。何だか床しい森でムいます。私はどうしても此森

に玉國別さまが居られるやうな氣がしてなりませぬわ」

五十子姫「貴女もさう思ひますか。私も何となく、なつかしい森だと思ひます。

サア此處で一服致しませう」

兩人は拍手再拜、半破れし祠に向つて祈願を籠めて居る。

此時玉國別は道公に抱かれ心地よく睡について居たがフト目を醒まし、

「ヤア道公、御苦勞だつた。吾を抱へて居つて呉れたのだなア。お蔭で温かく睡

らして貰つた。頭の痛みも癒つた。眼の痛みも忘れたやうな氣がする。ア、有り

難い、此嬉しさは何時までも忘れはせぬぞ」

道公「先生、そりや何を仰有います。弟子に禮を言ふといふ事がありますか。私

だつて貴方を抱へさして頂いたお蔭で、眞に暖かく知らず識らず安眠致しました。

これも先生の御餘光でムいます。禮を言はれては困ります。私の方からお禮を申

上げねばなりません」

玉國別「惟神なれが情のあつ衣

冷^{つめ}たき風^{かぜ}を凌^{しの}ぎけるかな
』

道^{みち}公^{こう} 』 師^しの君^{きみ}の御^{おん}身^みの温^{ぬく}み身^みにうけて

蘇^{よみが}へりけり吾^{われ}の魂^{たましひ}
』

玉^{たま}國^{くに}別^{わけ} 』 旅^{たび}に出^でて人^{ひと}の情^{なさけ}を悟^{さと}りけり

神^{かみ}と道^{みち}とに仕^{つか}へゆく身^みは
』

道^{みち}公^{こう} 』 毀^{こは}れたる古^{ふる}宮^{みや}なれど新^{あたら}しき

惠^{めぐみ}の露^{つゆ}を下^{くだ}したまひぬ
』

玉國別たまくにわけ 治國の別の命の神司はるくに わけ みこと かむつかき

夜風よかせにさぞや苦しみたまはむ。

吾宿わがやどに残のこせし妻つまは嘸さそやさぞ

吾身わがみの行く方ゆ へたう尋たうね居をるらむ

五十子姫いそこひめ、今子姫いまこひめは敏さとくも、祠ほこらの後うしろより幽かすかに漏もれ來くる歌うたを聞ききて、飛とび上あがる
ばかり打うち悦よろこび、「吾夫わがつまはここにましませしか」と轟とどろく胸むねをぢつと抑おさへ、

五十子姫いそこひめ 懐なつかしき吾背わがせの君きみの聲聞こゑききて

冴さえ渡わたりけり胸むねの月影つきかげ

今子姫いまこひめ 懐なつかしき吾師わがしの君きみや皇神すめがみの

影かげに包つつまれ安やすくいませる

道公みちこうは小聲こしこゑになり、

「モシ先生せんせい、あの歌うたをお聞ききになりましたか、どうやら五十子姫様いそこひめさまのやうで御座ございますなア」

玉國別たまくにわけ「ウン確たしかに五十子姫いそこひめだ。一人ひとりは今子姫いまこひめに閒違まちがひなからう」

道公みちこう「そんな事ことを仰有おつしやらずに、早くはやお會あひになつたらどうでせうか。五十子姫様いそこひめさまは遙々はるばる此處迄こゝまでお後あとを慕したつてお出いでなさつたのでムいます」

玉國別たまくにわけ「ウン、會あうてやり度たいは山々やまやまだが、今會いまあふ事ことは出來できぬ。不愆ふびんながら齋苑いそやか館たへ追おつ歸かへさねばなるまい」

五十子姫いそこひめ「モシ其處そこに居をられますのは、吾夫わがつまたま玉國別様たまくにわけさまぢやムいませぬか。貴方あなたは大變たいへんな怪我けがをなされましたと、神様かみさまに承うけたまはり心こゝろも心こゝろならず、今子いまこさまとお後あとを慕したつて參まゐりました。御容態ごようたいは如何いかがでムいますか、どうぞお知しらせ下くださいませ」

玉國別たまくにわけ「盲目めしひたる心こゝろの眼開まなこひらけけり

右みぎりの目めをば猿さるにとられて」

五十子姫いそこひめ 情なさけなや吾背わがせの君きみの御眼おんまなこ
剔えぐり取りとりたる猿ざるぞ恨うらめし

今子いまこ姫ひめ 兔とも角かくも吾師わがしの御君おんきみ出いでませよ
五十子いそこの姫ひめの心こころあはれみて

玉國たまくに別わけ 妻つまの君きみに一目ひとめ會あひたく欲ほりすれど
神かみの使命しめいはおろそかならねば。

玉國たまくにの別わけの司つかさは妻神つまがみに
助たすけられしと人ひとに云いはれむ。

恥はづかしき吾眼わがまなこをば若草わかぐさの
妻つまの命みことに如何いかでか會あはさむ

道公みちこう「モシ先生せんせい、そんな几帳面きちやうめんの事仰有ことおつしやらいでも宜よろしいぢやありませんか。奥様おくさまがお出いでになつて居ゐるのですから、誰たれが何なんと申まをませう。そこが夫婦ふうふの情愛じやうあいで△い
ますから、サア祠ほこらの前迄参まへまでまゐりませう」

玉國別たまくにわけ「そんなら兔とも角かくも出でて見みようかなア」

と道公みちこうに手てを曳ひかれ、杖つゑを力ちからに祠ほこらの前まへに出でて行いつた。五十子姫いそこひめは十七夜じふしちやの月つきの漸やうや

く山やまの端はに上のぼつた光ひかりに夫をつとの顔かほを打うつち眺ながめ、

五十子姫いそこひめ「ヤア思おもつたよりも酷ひどい搔かき創きう、マアどうしたら宜よろしからうなア、今子いまこひ

姫めさま」

今子姫いまこひめ「お氣きの毒どくな事ことで△います、何なんと申まをし上あげて宜よろしいやら、言ことの葉はも出でませ

ぬ。併しかし御心配ごしんぱいなさいますな、キット神様かみさまが癒なほして下くださいませう」

五十子姫いそこひめ「モシ吾夫様わがつまさま、餘あまり痛いたみは致いたしませぬか」

玉國別たまくにわけ「ウン些ちつとばかり痛いたむやうだ」

(大正一一・一一・二八 舊一〇・一〇 加藤明子録)

第五篇 清松懷春

第一六章 鱒鍋（一一一六七）

清春山の峻坂を歌を歌ひ乍ら登つて行く二人の男があつた。これは祠の森を立
出でて伊太公を奪ひ返さむと進み行くバラモン教のマツ公、タツ公の兩人である。
マツ公は急坂を上り乍ら歌ひ出した。

大足別の神司 難攻不落と頼みたる

清春山の岩窟も 三五教の宣傳使

照國別の一行に 不在を守りしポーロさま

其外一同悉く 生言靈に打ぬかれ

忽ち心を翻し 善か悪かは知らねども

あななひけう
三五教が結構だと

ぶか
部下を引つれ河鹿山

たつげ
峠を越えて二三日

いぜん
以前にここを登りしと

き
聞いたる時の驚きは

ねみみ
寝耳に水のやうだつた

ウントコドツコイ　ハ―ハ―ハ―
之から先はだんだんと

みち
道は峻しくなつてくる
タツ公さまよ氣をつけよ

けらい
家來の奴に言ひつけて
ポー口の歸つた脱殻へ

あななひけう
三五教の伊太公を
高手や小手にふん縛り

ひとま
一先づ隠しておいたのを
コリヤ又えらいドツコイシヨ

ちい
地異天變が勃發し
おれが捕へた人物を

また
又もや俺がスタスタと
息の切れるよな急坂を

のぼ
登つてスツパリ取返し
治國別の兄いさまに

かへ
お返し申さにや如何しても
水も洩らさぬ兄弟の

ウントコ　ドツコイ　ドツコイシヨ
名乗を天晴れしてくれぬ

バラモン教に這入るよな
俺は弟持たないと

ダラ助^{すけ}ねぶつたやうな顔^{かほ} ウントコドツコイ ヤットコシヨ

なかなか縦^{たて}に首^{くび}ふらぬ お前^{まへ}の知^しつて居^ゐる通^{とほ}り

一度^{いちど}兄^{あに}貴^きに會^あひたいと バラモン教^{けう}の神^{かみ}様^{さま}に

今日^{けふ}迄^{まで}祈^{いの}つた甲^か斐^ひあつて 思^{おも}ひもよらぬ谷^{たに}間^{あひ}で

ベツタリコーと出^で會^くはし ヤレヤレ嬉^{うれ}しとドツコイシヨ

喜^{よろこ}んで見^みたのは水^{みづ}の泡^{あわ} 梃^{てこ}でも棒^{ぼう}でも受^うけつけぬ

三五^{あななひけう}教^{せん}の宣^{せんでん}傳^し使^し 昔^{むかし}の兄^{あに}ぢやと思^{おも}うたら

コリヤ又^{また}エライ變^{かは}りやう さうぢやと言^いつてマツ公^{こう}も

折^{せつ}角^{かく}兄^{あに}貴^きに會^あひ乍^{なが}ら 此^{この}儘^{まま}別^{わか}れるこたいやだ

畏^{おそれ}くも素^{すさ}盞^の鳴^をの 神^{かみ}の館^{やかた}へ攻^せめよせる

魔^ま神^{がみ}の軍^{いくさ}に從^{したが}つて やつて來^きたのもバラモンの

神^{かみ}の御^{おん}爲^{ため}身^みを盡^{つく}し 其^{その}褒^{ほう}賞^{しょう}にウントコシヨ

戀^{こひ}しき兄^{あに}に如^どうかして 會^あはして貰^{もら}はうと思^{おも}うた故^{ゆゑ}

天地^{てんち}の間^{あひだ}にドツコイシヨ ますます坂^{さか}がキツウなつた

轉ころんで怪け我がをしてくれな　　モウ一人ひとりともない兩親ふたおやに

先立さきだたれたる淋さびしさに　　兄貴あにきのことを思おもひ出だし

ウラルの教をしへの本山ほんざんや　　所々ところどころの廣前ひろまへを

搜さがしてみたれどウントコシヨ　　ドッコイドッコイ　　ヤットコセイ

影かげも形かたちも見當みあたらぬ　　兄貴あにきは龍宮りゅうぐうの離はなれ島じま

宣傳功せんでんこうを奏そうせず　　此方こちらの國くにへ歸かへり來きて

大方おほかた死しんだであらうかと　　觀念くわんねんしてはみたものの

蟲むしが知しらすか如何どうしても　　諦あきらめ切きれぬ身みの因果いんぐわ

所ところもあらうに三五あななひの　　齋苑いその館やかたに居をつたとは

夢ゆめにも知しらぬ驚おどろきだ　　あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

御靈幸みたまさちはひましまして　　私わたしが知しらずに手てにかけた

三五あななひけう教けうの伊太公いたこうを　　家來けらいの奴やつをチヨロまかし

四しの五ごのなしに取返とりかへし　　お前まへと俺おれと兩りやうにん人が

治國別はるくにわけの兄あにの前まへ　　ゾロリと出だしてやらなけりや

兄貴の顔も立つまいし

俺も大きなドッコイシヨ

面をばさげて歸れない

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして

此坂安く平けく

登り下りをさしてたべ

タツ公お前も宣傳歌

一つ歌つてドッコイシヨ

岩窟の前まで行かうかい

ウントコドッコイ、ハーハーハー

息が苦しうて言靈の

どうやら原料が切れさうだ

ハー惟神々々

御靈幸はひましましてよ。

ドレ一服して行かうかい。寒い風は吹いてをつても、坂の上り下りは随分汗の出るものだなア。ここに丁度よい岩がある、氣は急いで仕方がないが、チツとは體と相談しなくちや體も大切だからなア、ハーハー フーフー

と息をばづませつつ言ふ。

タツ公「俺も一つ此處で一休みして、元氣を付け、三人の奴がゴテゴテ吐したら、

蹴り倒し、陥穽へ突込んでおいて、伊太公一人を連れ歸ることにしようかなア
と云ひ乍ら、西の空を眺め、脚下の谷川の白布を晒したやうな泡立つ激流が木々
の梢の間からチラついてゐるのを打ち眺め、愉快げに汗を入れてゐる。
タツ公は急坂を攀ぢ乍ら、細い聲で千切れ千切れに歌ひ出した。ここからは一
層道が嶮しくなり、團子石が狭い山路に無遠慮にころがつてる。

□ 清春山で第一の

難所と聞えし蜈蚣坂

道の真中に團子石

遠慮會釋も知らぬ顔

俺等を轉倒そと待つてゐる

ホんに物騒な世の中だ

チツとも油断は出来はせぬ

ウントコドツコイ人の手に

持つてゐる物でも引つたくり

吾懷を肥やさむと

何奴も此奴も企みゐる

悪魔ばかりの世の中だ

折角口へ頬張つた

パンでも隙があつたなら

食指を大に動かして

ヤットコドツコイ剔り出し

直様自分の口中へ

捻込む様なウントコシヨ

悪逆無道の奴ばかり

バラモン教の神司

大黒主こそ天地の

神の心に叶うたる

誠のお方と申うた故

ウントコドツコイ、マツ公が

入信したのを幸ひに

俺も一寸出来心

這入つて見たが申うたより

中身の悪いバラモン教

こんな事だと知つたなら

ヤツパリ元の百姓で

暮して居つたがよかつたと

後悔してもハハハハハ

後の祭で仕方ない

ジツと堪へて開運の

時節を待ちし其内に

鬼春別に従ひて

俺等の主人の片彦が

齋苑の館に堂々と

攻め行く時の秘書役に

選ばれたるを幸ひに

一角今度は手柄して

頭を上げてみようかと

申うた事も水の泡

河鹿峠の八合目

三五教の言靈を

雨や霰と浴びせられ

脆くも逃行く片彦や

久米彦さまの敗軍を

眺めた時の馬鹿らしさ

俺等は愛想が付きた故

モウこれきりで御免をば

ヤットコドツコイ蒙らうと

お前と密にドツコイシヨ

謀し合せてトボトボと

皆に遅れて坂道を

下つてみればこれは又

思ひもよらぬ三五の

神の司の御供たち

祠の前に端坐して

何かは知らぬがブツブツと

分らぬことを話してる

コリヤ堪らぬと思へ共

逃げ路のない一筋の

此谷間が如何なるか

俄に剽軽者となり

滑稽諧謔あり丈を

盡して相手を笑はせつ

心を和げみたる折

フトした事からマツ公の

兄の龜彦ドツコイシヨ

ヤットコドツコイ ハーハーハー

三五教に使はれて

世にもめでたき宣傳使

はるくにわけ 治國別となつてみた

それをば聞いた俺の胸

ちい 地異天變が一時に

起りし如き心地した

これもヤツパリ神様の

水も洩らさぬお仕組の

なにかの端であらうかと

轟く胸を撫で下ろし

ヤツと悲劇の幕を上げ

玉國別の御供なる

伊太公さまを救ひ出し

それを土産にマツ公の

きやうだい 兄弟名乗を遂げさせて

俺もこれから三五の

しんじや 信者にならうと決心し

心イソイソやつて来た

あゝ 惟神々々

御靈幸はひましませよ

話はつて岩窟の中には伊太公を始め甲乙丙の三人が車座になつて、面白可笑しく打ち興じ乍ら、雑談をやつてゐる。ポー口の留守役が齋苑の館へ一同を引連れて出た跡は、生物と云つたら、蝙蝠がここ幸ひと吾物顔に出入を始めかけてゐる。

た位であつた。そこへマツ公の家來に准ずべき三人の男、マツ公の命令で、伊太公を縛り上げ、此處迄送り來り監視の役を勤めてゐたのである。併し乍ら三人の男は伊太公の辨舌にチヨロまかさされ、縛めの繩を解き、ポーロが残りおいた酒壺から残りの酒を汲み出し、チビリチビリと呑み乍ら、面白さうに他愛なく喋べつてゐる。

甲「エーもう今頃は先鋒隊の片彦、久米彦將軍は、首尾よく難關を突破し、齋苑の館へ着かれる時分だろ。齋苑の館に於ても随分心配だらうなア」

伊太公「アハ、ハ、ハ、齋苑の館には神變不思議の神術を備へてゐる生神ばかりだから、さう容易には行くまいぞ。俺だつて、事と品に依れば片彦將軍位は屁一つ放つたら、吹き飛ばすのは何でもないのだが、昨夜の様に谷底へ迂り落ち、向脛を打つて動けぬ所を括られちゃ、何程豪傑でもたまらないからのう」

甲「ソラさうだ。誰だつて寢鳥を締るやうな目に會はされちゃ叶ひっこはないワ。ナア伊太公さま、實ア俺も君に同情してゐるのだ。マツ公の……大將、厳しく牢獄へ放り込んでおけと言やがつたが、それでも俺はかうして君に同情をよせ、

チツとも虐待はせないのだから、チツとは俺の心も買つてくれな困るよ」

伊太公「ソラさうだ、敵の中にも味方ありと云ふからなア、併しお前達は、大黒主の神は本當に偉い神さまだと思つてゐるか」

甲「さうだなア、何を云つても化物の世の中だから、善惡正邪の、俺達に判断はつかないワ。……苔むす巖は變じて金殿玉樓となり、虎狼野干は化して卿相雲

客となり、獅子は化して萬乗の尊となり、王位の座に装ひを堆くし、袞龍の袖に薰香を散らす世の中だからなア。大黒主もキツと其選に洩れないだらうよ。昔は

鬼雲彦とか云つたさうだから、どうせ立派な神様の系統ぢやあるまい。併し乍らこんな事はここ限りだ。ノウ乙丙、メツタに喋りやしようまいのう」

乙「そんな事喋らうものなら、俺の首がなくなるワイ、ナア丙、さうぢやないか」
丙「さうともさうとも、こんな話を聞いた以上は直様甲の首をチヨン切るか、後

手にフン縛つて將軍様の前へ突き出すのが本當だ。それを看過しておくと云ふのはヤツパリ同罪だからなア。甲の云つたのは俺達が言うたやうなものだ。それだ

から言へと云つたつて言ふ氣遣ひないワ。マア安心してくれ」

伊太公いたこう「併しかし大分酒だいぶんさけがまはつたやうだが、モウいい加減かげんに歸かへつたら如何どうだ。俺おれも實じつはお師匠ししやうさまが待まつてゐるのだからなア」

甲かふ「其奴そいつア一寸困ちよつとこまる、何程親密なにほどしんみつなお前まへと俺おれとの仲なかでも、お前まへを取逃とりにがしたことが分わかれば、俺おれはサーツパリだからなア。どないでも大切たいせつにするから、一遍いっぺんマツ公こうの大將たいしやうが查しらべに来くるまでここに斯かうして居をつてくれ。お前まへにや氣きの毒どくだけれど、俺おれだつてヤツパリ氣きの毒どくぢやないか」

伊太公いたこう「さう言いはれると俺おれも先生せんせいが大事だいじだから歸かへりたいのだが、情誼じやうぎに絆ほだされて歸かへることも出来できなくなつた。何なんと人間にんげんと云いふものは氣きの弱よわいものだなア、自分じぶん乍ながら自分じぶんがでに愛想あいさうがつきて來きたわい」

岩窟いはやの入口いりぐちからマツ公こうの聲こゑ、

「オーイ、イル、居ゐるかなア」

イル「イルは此處ここに居をります」

マツ「三五教あななひけうの如何どうしたツ」

イル「オイ、伊太公いたこう、頼たのみぢや、一寸暫ちよつとしばらく牢ろうへ這入はいつとつて呉くれぬか、こんな所ところ

みられちやそれこそサツパリだ。あれあの通り大將が臨檢に來よつた。オイ乙、丙早く伊太公さまを、一寸の間でいいから、牢へ入れといてくれ、俺や出口まで行つて何とか彼とか云つて隠す時間を保つてゐるから、手早くやつてくれよ』と云ひ乍ら、入口へ驅け出し、

イル『これはこれはマツ公の御大將、御臨檢御苦勞でムいます。貴方の仰せの通り、後手に縛り、どこもかも、雁字搦みにして石牢へブチ込み、昨日から叩いて叩いて、キヤアキヤア言はして苦めてやりました。モウあゝしておけばメツタに逃げる氣遣ひありません。御安心下さいませ。サア、齋苑館の方の戦が大變忙がしいでせう、どうぞ門を這入らずにトツトとお越し下さいませ。片彦將軍様がお待兼でムいませう』

マツ公『逃げないやうに、此岩窟の中で貴様たち番をして居れと言つたのだが、そんな打擲を爲いとは言はないぞ。本當に左様な目にあはしたのか、エーン』

イル『イエイエ滅相もない、誰がそんな残酷なことを致しますものか』

マツ公『そんなら、如何しておいたのだ』

イル「へー、實の所は……エ、一寸相手に致しました、随分面白い奴でムいますよ」

マツ公「何、一寸相手にした？ 随分手が利いてゐるだらうなア」

イル「へーへー、中々好う利いてゐますワ、特に左が一番能う利きますよ。呑めよ騒げよ一寸先や暗よ……と申しましてなア、それはそれは面白いお相手ですワ」

マツ公「ハ、ハ、さうすると、お酒でも出して大切に扱つてゐたのだなア」

イル「へー、マアざつと、そんなものでムいます」

マツ公「ウン、其奴ア偉いことをした。定めて満足して居るだらうなア」

イル「へいへい、十二分に満足して居ります。ソラ昨夜も賑やかうムいましたよ。ステテコを踊つたり、舞をまうたり、賑かいこつてムいました」

マツ公「ポーロの大將はどこに居るのだ。根つから人が居らぬやうぢやないか」

イル「ポーロですか、アリヤもう二三日前に齋苑の館へ行つて了ひましたよ」

マツ公「ナーニ、齋苑の館へ？……澤山連れて行つたのか」

イル「へーへー何でも十五六人連れてみたやうです、チヤンと遺書がしてゐました。而も三五教の信者になりましたなア」
マツ公「何は免もあれ、伊太公さまに會はしてくれ。オイ、タツ公、サア這入らう」

と言ひ乍ら細き入口を潜つてイルの後に従ひ、奥へ奥へと進み入る。

(大正一一・一一・二八 舊一〇・一〇 松村眞澄録)

第一七章 反歌「一一六八」

イルの案内で松公、龍公兩人は岩窟の奥の間に行つて見ると伊太公、サール、イクの三人が一生懸命に組み付き合ひを始めて居る。サール、イクは伊太公を牢獄へ打ち込まうとする、伊太公は這入らうまいと抵抗する、揉み合ひの最中であつた。松公はこれを見て、

「コラコラ、待て」

と呶鳴りつけた。イク、サール二人は此聲に驚いて、パツと手を放した。

松公「コリヤ兩人、大切な客人を掴へて何を打擲致すのか」

イク「へえ、イクイク【イク】ら這入れと云つても此奴頑固で這入らぬものです

から一寸イクサールをやつて居りました」

サール「なかなか剛情な奴でムいます。此伊太公はチツと【イタ】い目に合はし

てやらねば懲りませぬからなア。イクとサールと兩人が伊太公に向ひ臨時イクサー

ルをやつて居つた處でムいます。牢の中へ行けと云ふのに【イク】とか行かぬと

か云ふものですから、いや、もう偉い骨を折りました」

松公「大變に酩酊してるぢやないか。其足許は何だい」

兩人一度に頭を搔き乍ら、

「ハイ」

と云つて蹲まる。

松公は言葉を改め、

「貴方は伊太公さま、玉國別様のお供のお方、えらい昨夜は御無禮致しました。今日はお迎へに参りましたから何卒私について祠の森まで歸つて下さいませ」

伊太公「ヤアお前は昨夜俺をフン縛つた奴だな、又してもひどい目に會はず心算だらう。俺やもう此處へ来た以上は動くのは嫌だ。そんなむつかしい顔せず一杯やつたら如何だ。伊太公は此岩窟の主人公だ。遠慮はいらぬから、サアサア飲んだり飲んだり、世の中はさう七六つかしくやつた處で同じ事だ。人に憎まれて此世を送るよりも四海同胞主義を發揮して互に人間同志睦み親しみ手を引きあうて渡つたらどうだ。ちつぽけな人間同志が戦をしたり喧嘩をしたりしたつて、はづまぬぢやないか」

松公「イヤ如何も恐れ入りました。先づ先づ御壯健なお顔を拜し此松公もやつと胸を撫で下ろしました。此處に居るのは龍公と申しまして私の義弟です。つまり女房の兄弟ですからな、何分宜しく可愛がつてやつて下さいませ」

伊太公「何が何だか、チツとも譯が分らなくなつて来た。一體松公とやら、お前は何處の人だ」

松公まつこう「ハイ、私の生うまれはアーメニヤです」

伊太公いたこう「何なに、アーメニヤですと、そら妙めうだ。三五教あななひけうにはアーメニヤ出での立派りっぱな宣せん傳使でんしが澤山たくさん居をられますよ。私わたしの先せん生せいの玉國別たまくにわけさまもアーメニヤ生うまれなり、まだ外ほかにも澤山たくさんにアーメニヤの方かたが居をられますよ」

松公まつこう「私わたしは三五教あななひけうの宣傳使せんでんし治國別はるくにわけの弟おとうとでごいます。何なにとぞ御入魂ごじつこんに今こん後ごは願ねがひ度たいものです」

伊太公いたこう「成なる程ほど、さう聞きけば治國別はるくにわけさまに生寫いきうつした。何なんと妙めうな處ところでお目めに掛かつたものだな」

松公まつこう「其治國別そのはるくにわけは今祠いまほらの森もりに玉國別たまくにわけさまと休やすんで居をります。然しかしながら私わたしがバラモン教けうに仕つかへて齋苑いその館やかたへ攻せめ寄よせる軍いくさの中なかへ加くははつてゐたものですから、如何どうしても兄貴あにきは名乗なつて呉くれないのです。「お前まへの誠まことが現あらはれたら」と申まをしますので、こりや如何どうしても伊太公いたこうさまをここに隠かくした罪つみを詫わび玉國別たまくにわけさまに貴方あなたをお渡わたしせねば許ゆるして呉くれないと合點がってんして二人ふたりが取る物ものも取り敢あへず、お迎むかへに參まつた次第しだいです」

伊太公「ヤア、それは奇縁ですな。さうして治國別、玉國別の兩宣傳使は機嫌は宜いでせうかな」

松公「どちらも機嫌が宜しい。然し乍ら玉國別さまは少しお怪我を遊ばしたさうで氣分が悪さうにして居られました」

伊太公「ア、それは心配な事だ。そんならお供をしようかな」

此處に松公、龍公、伊太公を始め外三人は岩窟を後にし、青春山の峻坂を下り行く。伊太公は先に立ち歌ひ始めた。

雲の帯をば引きしめて 中空高く聳えたる

青春山に来て見れば 景色は四方に展開し

廣袤千里の彼方には 大山脈がうすうすと

幻の如横たはり 見渡す限り黄金の

錦の野邊となりけり 祠の森に息休め

吾師の君と諸共に 一夜を明かす折もあれ

人馬の物音かしましく

谷道さして登り来る

スワ一大事バラモンの

枉神なりと耳すませ

月に透して眺むれば

祠の前に人の影

駒の嘶き騒がしく

人員點呼の聲までも

高く聞えて何となく

腕は呻り肉踊り

此伊太公は忽ちに

吾身を忘れ杖を揮り

群がる軍に突進し

足踏み外し谷川へ

落ちたる隙を無残にも

高手や小手に縛られて

名も恐ろしき岩窟に

連れ来られしぞ果敢なけれ

悪鬼羅刹の集まりて

吾を虐待するものと

心を定め来て見れば

豈圖らむや三人の

男は忽ち打ち解けて

酒倉開き胡床かき

四人一所に向ひ合ひ

秋の夜長をエラエラと

歡ぎ樂しむ面白さ

案に相違の伊太公は

心の腹帯ゆるみ出し
あななひけう
三五教やバラモンの

教の蘊奥を談りつつ
あか
漸く一夜を明したり

かかる所へ入口に
とつぜんきこ
突然聞ゆる人の聲

イルの司は驚いて
まつこつたいしやう
松公大將がやつて来た

暫くお前は牢獄へ
はい
這入つて呉れえと頼めども

神の使の吾々が
けが
汚れ果てたる牢獄に

如何して忍び入られうか
イクとサールの兩人が

力限りに伊太公を
な
投げ込みやらむとする故に

伊太公は是非なく逆らひて
も
揉みつ揉まれつする折に

松公さまが入り来り
ばんじ
萬事の事情判明し

こんな嬉しき事はない
これ
之もやつぱり三五の

尊き神の御恵み
ウントコドツコイ
ドツコイシヨ

河鹿峠の急坂も
ここ程きつい事はない

何故又こんな難所をば
バラモン教はドツコイシヨ

選んでゐるのか氣が知れぬ 馬も通はぬ高山に

砦を構へて何にする あゝ惟神々々

神の御稜威の現はれて 敵と思ひし松公に

會ひ度い見たいと戀慕ふ 玉國別の御前に

連れて行かれる事となり 手の舞ひ足の踏む所

知らぬばかりになつて來た あゝ勇ましし勇ましし

神は確に天地の 中に居ますと云ふ事は

これでも確に分るだらう これこれ松公龍公さま

其外三人の番卒よ これから心を改めて

誠の道に立ち歸り 救ひの神と現れませる

神素盞鳴大神の 御前に誠を捧げつつ

神の御子と生れたる 其本分を務めあげ

ヤツトコ ドツコイ ドツコイシヨ 此世を去りし其後は

千代萬代の花開く 無上天國浄土へと

上り行くべき其準備
やつておかねばならないぞ

物言ふ暇も死の影は
吾等の周囲につきまとふ

口ある内に神を稱め
手足の働く其中に

誠の行ひ勵みつ
天と地との經綸に

任ずる身魂となりませよ
あゝ惟神々々

神の御前に伊太公が
誓ひて汝に宣べ傳ふ

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

ウントコ ドツコイ ドツコイシヨ
假令大地は沈むとも

此世を救ふ生神は
國治立の大御神

豊國主の大御神
神素盞鳴の三柱ぞ

この大神を差措いて
吾等を助くる神はない

天教山や地教山
コーカス山やウブスナの

山に建ちたる齋苑館
靈鷲山や四尾山

所々に神柱
配りて世人を救ひ行く

あななひけつ
三五教は天下

せかい
世界に目出度き教なり

いの
祈れよ祈れ皆祈れ

あさ
朝な夕なに慎みて

しんかうをこた
信仰怠る事勿れ

あゝ
惟神々々

みたまさちは
御靈幸ひましませよ

うた
と歌ひ乍ら時雨のまぜつた晩秋の風に面をさらしつつ、さしもに嶮しき清春山を
くだ
下り行く。

（大正一一・一一・二八 舊一〇・一〇 北村隆光録）

第一八章 石室（一一一六九）

谷の下り道、半分許りの所に七八人這入れる石室が穿たれてあつた。俄に吹き
く
来る山嵐、大粒の雨さへ混つてゐる。松公は、

「オイ、伊太公さま、其外一同の者、かう雨風が一度に襲来しては下りる事も出来ない。幸ひ此石室で雨風の過ぐるを待つ事にしようではないか」

龍公「そりや結構だなア、皆さま、一服しませうかい」

伊太公「大變に氣もせきますが、仰せに随つて雨をまつ事に致しませう、別に吾々の體は紙で拵へたのではないから、少々雨位構ひませぬが、皆様がお氣の毒だからおつきあひに憩ませて貰ひませう」

入口の戸もない石室に侵入し、天然の岩椅子に各自腰をかけ、暫く足をやすめて居た。龍公は俄に顔色蒼め、冷汗をかき、ブルブルと慄ひ出した。一同は驚いて「ヤア何だ何だ龍公確りせぬか」と周圍からよつて集つて撫でさする。龍公は汗を滲ませながら齒をガチガチ云はせ、團栗眼を「むき」出した。

松公「ヤアこいつは困つた、とうとう瘡に襲はれやがつたなア、モシモシ伊太公さま、どうしたらよろしからう」

伊太公「困つた事になつたものだ、こりや瘡に違ひない。途中の事と云ひ、どうも仕方がない。瘡をおとすには病人の頭へ挿鉢をかぶせ、艾を一つかみ其上にの

せて灸を据ゑると直落ちるのだけれど、搦鉢もなし、艾もなし困つたものだ」

松公「一體瘡と云ふのは何神の仕業でせうかなア」

伊太公「瘡は皆死靈の業だ。谷川へ陥つたり、池や沼に落ち込んだ奴の亡霊が憑依するのだ。硫黄温泉でもあれば、そこへ突込んでやれば直退散するのだけれど、困つたところで瘡をふるつたものだわい」

松公「温泉へ入れたら瘡が落ちますか、ヤアそりや聞き初めだ。幸ひこの谷道を一丁ばかり右へ下りると、昔から硫黄温泉が湧いて居るとの事です、そこへ浴れてやつたら何うでせうなア。貴方もお急ぎでせうが、どうせ玉國別さまも治國別さまも祠の森をお離れなさる氣遣ひはないから、一寸そこ迄廻つて貰へますまいかなア」

伊太公「そりやお易い事です、人の苦しんで居るのを見捨てて行く譯にも行きませぬから」

松公「そりや有難い、そんなら御苦勞になりませうかなア」

龍公は齒をキリキリと云はせながら目を怒らせ、

「オ、俺は決して死霊ではないぞ、瘡でもないぞ、大黒主に仕へ奉る八岐大蛇の片割だ。汝等五人の不届者奴、俺達の仲間を滅さむと計る、素盞鳴尊の手下、玉國別や治國別に甲を脱ぎ吾々に背くやつ、決して許しは致さぬぞ。此龍公が命を取り、次には松公が命をとり、イル、イク、サール三人の奴は申すに及ばず、伊太公迄もとり殺してやるのだから、其覺悟を致したらよからう」

松公は口を尖らし乍ら、

「伊太公、あんな事を云ひますわ、これでは温泉も駄目でせう、何とか工夫はありますまいかな」

伊太公「瘡でないと分れば、又方法もあります。サアこれから三五教獨特の鎮魂を以て惡魔を見事退散させて見ませう」

松公「どうぞ宜しう願ひます。オイ三人のもの貴様も一つ祈つて呉れい」

茲に伊太公、外四人は一生懸命に兩手を合せ、惟神靈幸倍坐世を十回許り唱へた後、伊太公はポンポンと手を拍ち天津祝詞を奏上し終つて天の數歌を二三回唱ひ上げた。大蛇の憑靈は、天の數歌に怯ぢ恐れ、龍公を其場に倒して逃げ去つて

了しまつた。龍公たつこうは「けるり」として汗あせをふきながら、

「ヤア苦くるしい事ことだった。ようマア伊太公いたこうさま助たすけて下くださつた、何なんとマア三五教あななひけうの

お經きやうはよく利ききますねえ」

伊太公いたこう「マア何なにより結構けつこうでした。三五教あななひけうではお經きやうとは申まをしませぬ、これは重要ぢゆうえうな

讚美歌さんびかで、天あまの數歌かずうたと云いひます。皆みなさまもこれから間まがあれば、この數歌かずうたをお

唱うたひなさい」

松公まつこう「イヤもう義弟おとうとの命いのちを助たすけて頂いただき、此この御恩ごおんは忘わすれませぬ。サア雨あめも餘程よほど小

降ぶりになり、風かぜも熄やんだやうです。も一氣張ひとときばりですから、ポツポツ下くだりませうか」

と先さきに立たち、又またもや足拍子あしびやうしをとつて歌うたふ。

「青春山きよはるやまの下り路くだ 天下てんかにまれなる難關所なんくわんじよ

下くだる折をりしも龍公たつこうが 石室中いはむろなかに飛とび込こんで

ガタガタ ブルブル慄ふるひ出だす これぞ正まさしく「ウントコシヨ」

「ヤツトコドツコイ六むつかしい 足踏あしふみ入いれる所ところもない」

瘡おこりのやつに違ちがひないと

滾こんこん々湧わき出でる硫い黄わうの湯ゆ

評ひやうじやう定じやうして居ゐる最さい中ちゆうに

俺おれは死しりやう靈りやうぢやない程ほどに

俺等おれらの仲なか間まを倒たふさうと

神かみの手下てしたに歸き順じゆんして

事ことをするから龍たつ公こうの

松公まつこうさまや三人さんにんの

取とつてやらうと嚇おどしよる

吃びつくり驚おどせずには居をられぬ

三五あななひけつ教けつの伊太公いたこうは

一二ひとふた三みツ四よツ五いつツ六むツ

萬よろづの曲まがを拂はらはむと

天あまの數かず歌うた歌うたひあげ

心こころをいたため谷間たにあひに

そいつへ入いれて助たすけよと

龍公たつこうのやつが口くちをきり

八岐やまた大蛇をろちの片割かたわれぢや

企たくんで居ゐよる素盞すさの鳴をの

「ヤツトコドツコイ」怪けしからぬ

命いのちを先さきに奪うばひとり

大事だいじの大事だいじの命いのちまで

俺おれも些ちつとは「ドツコイシヨ」

狼うろた狽たへ騒さわぎ居をる中うちに

神變しんべん不思議ふしぎの鎮魂ちんこんと

七八ななやツ九ここのツ十たりも百ち千

聲こゑも涼すずしく「ドツコイシヨ」

雄建をとびませば惡神わるがみは

其神力に怯ぢ恐れ 雲を霞と逃げよつた

あゝ惟神々々 神の恵は目のあたり

俺もこれからバラモンの 醜の教を思ひ切り

神徳高き三五の 神の御教に従ひて

種々雑多と修業なし 名さへ目出度き神司

松公別と名乗りつつ 普く世人の悩みをば

助けにや置かぬ惟神 兄の命とあれませる

治國別の宣傳使 同じ腹から生れたる

「ウントコドツコイ」俺の身は 兄貴の眞似が出来ないと

云ふよな理屈はあるまいぞ あゝ面白い面白い

前途の光明が見えて来た 神徳高き素盞鳴の

誠の神に刃向ふは 命知らずのする事だ

俺はこれから心境を 根本的に改良し

神の御子と生れたる 其天職を詳細に

神かみの御前みまへに盡つくすべし
龍公たつこうお前まへも神様かみさまに

苦くるしい所ところを助たすけられ
尊たふとき事ことが「ドツコイシヨ」

漸やうやく分わかつたであらうぞや
何程なにほど人ひとが偉えらいとて

蠅はひ一匹いつびきの壽命じゆみやうさへ
一いち秒べう時じ間かん延のばす事こと

出で来きないやうな身みを以もつて
神かみに刃はむか向むかひなるものか

思おもへば思おもへば人にんげん間まは
神かみの力ちからに比くらぶれば

塵ちりか芥あくたの如ごときもの
もうこれからは神様かみさまに

體からだも魂たまも打うち任せまかせ
一いつ心しん不ふ亂らんに善道ぜんだうを

進すすんで道みちの御おん爲ために
力ちから限かぎりに盡つくさうか

あゝ勇いさましし勇いさましし
長ながい坂さかでもドンドンと

一ひと足あし々あし々あし下くだりなば
遂つひには麓ふもとにつく如ごとく

如いかに小ちひさい信しん仰かうも
積つもれば遂つひに山やまとなる

山やまより高たかく海うみよりも
深ふかき尊たふとき神かみの恩おん

報むくいまつらで置おくべきか
此この世よ計ばかりか神界しんかいへ

國替へしても神様が 矢張り構うて下される

眞の親は神様だ 戀しい親に死別れ

今迄悔んで居たけれど それは此世の親様だ

萬劫末代變らない 吾身を救ふ親様は

神様よりは外に無い 思へば思へば有難や

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 神に任せた其上は

如何なる事か恐れむや 地震雷火の車

大洪水の來るとも 一旦覺悟をした上は

誠の神の立てませる 三五教の御道は

決して決して捨てはせぬ 「ウントコ ドツコイ ドツコイシヨ」

大分坂も下りて來た もう一氣張りだ皆さまよ

足許用心するがよい ここは惡魔の巢窟だ

うかうかしないと大蛇奴が 何時憑くか分らない

